184
TA84

人生徹底解決の鍵

田中智學先生著

天業民報社發行

始

ハエ3N-26
184
TA84

田中智學先生著

人生徹底解決の鍵

天業民報社發行

966
246

發行の辭

人生徹底解決の祕鍵は、直ちに大東亞聖戰完遂の鍵に通ずる。

今われ〳〵は戰つてゐる。敵米英を擊摧して、一日も速かに東亞の安定を確保し、進んでは世界の平和進運に寄與すべく、一切の資財を盡くし、血肉髓腦をさゝげて戰つてゐる。この時この際、左顧右眄、ほとんど何物をも顧みるを許されない。しかしながら眼前のあらゆる事象は、已に驚くべき變貌を遂げ、そして今なほ社會も人生も、國家も世界も、一瞬の休みもなく非常なる速度を以て、その脱皮の巨歩を進めつゝある。外は早くも東亞の大共榮圏成り、內は國民生活機構の革新が加速度的に强行されてゐる。まさしく、これ天地法界の

一大機動、人生徹底解決の大機！

われ等の住する國土は既に大きく開け、大きく變動した。しかして其處に依據するわれ〳〵の身心もまた俱に大なる變動を遂げ成すべきは、これ自然の理數にあらずや。新たなる革囊には正に新たなる酒を盛るべし。酸敗せる酒は捨てられ、そして新しき神酒が醸し出されねばならない其の時である。枯葉は地に落ち、腐木は土に還へり、而してそこにかんばしき双葉の新生を觀る。山は裂け海は飜つて、而してそこに未見の珍寶珠玉の現出を見る。寶塔の涌出であり、寶庫の現在前である。今ぞまさしく久遠の昔よりこのかた人類の前に祕められた至寶の奥藏が開かるべき其の秋が訪れたのだ。

寶塔は虚空に涌出し、寶庫は地表に露出し來つた。而して、今はたゞそれを開くべき祕鍵の所在を探し求むるばかり。鍵は何處に、祕鍵のありかはいづくぞ。焦るなかれ、あわつるなかれ、願はくはなほ忙中閑日月あれ、鐵火矢石の間にもなほ禪思靜慮、靈犀一點の光を投じ來つて、須らく祕鍵の持者に拜跪せよかし。祕鍵の主はすでに久しくわれ等の登詣を待つ。左顧もいらず、右眄も不要、たゞ質直意柔輭に、その人その法に歸投せば足る。

重ねていふ、人生徹底解決の祕鍵は、直ちにこれ大東亞聖戰完遂の妙鍵に通ずる。嗚呼、本書まさに世に出でざるべからず。

これを發行の辭となす。

昭和十八年十二月十七日

天業民報社　敬白

人生徹底解決の鍵

目次

序說　人生解決の要諦……三

本論　壽量品の徹底研究……二五

第一講　社會の徹底救濟……二五

第二講　壽量品の實踐的活現……四五

第三講　生活の靈化……七一

第四講　理想と現實の一致……一〇〇

第五講　世界救濟の起點……一二九

第六講　國家と共に成佛せよ……一六九

人生徹底解決の鍵

序說　人生解決の要諦

今回當一之江に於て日蓮主義講習會をはじめて開く、これはもう數十年三保の最勝閣で年々開いて來た、それをこゝに移したので、何分こゝの設備も新らしく、謂はゞ歸り新參のやうなもので、萬事準備不整頓であります、追々諸々の缺をおぎなつて完全に整へるやうにするつもりで、その係りの者も專心努力してをる、そんなわけで始めてお出でになつた方も、これまで度々來られた方も、どうぞその點は偏へに集まりの方々が互に加勢をなすといふ考へで、萬事親しく腹藏なく相助け合つてその目的を完全に遂行するやうに御配慮願ひたい次第である。

なほ本日開講に際して、實は早朝にも歸宅して式にのぞむ豫定でありましたが、何分數時間つづけて乘物に乘ることが健康上許さぬ、東京に一泊して、少し他にやむを得ぬ仕かゝつた用事もあつて、又天候不良のため萬事意の如くなりませんで、甚だ遺憾に存じます、本日はさういふ次第でありますから、正科講演を省略しまして單に來會諸君に御挨拶をする程度で、いさゝか今回

の講課の題目たる本領にふれて、多少基礎的講話の幾分をとゝろみたいと思ひます。

それで幹部一同からも、今度私が旅中で病氣になつたことについて、前年の例にこりてをるものだから、時間を短縮するか或は隔日に出講するやうにといふ文書をこの間よこした、もちろん醫者は今の氣候では大聲を出してふんばることが宜しくないといふ、一時大分平穩に歸したのでしたが、先般少々無理をして、それが爲に又非常に耳鳴りがはじまつて來て、實は何どき逆上して腦の鬱血を來すか、或は甚しきに至つては溢血の徵候を來たさぬとも限らない、自分も警戒してをるわけです、そんなわけですから、或は時間を短縮するやうなことになるやも知れない、成るべく自分は努めて出講したいと思つてゐるが、そんなわけですから今日は講座以外の變則の題で話を少ししたいと思ふ。

◇

そも〳〵今回撰んだ講題は「法華經壽量品の徹底的研究」といふことにある、これは十日ばかりの日で、例へば朝から晩まで話してみたところで、壽量品の法門義門の一切を研究しつくすといふことは我々凡下では到底出來ない、然しながら今この世の中の有樣を見ると、諸方面とも非常な行詰りである、人は多く經濟國難だとか思想國難だとかいふことを以て、當面の急なりとしてをるやうであるが無論それも國難にはちがひない、然しその國難といふことは、單に經濟や思想ばかりが突發的に來るものではない、元來は國民の思想といふよりはもつと緊切な所に狂ひが來てをる、それは言葉を正していふと、國民意識といふものがぐらついてゐる、如何にせば日本國民としてその本分を盡し得るか、如何にせば人間としての、即ち人生の眞價値を把住し得るかといふことを極めないで、極めないはさておいて知らうともしない、そして何が故にそんな風になつたかといふと、先づ日常の生活におびやかされる、その生活が消極的にはいろ〳〵な方面で脅威を與へてゐる、即ち安定を缺いてをる、それから積極的の方面からいへば、不良生活が跋扈してをる、その爲に苦しまんでもよい苦しみを求めてゐる、例へば食物にしても住居にしても衣服にしても、文化の進展に盲從してたゞ拍子なく向上する事を喜んでゐる、無論生活の向上することは人間の進歩であつて惡いことではない、經文にも淨妙の五欲とあつてそれが人間の眞の理想である、決して惡いことではない、けれども淨妙の五欲を欲求するにはそれだけの準備がなければならぬ、準備なくして自己の生活を向上しようといふ爲に無理をする、例へば着物にしても住むところにしても、日本人は日本人としての民族的の傳統風俗があるんだから、それを守つてをれば差支へないのに、西洋の眞似をして洋服を着るとか、さうすると矢張り洋服を着て座布團の

上に坐つた格好は餘りよくない、又かつ不自由である、だからどうしても勢ひ椅子に腰をかける事を便宜とする、さうしてみると日本の着物も着ない譯にいかず、さりとて洋服もいることになる、そして今度は洋服に敎はつて西洋風の座敷でなければならぬといふ事になる、これでもう衣食住の中の衣にも住にも生活が二重になつてくる、その他色々の外來文化からそゝのかされて、種々な新しい社會現象が頻々と續出して來る、續出して來るに從つて人間娛樂や趣味といふものも動いて來る、口には美味をあぢはひ、目には變つたものを見、身體はなるたけ動かさんやうにして用の足りるやうにとなるから、歩いて行つて用の足りるところを車に乘るやうな事になる。

◇

こんなことからして安易をむさぼり、逸樂をむさぼり、所謂享樂主義といふことが人間の精神を浮華放縱に導くことになつて、浮いた生活、浮いた趣味、浮いた娛樂の爲に少からず積極的生活の方面に變動を來してきてゐる、身心共にさういふ風になつてゐるから、安らかに天の美祿を食つて滿足するといつたやうな、從容自適の生活は出來ない、無理に作意して妄的本能を滿たさうといふやうな事の爲に、役々汲々としてゐる狀態である、これが爲に社會相の動搖が大きくなり劇忙をきはめる、從つて精神を勞する、神經が過敏になる、ところが身體の方はさういふ譯にいかない、所謂逸樂に馴れる、從つて體質が弱くなる、そこに世の中の思潮が煩雜になつてくる、東京などの大都會では道路をずん〳〵造る、一體いふと人間としては道路はあゝいふものはいけない、人間は土を踏まなければならぬ、ところが土はぬかるからといつて舗裝道路にする、自動車の爲には便利だが地面を露出しないから吸收力がなく、あらゆる塵埃がうづくまつて風によつて動く、從つて諸々の黴菌、就中病菌を紛散して所謂『魔が小身を現じて衆生を惱ます』といふやうな工合で、微細な動物や植物が殖えてくる、そいつが放散游離して八萬四千の毛孔からも鼻からも口からもはいるから人間が弱くなる、そこにもつていつて精神力が過重な負擔をして心身共に疲れる、その神經衰弱の結果ろくな事は考へない、だからこれを安易にするには當面の感受性を滿足させる、即ち逸樂を追ふやうにするより外はないやうになる、そこで下らない娛樂が多くなる、それも刺戟の强いものである、どうしても人間を弱からしめ、いら〳〵する性を養はしめ、忍耐力自彊力反省する力をなくなし、爪先歩きで飛んでゐるやうな狀態の世の中をつくつたのだが、これを經文では「所惡」「人惡」「時惡」といふ、所の上の惡習、人の性格に現はれる惡習、時代のまねく惡習、かういふものが瀰漫してゐる、その結果、精神の根本に腐蝕を生じて來る、あられもなき量見をおこし、惡心を抱く、これを三惡道充滿の世といふ、五濁と經文に說

いてある、『劫濁、煩惱濁、衆生濁、見濁、命濁』この五つのにごりである、その五つのにごりが、今日の時代の爲もあり、又人間自らが不用意にして招いたものもあり、いろ〳〵な原因が内外相應じて五濁の相を旺盛にしてゐる。

釋尊出現の當時、今から二千八百年昔と今と對照してみると、その五濁の度は非常に濃厚になつてゐる、こまかくわけると、釋尊御入滅後を正法像法末法とわけて現代は末法、その末法の中でも惠心僧都の時分が像法と末法との境界であるといふ、ある時惠心の庵室に坊さんが大勢寄つて話しをしてゐた、その時若い僧侶がけたゝましく驅けつけて、何事の大事件が起つたかのやうに僧都のもとに出て、唯今怪しからんものを見たといつて報告した、專心僧都が何だと訊ねたところ、比丘尼が風呂敷包みをしょつて在家の供をしてゐるのを見たといつた、それをきいて僧都が驚いたが、だん〳〵考へてみると、年代をくつてみたら、丁度その日が像法の終り、末法のはじめの境界の日であつた、實に爭はれんものだ、經文の活きた實例は斯の如き現象であるかといつて、今更の如くに感歎を深うしたといふ話しがある。

◇

僧侶といふものは古來師分のもので、比丘比丘尼共に物を教へる師分のものである、在家のものは法を聞くから優婆塞優婆夷共に弟子分である、何であらうと師分にあるものが在家の供をしてゐるといふ事によつて、世の中の非常な推移がそこに現はれてゐるといふことを物語つたものであるといふ話がある、それがだん〳〵濃くなつて來て、そんなことで驚いてゐるどころではない、それが當り前のやうになつた、甚だしきに至つては比丘尼が風呂敷包をしょつて在家のお供をしてゐるどころではない、却つて在家のものがお寺にはいり込んで、寺の財物を横領しようなんてことも、頻々として活きた證據が現はれてゐる、道を以つて立つべき宗團の中に斯の如き亂れがあるとすれば、その教法の歩武堂々たらざることはいふまでもない、であるからそれでは教が世に徹しない、徹しないから世の中は狂人が番人になつたやうなもので、食ひ放題、飲み放題さういふ形になつてゐる、それが五濁濃厚の世の悲しさで仕方がないといふものゝ、またいかに時の成行きといふものゝ、眞に國を思ひ世を慨するものゝ上から考へたら、これを時の流れだ仕方がないといつて放つておけない、『每ニ自ラ是ノ念ヲ作ス、何ヲ以テカ衆生ヲシテ無上道ニ入リ速カニ佛身ヲ成就スルコトヲ得セシメン』といふ、如何なる方法手段を以てしてなりとも此の佛の無上正法に入れしめて、そして速かに佛身を成就さしてやりたいといふ、此の本佛の止むにやまれない大慈大悲の御心を奉じて、社會救濟の聖運動をおこされたわが大聖人の三大誓願の

御趣旨は、潑剌として此の世の中に生命づけられてゐる筈なんだ、天にもそれを仰せられてある地にも仰せられてある、深く心にも仰せられてある。

それは本佛の示教を受けて、別付囑の上に於いて、この末法の時代、すなはち五濁亂漫の最も旺盛なる惡世をば救ひ導くために、特別の方法として唱へられたのが本化の教法である、月並の佛法ではいけない、であるから特別なる大慈悲心、特別なる大智慧、斯ういふ大自在がいるのである。

◇

そこで一般の菩薩の普通のかいなでの佛法ではいけないから、『止ミネ善男子、汝等ガ此ノ經ヲ護持センコトヲ須ヒジ』といつて、一切の迹化の菩薩の弘經をお止めになつた、『止ミネ善男子、汝等ガ此ノ經ヲ護持センコトヲ須ヒジ』とは即ち本化の菩薩をのぞく他の菩薩及ぼしては迹佛にも影響して行くのである、それは今の所論と違ふが、兎に角普通の言葉でいへば、一般の一通りの佛法ではいかんといふ、即ち特別の佛法でなくてはいかんといふ、特別の佛法とは何だといふと、釋尊が特に末法のために殘された教へである、さういふ教があるかといへばある、法華經は特に末法のために殘された教である。

けれども此の法華經にも文上と文底とある、文上の義理は末法には用にたゝない、別しては末法とある、末法の中に於ても、たゞ末法だからといつても、時代が後になつて末法の現象が增惡してくれれば、その法華經の效力がより多く發展する時である、然しこれは中心人物がなければそれが出來ない、法華經はある、こゝにある、誰でも讀める、天下一般に通用する文字で書いてあるが、その法華經を解釋してその通りやつたらよいかといふと、さうはいかない、これは法華經の特殊なる所有權のあるものがいじらなければ効がない、その特殊なる所有權は何であるかといふと本化の菩薩にその鍵を渡してあるから、鍵のないものはいじれないといふことになる、だから『止ミネ善男子』といつて、一切の菩薩を押止められた、だから大聖人が『止ノ一字ハ日蓮門家ノ大事ナリ、秘ス可シ秘ス可シ、總ジテ止ノ一字ハ門家ノ明鏡ノ中ノ明鏡ナリ、口外モ詮無シ上行菩薩等ヲ除イテハ、總ジテ餘ノ菩薩ヲバ悉ク止ノ一字ヲ以テ成敗セリ』と仰せられて、此の一字を以て一切の迹化の菩薩の弘教を取消した、菩薩といへば地藏に限つたやうに考へ、佛といへば阿彌陀のやうに考へ、何があつてもベソ〳〵ニコ〳〵したものゝやうに思ひ、宗教といへば當面の煩悶を除くものだと解してゐる、所謂宗教學的にいふものはだめだ、だから一般佛教ではだめだ、『餘經モ法華經モ詮ナシ』と大聖人は仰せられた、法華經を生命がけで弘めた大聖人が法

華經を否定したのは何によるか、又『法華經ハ文字ハアレドモ衆生ノ病ノ藥トハナラズ』と仰せられた、さうすると法華經の文字はあつても、衆生の病の藥とならない法華經と、藥になる法華經と兩方あることになる、それは確にある、そのことをいはれたのだ。

◇

これに着眼しないでたゞ佛法といへば佛法、法華經といへば法華經、といふやうな御息災の考へで此の世の中を扱はうとるすから、何時までたつても此の五濁の闇は消えない、ここに於て本化の菩薩が時代に適應して、内は本門の別付囑といふ、即ち特別なる付囑を受けた例の鍵、それによつて本化の菩薩がこゝにはじめて『法華經ハ文字ハアレドモ衆生ノ病ノ藥トハナラズ』といふその法華經でなく、『餘經モ法華經モ詮ナシ』といふ法華經でなく、まつたく衆生成佛の直道たる特殊なる權能によつて、特殊なる效用のある道を開いたといふのが本化別頭の化導、別頭といふのは別の行意といふことである、『別頭ノ教化、所有ノ眞應、彌勒ノ境界ニ非ズ』と妙樂も釋してある、してみると別頭の教化から起つたあらゆる眞身應身の教化は到底迹化の菩薩の知るところでない、彌勒の知るところでないといふ斯ういふ教、だから大聖人が本意を顯された時、『國難ヲ顧ミズ、五々百歲ヲ期シテ之ヲ演說ス』『前代未聞惑耳驚心』といはれた、定めて耳を惑はし、心を驚かすであらうといふのである、してみると日蓮聖人の教化は、先天の條件として惑耳驚心することがついてゐる、御多分に漏れないやうな遣り方では、それは序のこと墮落してしまふ、これを墮落より引上げて眞の常寂光土の出現を見るといふには、どうしても一ぺんまづ惑耳驚心するといふ條件を加へなければならぬ、驚かないやうな平々凡々たる教では、矢張り無效力である、それを深く考へてみなければならぬ、それは何に法門の根據があるか、これは先づ總じては法華經である。

けれども佛法の通則として義理を釋するのに文義意の三重といつて、經文なら經文の文上の義理、それからその文の含んだ義、文よりもう一重立入ると義だ、義は文を會して宜しきに從つてその意味を疎通する組織を義といふのだ、諸々の法門とか義門は皆この義に屬する、それから義の重心は何だといふと、はじめてこゝに意といふ、文義意の三重だ、だから法華經の上でいつても文の法華經、義の法華經、意の法華經と三つある、深い淺いの解き方がさら三だんになるといふ、これを例へてみると皮と肉と骨だ、皮も肉も骨も皆必要だが中心をいふと骨だ、それに肉がついて皮がそれを蔽うてゐる、文義意といふのは即ち皮肉骨だ、本化の教即ち大聖人の教は文義意の中では意の法華經である、『妙法蓮華經ノ五字ハ文ニアラズ、義ニアラズ、一部ノ意ナリ』と

斯ういはれた、意とはさういふ尊いものである、よつてこれを骨髓といふ、法華經の眼目、一切經の骨髓と相場がきまれば、はじめて世の中を見て世の中を救ふといふ上に、どんな程度に救ひ得るか、どこまでの效果があるかといふことがわかる、徹底して一切衆生を救ひ得るといふことはこの本化の法華經でなければならぬ。

◇

『是ノ好キ良藥ヲ今留メテ此ニ在ク、汝取ツテ服スベシ、差エジト憂フルコト勿レ』と經文にある『今留メテ此ニ在ク』といふのは卽ち末法の爲に留めおかれた、その留めおいてそれによつて出て來る人は誰であるかといふと、今の『止善男子』と差止めておいて、わが滅後に娑婆世界に自ら此の任に當るものがあらう、お前達は關係はない默つて引込んでをれといつて、一切を差止めてしまつて、特に呼びおこした菩薩が何あらう本化の菩薩、あらゆる菩薩よりも超え勝つた立派な菩薩で、さすがの彌勒も腰を拔かすほどの菩薩が、しかも多數の菩薩が現はれた、それが問題の中心だ、これから佛法が二つに分れる、それは人生問題のケジメである、社會問題の解決であり、あらゆる人間の一切の事を解決するのは、ここで運命がきまるわけである、だからいくら經を讀んだといつても、佛學をしたといつても、あらゆる世間の學をしたといつても、どの位博識多才であつても、それは物をたんと知つてゐるもので、知つてをれば人間は利巧になるが、それだけでは此の人生問題の結着において、これを解決するところのツボをはづしたもの、調子はづれの三味線をきいてゐるやうなもので、一向調子が合はない、宗教を談じ佛法を論ずるものでも、佛教の中に斯ういふ一大關節があつて、やんごとなき解決點があるのに、これを知らん顏をして知らず顏に他の理窟をせゝつてゐるといふことは、全く佛教の根柢に於て用意をかいてをるのみならず、また人生問題についても忠實を失したものであるといはなければならぬ。

◇

これらの點が今日の世の中にあつて、何より急務だ、何より緊切な問題である、この目の前に迫つてゐる必要な問題を閑却しておいていくら宗教を論じ、人生を考へてみてもそれは無駄なんだ、時代は迫つてゐる、病人があつて醫者を要求する如く、身貧にして財を望むが如く必要に迫つてゐる時だ、この根本問題を解決してかゝらなければならぬ、それは卽ち法華經の中心眼目たり、退いては佛教の死活にかゝり、進んでは世間の興廢にかゝはる中心の佛法、卽ち「意」の法華經を學ぶことを考へなければならぬ、諸の信仰も安心も處世も、また我々の國民生活も社會生活も皆この一つで將棋倒しに埒があいてしまふ、それが皆成佛道の道といふのだ。

即ち立正安國である、その奥義を極めるといつても理窟の上で極めるのではない、これをわが信仰の上に固く把住するといふ求道的態度を以て、如何にせば此の混亂せる現代を快刀亂麻を斷つが如くに解決し得るであらうか、如何にせば百花爛漫として寂光の春を見るが如き世の中になし得るであらうかといふ、我等の希望要求に對して、これに答へを與へるものは法華經の壽量品である、法華經壽量品の精神がわが信仰の上にこびりついて、わが信仰の上に力となつたらばそれでよいのである。

◇

同じく日蓮主義といつても、無方針に日蓮宗の書物を讀んでそしりはしりを知り、それを振りまはしてゐるといふやうな程度ではいくらさういふ宣傳や布教をやつても何にもならぬ、實際の世の中は救へない、世の中はそんなものは置き去りにして先に行く、進歩ならいゝが墮落して行く、これ我々日蓮主義者が今日のこの五濁爛漫の巷に立つて如何なる叫びをあぐべきか、如何に處置すべきかといふことの、目前に迫り來つた當面の問題である、よつてこゝに此の講習會は先づ佛法の中心たる法華經、法華經の中心たる久眼目たる壽量品、わが本化大聖人の世を救ふべき目安とされた三大秘法の研究、活きた法華經、活きた人生社會の解決たるその鍵を握つた法華本門の實義、その大斷案を決定するには、ただだらう話しではいけないから、先づ規則正しく達意的になりとこれを徹底攷究しなければならぬ。

さういふ重大意義をもつた法華經の中心眼目たる、單に教義學說といふ上からいつても中心である、又吾々の實際の信仰の上からいつても力の源である、『日月ノ光明ノ能ク諸ノ幽冥ヲ除クガ如ク、斯ノ人世間ニ行ジテ能ク衆生ノ闇ヲ滅ス』といふ此の日月は、即ち壽量品である、『壽量品ノ事ノ三大事』とも仰せられた、一切を壽量品の中に寄せ集めてしまつて、こゝに吾々衆生の生命を發見し、獲得するのが本化の信仰の所期目的である。

斯くの如く觀察し來つて吾々が、今日の社會が、如何に壽量品の研究を必要とするかを知り得やう、壽量品の中の偈文即ちお自我偈をば、文字は僅かに五百十字だが、壽量品の要領を說いて餘すところなき、周到綿密にお說きになつた此の不思議な經を、凡そあらゆる經典を見ても自我偈ほど平明なものはない、それでゐて自我偈ほど要領よく整つたお經はあまりない、それは何が故だといふと、即ち釋尊が時を得てのびやかに從容として心裕かにお說きになつた證據だ、勿論釋尊は漢語で述べられたのでも漢語をお用ゐになつたのでもない、文義通達の羅什三藏が梵文の意

をよく得て翻譯した、その譯文を通じて考へてみても、如何にこの御說法に對する釋尊の志氣が暢達してゐて、のびやかであつて、周匝でそして綿々としてその義を盡したか、僅か五百十字の中に一代の佛敎を綜盡し、人生の一切を解決する微妙の機關を具へたといふ、要中の要たる壽量品の自我偈が、一般の傳誦するところとなり、幸ひにして宗門傳統の慣例として如何なるものも自我偈を知らないものは法華宗にはない、法華宗ばかりではない、禪宗でも自我偈を讀む、それから他の宗旨でも佛法の敎義學說といふことになると、法華經に指を染めないわけにはいかないから從つて壽量品を多く讀む、だから法華經に對する講義解釋は多數の人によつて試みられた、これが流傳の最も盛であつた證據である、日本にも支那にも未だ渡らないが印度には法華經を註釋した學者が五十餘家の多きに及んでゐる、支那に渡つたのは天親菩薩の「法華論」位だが、印度にはまだ五十もある、それから支那でも法華經を盛んに弘めた、又日本でもあらゆる宗旨を通じて法華經をよく皆尊奉したものである、「本朝法華傳」といふ書物を見ると、法華經を讀んだり書いたりしたいろ〳〵な功德のみを集めてある、そのくらゐ傳誦が盛んであつた。

◇

ところでこの日蓮門下ではさすがに法華經の本場であるだけあつて、一般人が御自我偈を讀むといふのは、法華宗の一ばん眼目の大切なお經であるから、しかも僅か五百十字でよくお經の本意をつくし得たものであるといふところから、これを盛んに讀むやうに習はしをつけた、これは大聖人の御眞意によるところで、壽量品は法華經の眼目である、從つてその要をつんだ自我偈は二十八品の魂である、『自我偈ハ二十八品ノ魂魄ナリ』と大聖人はいはれた、そんなわけだから譯はよくわからなくても讀むだけはよく讀む、お寺方でもお經といふと何をおいても自我偈を讀む、餘りよく讀むから粗末にして自我偈ぐらゐといふが、實はそれくらゐ傳誦が盛んである、これを以て自我偈が如何に敎化に必要であるかを證するものである、幸ひであるから先づ私はなるべく自我偈の文を研究して壽量品の徹底研究を話さうと思ふ。

然し先づ經文全體の基礎的の文段文相を知らないでやつてもよくないから、それは講師を宛て、一人その衝に立つて皆さんの爲めに組織的に文段文相の註釋をさせることにしてある、私はその自我偈の徹底研究といふ方であるから要領を補足するやうに話をする、それから壽量品の中の特別法門たるものを又別けて、或は壽量品の必要課目たる三身常住であるとか、壽量品の佛身觀であるとか、又は失心不失心の依文であるとかいふやうな特別な義門は、それ〴〵幹部の人達が講ずることになつてゐる。

先づ今日の時代はひどい時代であるとすれば、此の位ひどい時代は今までもない、『三災七難ならび起る』といふが、今はその非常に深刻なのが起つてゐる、昔は米が出來ないと飢饉で金があつても買ふ米がないので餓死する、それが昔の飢饉だ、大聖人の時代はさうである、『旅客來ツテ嘆イテ曰ク、近年ヨリ近日ニ至ルマデ、天變地夭飢饉疫癘、遍ク天下ニ滿チ廣ク地上ニ逆ル、牛馬巷ニ斃レ骸骨路ニ充テリ、死ヲ招クノ輩既ニ大半ニ超エ、之ヲ悲マザル族敢テ一人モナシ』往來を歩いてゐても死骸が累々としてゐた、ところが今日は米がとれなくても、通貨さへあれば食つていかれる、それは世界交通の結果だ、然し今日野菜がドツサリとれても價が廉くて商賣にならない、埼玉縣から野菜をトラツクにつけて東京の市場に持つて來る、一年の丹誠をもつて作つた野菜を、丁寧に賣るやうにこしらへてトラツクに積んで東京に持つて來て仕切りを取ると、トラツクの代が拂へない、館林あたりから持つて來るとトラツク代が六圓かゝる、それで野菜が六圓にしかならない、トラツクの代しかないから汽車に乘つて仕切りを取りに來ると汽車賃だけ餘計かゝる、如何にも馬鹿々々しいから手數をかけて問屋に持つて行くよりも、畑に作つたものをといでその儘に積んで置いた方が結句損をしない、汽車賃の損をしないだけでも損はいかないと思つてゐるが、然し百姓としてものゝ美事に作つたものを腐らしてしまふことは如何にもしのびない、損をしても人の口にはいつたらせめてものことゝしてゐるといふ、これは農業道德から考へたらさうなるわけだ。

今の世の中が如何にひどくなつても、これは病である、病の治らんこととはない、療治すれば治る、生れつきの片輪ではない病的現象である、故に治すべき方法を以てすれば治る、然しながら藪醫者ではいけない、名藥でなければ治らない、即ち『是ノ好キ良藥ヲ今留メテ此ニ在ク汝取ツテ服スベシ、差ジト憂フルコト勿レ』とあり、『此ノ經ハ則チ閻浮提ノ人ノ病ノ良藥ナリ、若シ人病有ランニ是ノ經ヲ聞クコトヲ得バ病卽チ消滅シテ不老不死ナラン』とある、現世安穩の境界にまで救ひとるといふ大責任が日蓮主義者の頭にある、これはわが本化の大聖人の三大誓願、『我レ日本ノ柱トナラン、我レ日本ノ眼目トナラン、我レ日本ノ大船トナラン』と喝破されて一切の大事の中に國の最重大なることを明かして、一大事因緣の大法を日本に建立された。

◇

大慈悲の無緣の慈悲を以て一切の衆生に逆緣下種の大化を垂れられた大聖人の御化導、信ずるものゝ救はれるのは當り前である、誹るものも救はう、誹られても彼等に種を下してやらうといふ大法を以て、『諸(これ)を賈(うり)らん哉これを賈らん哉、我はよき價をまつものなり』として天に絶叫して

この大法を建設し、弘通なされた、その大聖人の誓願の海中に我等は飛び込んでその懷中に抱かれて、その血液をすつて、この日蓮魂をもつて世を救ふところに、大導師大船師たる大聖人の御事業の中にはいる道があるのだ、我々がやるのではない、我々は大聖人の大慈願海の中にはいつてしまへばよい、知らず識らず帝の則に從へばよい、それが日蓮門下の時代に處する唯一の本領なり目的なりである。

かるが故にこの意義を決定する徹底研究は壽量品の一角にある、そこで内は佛命の指すところに從つて研究し、外は時代のうながすところに從つて、昭和六年の今日こゝに大聖人六百五十遠忌の聖辰にあたつて、たま〳〵この壽量品の徹底研究を開いたといふことは、非常に意義あることゝ思ふ、況や現代思想の荒亂その極に達してをる今日、いよ〳〵以てこの法が現はれなければならぬといふ、時代の運命のうながしたものか、この御遠忌の聖辰にあたつて畏れおほくも　天皇陛下の御思召を以て大聖人の御墓に『立正』の二字をしたゝめられて、勅額を賜はることゝなつた、如何に運動しても斯ういふことは因緣感應の熟した時でなければ容れられるものではないまして外の宗旨の祖師高德の如く朝廷の御修法を承つたとか、勅願道場であるとか、朝廷に緣故をもつてゐるとかいふことのないわが日蓮聖人の侃々諤々たる中にあつて、政府と度々正面衝突して來た、所謂注意人物のやうな日蓮主義者の旗頭たる日蓮聖人に、立正の二大文字を下されて大聖人の德業を歎美されるといふことは、これは人爲の能ふるところではない、管長や身延の貫主が偉いからさうなつたのでなく、國難瀰漫の廻轉期に際して、おのづから此の法を興さなければならぬ時であるぞといふ天の計らひとして、この勅額の下賜となつたと思ふ。

◇

まして六百五十年の聖辰にあたり、現代世相の荒亂といひ、反宗教運動の勃興といひ、或は唯物思想の跋扈といひ、これは病が高潮したのであるから、救ひ得るところの能力ある藥と處方があれば、如何なる病氣も憂ふることはいらない『此ノ經ハ則チ閻浮提ノ人ノ病ノ良藥ナリ、若シ人病有ランニ是ノ經ヲ聞クコトヲ得バ病卽チ消滅シテ不老不死ナラン』とある、世界問題の一切を解決すべき鍵は法華經にある、『若シ人病有ランニ是ノ經ヲ聞クコトヲ得バ病卽チ消滅シテ不老不死ナラン』とある、必ずしも理窟を以て研究するのではない、科學哲學の分域を超勝して、正しい意味に於いて、『是ノ經ヲ聞クコトヲ得バ』とある、「聞」の字は實に大切だ、名字卽の位を決するところの文字であるから、自我偈の中にも『是ノ諸ノ罪ノ衆生ハ、惡業ノ因緣ヲ以テ阿僧祇劫ヲ過グレドモ三寶ノ名ヲ聞カズ』とある、聞きさへすればよい、聞くといふことは直に意識を決

定するのである、即ち國民意識を健全にすれば、自ら病的諸問題は根本より解決される、政治家であらうが宗教家であらうが教育家であらうが、汚れを以て汚れを洗ふが如き今の有樣である、いよ〳〵以てわが徒の立つべき時である、いよ〳〵以て日蓮主義の光輝を放つべき時である。

◇

謂はゞさういふ事情であるからどうぞ來會求道の諸君は、この心を以て相いましめ、相誓つて國の爲め法の爲め充分の研鑽をつまれて、そして貴方がたの根本心に本善妙種の佛の種を植ゑて、先づ信仰的にこれを把住し、こゝは學校でないから理窟の講釋をしてゐる暇はない、又理窟では解釋出來ない、だから信仰の上に植ゑつけて、信仰の上に受けとつて安心する、その安心が信仰の肥料になる、そして信仰が固くなれば、千萬人と雖も我往かんの覺悟が生れる、『日蓮が弟子檀那ハ臆病ニテハカナフベカラズ』といふ氣節も生れる、それが「壽量品の徹底研究」の表題を立てた所以である。

病氣であつて長時間の講演は遠慮しなければならぬので、今日は諸君と初對面の挨拶として、總論といふほどでもないが、總論的に小講話を試みた次第であります。

本論　壽量品の徹底研究

第一講　社會の徹底救濟

本日、壽量品研究の第一講として「壽量品の三大事」といふことから話したいと思ふ、その三大事といふことは大聖人のお言葉で壽量品の三大事と說かれた、總じて當家の法門で事といふのは事の三大事といふことで、この事といふことは理に對する事で、これは普通にいふ事理相對してといふ時は、理がすぐれて事が劣るとなるのが先づ佛敎の通義である、然るにその事理といふ上で、當家でいふ事は普通にいふ事と少し違ふ、通途には『理眞事妄』と說かれて、理は眞で事は妄である、つまり理は正しい眞理、事は迷ひに屬する妄である、斯ういふ風に沙汰するのが普通の事理である、理は間違ひのないもの、事は間違ひのあるもの、即ち凡夫の上に現れてをるすべての現象は事であつて間違ひだらけである、それから佛菩薩の心に悟つた理といふものは妄を離

れた眞實のものだとして立てるのが普通の事理である。

ところが、これが法華經に來ると、佛と衆生と全然隔つて別のものとして解釋して來た法華經以前卽ち爾前經の教理では『理眞事妄』といふことになる、現前の一切の事實は皆虛妄の所爲である、貪々邪々惡覺妄想の凡夫の心の上に現はれて來るすべての所作、及びその心からつくりなした一切の現象はみな虛妄である、斯ういふ風に佛と衆生とを懸隔して見ると、さういふ風になつて來る、根元の原理はさうであり、又さう解釋するのがあたりまへである、然るに法華經に來つて諸乘一佛乘と開會し、九界卽佛界となり、佛の中にも九界の衆生のすべてが具つてゐるが如く、九界の方の中にも宛然佛を具へてゐるものであつて、九界佛界九一相攝して、その體これ一つであると、斯ういふ義理によつて法華經の本迹二門の法門といふものは成立してをる、その九界卽佛界として立つたといふ、これは十界を横に見た話であるが、佛界と九界とを横に平等にした横的平等、卽ちその横的平等の上からみると九界と佛界と隔たつてはゐないことになる。

◇

さてさうなつた曉に、今度は程度問題になつて來る、九界と佛界と何處まで同じであるか、全然同じものであるか、それとも條件付きで同じものであるかといふ問題が起る、四十餘年の經々あらゆる方便說の如く、全然佛と衆生と別になつてをれば問題はない、キリスト教の如く我々はたゞ神に服從しさへすれば教理も信仰も一切解決される、どんなに努力しても我々が天地萬物の創造の神となることは出來ないとなれば、これは問題があんまりない、ところが衆生卽佛であつて九界卽佛界であるとなると、然りと雖も佛と凡夫とはどう違ふか、佛は自在を得てをるが凡夫はさうはいかないといふことになる、それが同じだといふのは何處までが同じで何處から違ふかといふ條件付となつてはじめて問題が起る、山の如き法門義目はこれから始めて發生して來る、然しそれは整理されるやうに發生して行くのである、問題が多い爲にわからないやうになつてしまふといふのではない、どんなに問題が多くても法門義目が天地萬象のわづらはしさに堪へないほどあつても、根本の解決する標準が立つてをれば、多々益々辨ずといふことになる、佛法は義理が深遠である、だから群盲の象をさぐるが如く、小さい見識で探るとどうにもわからない、それであるから佛法を解釋するには佛の心に從ふといふ先決條件がついてをるのである。

◇

この頃よく人が、眞理は誰でも考へられるやうに思つて、我々は佛にも基督にもよらない、眞理によつてどうとかいふ人がよくあるけれども、眞理なんてものはさう容易く、夜店の植木を買ふ

やうな鹽梅に簡單にいくものではない、今日の人は學問の力で一切のことがわかるものだと思つてゐる、わからないこともないが、それは單に部分だけしかわからない、科學萬能の世だなんていつてるが、科學といふものはだん〳〵進歩して來ると、結局、科學の進歩の結果は何だといふと、宇宙萬有のことは科學では知り得ない部分が多いといふことを知つたのが、一番の進歩だといふ、その進歩しない中は一切わかることのやうに考へてゐる、それは宇宙萬有といふ天地間のあらゆる理法といふものは、科學だの哲學だのがあつて、それから後に出來たものではない、科學や哲學よりも先にある、後から色々な標準をつけたり名をつけたりしてやつて行くのだから、その見の狹少なうちは、それで一切のことはわかつたものだと早合點をしてをるが、だん〳〵見地が開けて來ると、未だわからないものが澤山あると判つて來るやうなものだ、科學も哲學もそれだ、それはその譯だ、人間の壽命には限りがある、どんな長命な人でも何百年とは生きられない、百年生きたとしても百年間ものを考へることは出來ない、赤ん坊の時もあるし少年の時もある、物心ついて、ものがわかつて考へたり書物を讀んだりする時まで進んだら、その先はさう幾年もない、その短い壽命の人間が、よし極めて聰明なものがあつても天地法界ほどの聰明な者はあり得ない。

人間の一代は短いといつても、幾代も〳〵かゝつて考へて、先輩の遺漏を補つていけば、幾代かの後には完全な識見も定まるといふ、斯ういふ風に考へるものが天下にあるが、それは一概にさういかんわけがある、先の人が考へたのを今度の人が考へて、その未解決のところを解決しようとなると、十代百代とたつていけば進歩するわけだが、さうはいかん、各々の考へは、各々の知識の度合、周圍の關係、束縛、感情等が伴つて一概にいかない、或る人は斯う考へたが後の人はさう考へない、そつくり其盡無條件で用ひることは出來ない、若し用ひても先の人が考へた通り行つてゐないで、量員の引倒しになることも往々ある、さうしてみると幾代たつたからきつとそれを考へ盡すやうになるといふことはいへない。

◇

それからも一つはその考へるといふ、哲學にしろ科學にしろ、所謂眞理を對境として考へるといふ、その考へる智慧そのもの〻質はどうであるか、この質が冷徹透明な智で考へれば、それはぼんやりした奴が考へたよりも優れてゐるには違ひない、然れども人間といふものはいろ〳〵な欲望といふもの〻爲にその心を使役せられる、その欲望の爲に使役されてその心は可成り疲れてゐるものである、又非常に忙しい、その忙しい、疲れてゐる、若しくは汚れてゐる透明を缺いた

心の作用の知識で物を考へて、透徹して考へられるや否や、即ち、專心集中するとしないとでは大變な違ひである、心を一境に制して、專らそれに意を注いでゐる時は、その心意力といふものは比較的強くはなる、劍術や柔道のやうなものを學ぶにも、一心凝つて學べば上達が早い、だから昔から仇討などがあつて、親の仇を討ちたいといつて一心凝つてやる、その根本の要求が手つだつて心を一境に止めるから人一倍上達が早いなんてことがある。

昔あるところに、劍術も何にも知らない山國の百姓だか漁師だかわからない者の親が殺されたんで、その仇を討たうといふので苦心した、ところが非常に邊鄙な山國だから劍術の師匠もない、劍術を習ひたいと思つても師匠がない、それでそれが專業だか副業だか知らないが、谷川の流れに鮎のやうな魚がをる、その魚を獲つてゐた、それが針で魚をつくことを職業としてゐた、相當うまくつける、それから思ひついて針で魚をつくことを練習して、それを親の仇を討つ技術にしようと考へ出してからとりわけそれに精勵して精神をこめてやつた、一年とか二年とかそのつもりでやつた、ところが大分うまくなつた、はじめは十突いて五つとか七つとか逸れたのが終ひには十が十過たず魚を獲るやうになつた、最後には一つの針で二尾位は獲るといふ樣に熟練して來た、これならばやれないともなからうといふので、とう〳〵仇を探し當てゝ討つことになつた、先方は武道に達したものであつたが、その山男は例の魚突き針で立ち向つていつた、一方は何とか流の劍道に達してをるから、青眼に構へるか兎も角も法通りにやつたが、此方は青眼もへちまもない、岩を走つて行つて急流に泳ぐ魚を突く筆法だ、急流の魚は非常に早いものだ、その早い魚を過たずに突くといふほど精神が凝つた爲に、終にその技が奥妙に達した、それは親の仇を討ちたいといふ誓願力が土臺となつて精神を集中した爲に、その技倆が特別に進んだものである、そこで劍道の達人何のなにがしと勝負して、物の美事に目をついた、いくら荒木又右衛門でも目を突かれては仕方がない、それで先方の目をついた、その電光石火の早技を以て仇を報じたといふ實話がある、私は青年時分に此の話を聞いたことがある。

◇

さういふ作法にも何にもよらないで、自學自得的に、一方劍道の達人をも征服するほどのすぐれた技倆に成功したのは何だといふと、心を一境に制したといふことがさういふ力をなした、だから此の精神力といふものは隨分普通の則を超へて、期待すべからざることまでも成就する程の力は持つてをる、それが規矩作法に從つて、さういふ精神の集中力を適法に發達せしめたならばそれは普通のぼんやりしたものから見れば智慧も明かになるに相違ない、そこでそれを規則的に

條理整然とその運びをつけるやうにしたのが佛法の戒定慧の三學である、別して散亂心を防ぐがために禪定を尊ぶ、それから心の放逸を防ぐ爲に戒律がある、戒律と禪定とそれから後に一ぱん心の淸々しい一點の汚點も止めない時に、物に對して考へたその識力、それを智慧といふ。

この戒定慧の三學によつて心をみがき力を練る、そこで先づ心のいろ〳〵の塵垢を取つてしまふ、その上で考へた考は、ぼんやりとして物を考へてゐる考とはまるで違ふ、單に學問によつてのみ物を知るといふよりも、かういふ根底的に心を習練してそれから物を考へるといふのとは全然違ふ、佛法では物の道理を極めるには智を以て境を照すといふ、境は目的、智はそれを照す方の此方の用らきである、この智が大きければ大きいほどその境を大きく觀、その智が深ければ深いほどその境を深く觀る、そして知り得た道理、これを眞理と名づける、けれどもその眞理には本當の眞理と類似の眞理とある、どのくらゐ修行したら、どのくらゐの程度まで行くかといふと佛まで修業しなければ天地法界の一切の物は知り得ないことゝなつてゐる。

◇

けれどもだん〳〵に行くと、この間に所謂菩薩の階級が出來てゐる、諸大乘經に菩薩の位といふものをあげてある、別敎では五十二位、圓敎では四十二位といふだん〳〵の位があつて、一階のぼる毎に眞理の視野が廣く深くなる、どの位までいつたらどの位の知見力があるか、どれほどの智慧が廣まつて行つてその智で見た眞理がどれほど廣く、且つ深いかといふ度をもつてある、そして最後十信・十住・十行・十回向・十地・等覺・妙覺と經のぼつて行つて、その一番の妙覺に近い最後心それを金剛心といふ、そこ迄行つて佛になるとしてある、さうして得た眞理でなければ、本當の眞理といふことは出來ない、如來は如實に三界の相を知見する、三界の三界を見るが如くならずとあつて、佛の考へと凡夫の考へとは違ふ、それは先づ先決條件として心の垢をとつた考へから照らす智であるとしてある。

それを今日世間一般の思想家とか哲學者とかは、この垢だらけの心で見るから、その算盤ではじき出せる程度のものは皆わかるが、それが世にいふ眞理である、さういふ賴りない眞理が一切の事物を解決すると考へることは非常に危險だ、大體先づ一口にいふと生意氣である、今世の中のいろ〳〵の思想とか學問とかいふものは一言にしていへば生意氣だといつてよい、未だ足らずして求めつゝあるといふその無限の向上心の中に、眞理を知り得る資格は具はつてゐる、これを足れりと考へたら墮落である、

これをしも學びの嶺と思ひなば迷ひにくだる始めなりけり

それを行くところまで行つてしまつたものだといふ考へで、無遠慮千萬に世間を議したり、釋迦がどうとか、基督がどうとかいひたがる、それは危險だ。

◇

今の『事妄』といふ、これはあらゆる現象だ、これを離れて眞理はない、事妄の中に眞理はある、それを徹見し得ないで、事妄は事妄なりとしてゐるのが爾前經である、理は眞實であつて事は虛妄であるといふ此の一般原則から一だんのぼつて法華經に來ると、十界が平等であるといふから、その一切の事妄に對して全然眞理と沒交渉なものか否かといふ問題に逢着して來る、然りと雖も十界悉くこれ佛であるといふ一つの關門が下りてゐるから、それは開けることは出來ないそこで今の程度問題といふことになる、事實佛と凡夫とはこれほど違ふ、凡夫の迷ひの有樣がその諸現象が眞理であると斷定するにしても、それは佛の如く自在安樂を得てをらない、どこか行詰つた窮屈なところがある、さうであるのにこれを十界が平等であるといふことは、どの邊を平等といふかと斯うなる、そこで心性の問題といふのが起つて來る、心性の問題といふのは、(黑板上の字を指して)この字は相、すがたこれは本より現はれてゐるすがたで、その內面を貫いてゐるものがある、それが心性である、性の問題である。

ついでにいつておくが、今世間で性の字を男女の性のみに解釋して、時々新聞の廣告などに見るが、性學、性の教育なんてことがある、何のことだとだん〳〵考へてみると男性女性といふことのみにこの性の字を使つてゐる、佛法では性相といつて相に關した義門と性に關した義門とあつて、性は意である、これは法相宗とか法性宗とかいつて、本宗などでは多く相を論ずる、法相宗も相を論ずる、相家といふ、それから華嚴や天台は性を論ずるからこれを性家ともいふ、佛法でなくても世間のことでも性靈といふ字を使ふ、弘法大師の詩集を「性靈集」といふ、それは意である、今殆んど性といふことに對する正しい意識が全滅せんとしてをるが、これは卽ち佛教家の怠りなんだ、斯ういふ嚴肅なる名稱を世間の誤つた稱呼に亂用されて、その方が跋扈してをるといふことは、佛教の廢つた一つの證據なんだ、それを回復しなければならぬ。

◇

この性に約して事理を解決して行く時、はじめて內面といふことが性の上にわかる、そこで問題は佛と衆生である、卽ち九界と佛界である、佛界が標準なんだから、その佛界を論ずるに性を以て論じて先づ佛性を觀察して行く、佛性は佛とは違ふ、佛は佛性も佛相もない、佛は佛だ、その佛の性があるといふので性の字を以て乘除して見て行く、この性の字の乘除に於て何處まで佛

の素質が認められるかといふ、その算盤がはじめて出て來る、この性の上から論じて行く時、九界にも佛性がある、だから性からいけばいゝんだ、性からいへばいゝんだが、相からいへばないんだ、ないのではない、かくれてゐるのだ、そして何處までも間違つた凡夫の相である、然し間違ひながらもその腹の中には佛性があると解釋していく、そこで嚴肅なる熟語によつて申せば『衆生但理、諸佛得事』といふ、これはよい言葉だ、衆生は但理なり、諸佛は事を得といふ、さうすると正反對になつて來る。

一般にいふ理は眞であつて事は妄であるといふのが、今度は法華經の見から見ると、今の性に約して見るから、十界の內面に佛が行き亙つてゐるとなる、それは卽ち理で妄を見ればさうなるとなる、理といふものはそこ迄詰め寄つて來た、それから衆生は但理なり、九界の衆生は理の上に於いては佛といへる、それが衆生は但理なりだ、事に於いては佛とはいへない、けれども理に於いて佛といへる、而してその事といふ事實上の佛が現はれてをるのは、その力は何であるかといふと、それは佛ばかりである、かうなつて來る、さうすると事妄といはれた事が、今度は佛の境界の方にはいつて來る、これを一口に俗語にくだいていへば、衆生は理の上だけで佛といへるが、佛は事實の上にも佛であるんだといふことになる。

◇

これで法華經と法華經以前の教說と明かな隔たりが出來た、然し、これは天台の所判であつて、法華經の中にも迹門の方便品の教理に據つて述べられた說である、わが本化の教においては大聖人が事の一念三千、壽量品の事の三大事と仰せられて、事といふものが又一だん違つて來た、卽ち爾前經の事理と迹門の事理とは、殆んどその段階が違つて來た、九界は迷ひであつて佛界は悟りであるときまつた、その十界が然れども內面に皆佛の性を持つてゐるといふことに向上して來て、十界皆成佛の道理が迹門できめられた、そこで一念三千といふものが立つた、然しそれは十界を橫に見たゞけの話で、佛界のために九界を見たのでなく、九界のために佛界を見たのだ、九一相對していへば、九界的佛界といふ道理である、九界を本として見て佛界を末として見たのである、だから迹門は衆生の心を標準として說かれたものだとなる、けれども一往はさうやらなければならぬ、それから今度本門に來ると、それが又一段上り進んで行つて、今度は佛界のための九界となる、すべては佛境界である、それは十界を橫に一並べに見たのを今度は縱に見る、であるから十界平等の成佛といふ迹門の皆成佛は、先づ平面から見たもので、本門に至つてその平面觀に縱の觀察を加へて、先づ時間的にこれを引上げた、時間的に引上げて行くと同時にこれを平

面的にも活用して來るとなつて、その平面的に見た十界の成佛が、はじめて本格になつて來る、卽ち立體的になつた、であるから迹門は衆生正意、本門は佛正意、九界を原則として見た見方では、どうしても先づ性といふものゝ上から十界を內面から觀察してかゝらなければ、平等の成佛はなり立たない、だから衆生正意である、そこで『衆生但理、諸佛得事』とかうなる、ところが今度は衆生は但理でない、事理ともに衆生である、あるんだけれどもその根源が衆生を起點としてをらぬ、佛を起點としてをる、佛の中にある十界だと斯うなる、それが本門の狀態である、であるから今度は諸佛ばかりでなくして衆生もその儘佛の事である、であるから事理といふ解釋は小乘權大乘でいふ事理と、それから迹門の事理と、それから本門の事理とは殆んどその素質が違つてゐる。

◇

そこで當家の事觀々々といつて台家の四明などゝ對抗して頻りと論じた學者もあるけれども、當家の事觀はそんな意味のものではない、議論などを用ゆべきではない、大聖人はこの事理に於いて、觀といふ名と行といふ名と兩方を用ひられた。

『一念三千ノ觀法ニ二アリ、一ニハ理ナリ二ニハ事ナリ』

その觀法とは觀念論だとか、認識論だとかいふやうなところにさまよつてゐる觀ではない、觀といふ中にもいろ〳〵な觀察の方法がある、托事觀であるとか、約法觀であるとか、約行觀であるとかいろ〳〵な觀があるが、大聖人のいはれる觀は卽ちこれ行なり、行の發足點を觀慧（くわんね）といふ、だから觀をまた信となす、信仰の信だ、それが所作に現はれて來るとき行となる、であるから仕上げの方からいふから行となつて、これを事行の南無妙法蓮華經といふ、すると事理相對して議論してゐるやうな、さういふ域を脫出した特別のものだ、これを經文に『如來一切甚深之事』と說いてある、『皆此ノ經ニ於テ宣示顯說ス』と四つの要法をあげた最後に『甚深之事』といふ、これを天台は釋して名體宗用敎の五重玄義の宗玄義であるといつた。

佛敎の話を始めてお聞きになる方も大分あるだらうが、宗玄義だとかいふことは、佛法の普通の課目であるから、一々說明はしないが、わからない人は保坂にでも長瀧にでも聞くがよい。

五重玄義の中の宗玄義、宗玄義は修行の正體である、これは一番大切だ、吾々の信仰の上で大切なのは宗である、この『甚深之事』といふのは宗である、宗は因果を原則とする、卽ち因果といふものゝ用らきをおとす、因行を起して果德を得るといふ活動を起してくる、眞理だとか法門だとかいつてみても、それが活用されなければ何にもならない、活動をおこさねばならぬ、その

活動が信心修行である、それが宗玄義である。

少し話がむづかしくなるが我慢して聞いてもらはう、その『甚深之事』といふのが、大聖人建立の法門の全體の概念なり內容なりを代表してをる事である、それは迹門ではいへない、迹門では理を正意として性に約するから卽ち理性だ、理性の談である、心性卽ち理だ、迹門の圓理を理圓といふ、本門も矢張り圓理だが、本門の圓理は事圓、事實的の圓、迹門は理圓だから理性の上の圓、だから事實の上では未だ虛妄に墮する邊がある、であるから最極度の高潮の批判には、迹門も尙方便だといふことになる、眞の眞實とは何であるかといふと、本門の事圓でなければならぬ、すると此の事といふ現見（げんけん）の一切の現象そのものが卽實在であるといふ道理が、本門ではじめて說かれた、それは我々が理論的に得たのではない、辨證法によつてどうしたとか、論理的に定めたとかいふのではない、これは因緣といふ上から斷じ來つたのである、それは多分の道理も含んでをれば功德も含んで居る、それは佛の方から斯う〳〵だといへばその通り心得さへすればよいやうになつてゐる、實は我々が四十二位も五十二位もあらゆる難行苦行を經てはじめて知り得べき眞理であるが、それを佛になり代つてしてもらつて、佛の智慧をそつくり此方にもらふ方法である、それでなければ何萬年生きても解決出來ない。

◇

目の子勘定では考へ中に壽命がなくなつてしまふ、よし考へたとしても考へ終つてさてそれを應用するといふ時は容易に來ない、それではつまり、金は此方のもの品物は其方のものとなつて物わかれになつてしまふかといふと、さうではない、現金を拂はないでも、そつくり品物が此方に來るといふ道がこゝに開かれてゐる、それは佛の慈悲から吾々が授けられた、卽ち本門事圓といふ繩張りの中に屬した弘通の方規だ、それが本化の化導だ、吾々は間違つてゐるといつても、それは本當の間違ひでなく病氣だ、『諸子後ニ佗ノ毒藥ヲ飲ム』で、內臟の狂ひから來たのでなく毒を飲んで『心皆顚倒セリ』である、その結果どうなつたといふと身心懊亂して倒れる、『諸ノ子後ニ佗ノ毒藥ヲ飲ミ』しかも毒だと思つて飲んだのではなく、うまい物だと思つて飲んだ、さうしたら毒があつた、消化したら全身に毒がまはつた、『藥發し悶亂して地に宛轉す』とある、大地に倒れ悶亂とある、非常に苦んだ、それは『法華經ヲ捨ツルハ地獄ノ業ナルベシ』といふやうにその地獄の相を現じてゐるのである。

それは何時の世でも凡夫の迷ひは同じである、けれども今日のやうな濃厚な時は一寸ない、これから後ももつとひどくなるかも知れない、然しどの位人心が腐敗しようが驚くことはない、も

と病氣だから治療さへすれば必ず治る、治療のとゞかないほどの病氣とは違ふ、毒を驅除してしまへば必ず治る、同時に未だ死んだのではない、事切れてしまつたら如何に藥を飲ましても駄目だ、今は苦しんでをる最中だから、それは名藥があつたら一ぺんにその毒を解除する、優秀な解毒劑があれば必ず治る、その藥は何だ、吾々はその病に墮ちてをる、この世界は病に墮ちてをる、そこで病を治すといふことについて、治す必要を感じないのである、みんな世間の人はこれでいゝと思つてゐる、今が安樂であると思つてゐる、何ものをも求めない、ゴチヤ〳〵やつてをる、東京に出ると自動車が走つてゐる、電車を運轉してゐる、それらを觀察して御覽なさい。

◇

あの人達はどういふ考へでをるか、どうして食はうかと考へてゐる、自動車に乘つてゐる奴は慾の爲に奔走するか、低級なる逸樂のために奔走するかゞ大部分だ、忙しいといつてもその忙しいことが何等天地の眞を發するとか、一切衆生を救ふとかいふ仕事で忙しいのは一人もゐない、極く眞面目なところで利權を漁る、名利の奴となつて奔走してゐるに過ぎない、あの相、あの中にあつて唯一人まるで境界を別にしたやうな、一種の不可思議的の境界を得るといふ、それは娑婆卽寂光の妙理によつてのみ得られる、その眼界の照らすところは『我此土安穩天人常充滿』の境界だ、それを一足飛びに得させやうといふのだ、一足飛びに得させるといつても、ぼんやりしてゐてそこに物を持つて來るのではない、兎に角治さうと考へることが必要である、治さうと考へないものまで治さうと佛は思つてゐる、けれども治さうと思はなければ藥をすゝめても飲まうとしない、治さうと思へば藥を飲む、飲めばすぐ治るといふのは、その藥の中に佛の一切の慈悲が含まれてをるからである、無條件で成佛が出來るといふことは本門の事圓による、その事圓といふものは、もと天地法界を佛乘化する佛の境界である。

九界本位で佛道を釋するのと、佛界本位で九界の平等を釋するのとは、まるで因果本末の相違がある、諸佛の事そのものが衆生の事になる、事とは現象で世の中のすべての現象である、その現象が卽實在であるといふことは、佛の三身常住の御慈悲、その三身常住の佛の威力、その威力も慈悲も無條件で吾ものとなる方法を教授なされた、それによつて一切衆生を救ひとるといふ、この大じかけな徹底した微妙なる信仰能力が本門の事行、事の行である、であるから『事の一念三千』とか『事の三大事』とかいふ事は、事觀の上から觀を尅實していふと行である。

◇

『事行の南無妙法蓮華經』この根本原則から割出さなければ、宗教問題も信仰問題も、乃至は人

生問題も社會問題も、その解決はいつまでたつてもつかない、それを一ぺんに解決のつくやうに釋迦如來は法華經を說き、法華經の精神たる妙法蓮華經を本化の菩薩に付囑して、末法の惡時代を救ふものとしてこゝに殘された、それは我々の奉ずるところの日蓮主義の修行である、信仰である、これが先づ大聖人のいはれる事の法門『日蓮ハ本化ノ一分ナレバ盛ンニ本門ノ事ノ分ヲ弘ムベシ』と仰しやつた事の法門である、この原則に立つて、わざ〳〵廣がりげに佛教を解釋し、深かりげに理窟だけを以て得たりとしてをることは、なほこれ法華經主義といつても天台に墮ちてゐる、天台の觀法に墮ちてをるものである、大聖人の所謂『盛ンニ本門ノ事ノ分ヲ弘ムベシ』といふ事觀事行の大修行の法門を以てせざれば、複雜なる今日の世は救へない、この意味に於いてます〳〵壽量品の事、卽ち日蓮所立の社會救濟法は、これから特別に必要であり且つ光輝を放つ時代である、それで壽量品の事の三大事の事といふことだけ話した、然し委細をつくすことはなか〳〵出來ないが、次々に此の三大事といふことを話す、少し病氣のかげんで每日は出來さうもないから、若ししやべつてゐる中に卒倒すると、取かへしがつかないので用心しなければならぬ、それで時間も短縮してあとは明後日續きを話す、先づ三大事を決定すれば大體「壽量品」の骨子はわかる、そのつもりでお聞きを願ひます。

第二講　壽量品の實踐的活現

前回に引つゞいて「事の三大事」について述べる、これはいふまでもなく大聖人の宗旨を究竟した三大秘法を申すのであるが、この三大秘法はみなもと佛の體、用らき、それ等を綜合して、佛全體の功德、その大目的物に向つて我々が修行を成立して行くといふ上に於いて立つたのが三大秘法である、種は佛だ、目的は佛である、その佛に到達する方法といふものが始めて規律となつて現はれる、その規律をつくるには原理原則がなければならぬ、それを法といふ、佛と法、それからその佛と法を活かす修行と是の三つが一つとなつて始めて我々の人生の大事は結着するものである、佛も矢張りそれで大事を決定するのである、それを單に理論の上ばかりでのみ並べないで、現實の上に適切に會得する、色讀する、體達するといふことが事の一念三千、それを原理として成つた三大秘法といふことである。

前回に事理といふことを話したが、事といふことは一口に云へば現實といふことだ、事實といふことだ、理といふことは筋目をもつた理論である、理論だけでお終ひにしてしまつて、その片

づけ方に追はれて、肝心な事實の上に役立つて來ないといふと、つまり空理空論といふことになる、理といふものはなか〳〵筋目も細かいし深いからして、淺い智慧では一寸見當がつきかねるものだ、さうではない斯うではないといつて小田原評定で終つてしまふといふことがどんな大學者でも大哲人でも、大ていは此の小田原組なんだ、その小田原組の中で少し性のいゝのと悪いのとあるだけで、兎角の議論に終つたものばかりだ、獨りその理論を整理して毫も亂れなく眞の佛法を建設する前提準備として遺憾のないまでに正しく說かれた人が天台大師だ。

◇

天台傳教の時は理なりといふ、この理は所謂この事に對する理であつて、即ち迹門の理圓を完全に說きあらはしたものである、斯ういふことを大聖人も言明せられて、天台を正しいものとされた、はれどもそれは、正しいといふことは、丁度建築をするのに先づ設計圖を正確につくりあげるといふ程度のものである、その設計圖によつて建築をするのであつて、本の設計に誤りがあれば建築に誤りが出來る、設計に誤りがなければその通り建築すれば立派なものが出來る、であるから此の建築については設計を非常に重大視するのである、萬事は設計圖できまつてしまふのだ、故に大切なものだ、然しながら設計圖に住むことは出來ない、圖面が如何に正確に出來てゐても、その圖面がすぐ住居にはならない、別に建築しなければならぬ。

當家でいふ事理といふ觀察は丁度これと同じことで、この理の所談が正しくなければ眞の正しき事は現はれて來ない、よつて大聖人も、日蓮が斯く佛法を正しく傳へ得て、正しく行ひ得たことは、根源天台傳教の智慧を用ひるが故なりといつた、かるが故に御本尊の中にも佛法の正統を正すために三國傳來の正統者龍樹、天台、妙樂、傳教の四大師を本尊に勸請されたくらゐだ。

◇

要するに正しい理論の上にはじめて正しき事實が立ちあがるといふことだ、これを沒却していきなりに當家は事觀であるから、煩惱即菩提だから、生死即涅槃、娑婆即寂光だからといつて、物を見るに妙法ならざることなしといふやうな下手な禪宗の出來損ひのやうな觀心づりに陷ると、矢張り一種の魔見魔說に流れんもはかりがたい、かるが故に先づ嚴密周到なる理性の判斷といふものが基礎になつて、その上に有效堅實なる事實の建設がなければならぬ、然し目的はその事實にあるのだ、いくら正しいといつても設計の圖面だけで建築が完成したとはいへない、それは天台、傳教等が智慧が足りないといふのでそこに來たのでなく、時機があるのだ、『時機到ラザルガ故ニ』と仰しやつた、末法に來なければ此の事上の法門は眞に建て得ない、又立つても早いのだ、

建築の圖面の未だ本當に出來上らないので、基礎的研究が必要である、その堅實なる基礎的研究の上に立つて强固なる事實をあらはした、『智者ニ我ガ義破ラレズバ用ヰジトナリ』といふ大確信の下に建てられた、信仰となつたら、何でも構はない、信じさへすればそれでよい、煩悶を通利するとかいつた低級な信仰で宗教を觀察してゐるが、そんなものではない、堅實なる理性の下に立つて、適切なる事實の佛法が日蓮主義だ。

そこで事を尊ぶのだ、而して何からそれは來るかといふ大研究、即ち法華經の大眼目、骨髓は壽量品だ、早い話が一口にいへば、人間世界のことでも、凡そものは三つに纏まつてしまふものだ、三つとは何だといふと、第一が目的だ、第二が仕事だ、その仕事の中に仕事の努力と規律とがある、こゝに何らかの一つの目的がある、その目的に到達するには仕事をしなければならぬ、所作がある、その所作については勤勉にそのことを行ふ條件がなければ、その所作は效を奏さない、であるからそれが努力である、勤めである、その勤めも一定の規準を追つてその所作を行つて行かなければならぬ、目的と仕事と規則だ、この三つで一切の勘定はつくんだ、矢張りそれが我々の上でいふ三大事だ、それがだん〳〵桁が上つて來て、最後との甚深究竟の大事を決定するといふ大問題になつて、これが三大秘法となる。

◇

本尊は目的である、題目は仕事である、戒壇は規則である、その三つが完全に用きかけて、理義正しく、行動も正しく、諸の因緣が悉く正しく相集つて、こゝに我々人生の目的は達することが出來る、現實をはなれて單に理論ばかりで、空想に耽つてお了ひにするといふのは、仙人などにはあるが、これは一種の精神病者だ、よく悟りぬいたといふやうな人がある、それから非常に眞面目な人があつて、眞面目でありながら用に立たない、眞面目といふことは惡くない、悟つたことも惡いことではない、けれどもその行動を失つて、所謂脫線してさういふ言行をあらはすのは片輪で、病的である、本當の究竟の佛法は別段に不思議はない、當り前のことである、當り前の事であるがその中の深味をしつかり握つて、その中心を失はないといふところに成佛の眞相はあらはれて來る、何か人間世界をはなれて、特別に空中を飛んで歩く神のやうなものを求めなければならぬやうに思つてゐるものは十萬億土の阿彌陀を禮拜するのと同じことだ、湯屋の歸りに神樣にぶつかつたといつて喜んでゐるやうなものは精神病者だ、一種の變態精神に陷つてゐるものであるから、それではいけない、常識だ、當然の道理だ、『佛法ト申スハ道理ナリ、道理ト申スハ主ニ勝ツモノナリ』と、大聖人は解釋されたが、火が熱く水が冷たいといふのは普通の道理

だ、それ以上に別段のものはない、『如來秘密神通之力』とあるから、特別な魔法があるかと思ふとさうではない、凡夫が現實の世界に於いて本當の道理にぴつたり合つて、正しい生活をいとなむといふことが成佛だ、その成佛を期待するのだ、それが娑婆即寂光とも凡身即佛ともいふことだ、秘密の神通のといつても別段の不思議があるわけではない、『成佛スルヨリ外ノ秘密モ神通モアルベカラズ』である、それでは一向つまらないことで、法華經だの佛法だのと苦勞して求めないでも、それは始終やつてゐることだといふ者があるかも知れないが、さうはいかない、それは淵源もなく根底もなく把住もないのだから、何が故にやつてゐるかわからないから無價値である、こゝに於いて價値といふものが現はれて來なければならぬ、それが本化開導の法門で、日蓮聖人が事といふことに力を入れられたのは其の爲めである。

◇

「如來壽量品」とお經の名があるが如來の壽命を詮量する品といふことである、その如來とはどんなものであるかといふと、無論お釋迦樣のことだ、そのお釋迦樣が久遠實成の佛である、何時といふ限りの知れない昔からの佛であるといふことを明かされたのが壽量品、これは一切の佛法を二分してしまつたのだ、淨飯大王の太子として印度の迦毘羅衞城に生れて、十九で出家して三十にして悟りを開き、八十にしておかくれになつた印度出現の釋尊、その吾々と同じき地上で呼吸をすつて生きてゐて、その中の特にすぐれた偉人であると考へてをるその釋尊が、今生今番にはじめて修行して佛になつたのでなくして、久遠塵點の昔に最早すでに佛であるといふことが說かれたのが如來壽量品である、それが現實の十九出家三十成道の釋迦を否定して、特別な不可思議な境界の佛があるのかといふとさうではない、現實の釋迦如來は印度の佛陀伽耶に於いて成道をなされた賢明なる貴族の一人、それは五十年の間說法をされ、その說法が結集して殘つてゐるのが佛法の經典だ、今支那から日本に傳はつてゐるだけても飜譯されたお經が五千三百七十九卷、その外未だどつさりある、散逸したお經もどの位か知れない、ともかくも五十年の間の說法をまとめて後に殘したのが佛敎の經典である、その經典を殘された宗敎界の大偉人、その偉人であつても矢張り人間である、三千年の間、世界何千億の人の中で一ばん優れた人といふにすぎない、いくら優れても人は矢張り人である、その人から出た佛樣といふこと、人から出來上つたといふ佛、敎を殘したといふ佛、それは久遠劫來から成佛したといふ佛だ、それと同時に現身の釋迦がなくなつたのではなく、現身の釋迦そのものが久遠實成の佛であるといふことを說き明した。

これは佛が說かなければどうしてもわからない、外なら推測して實はもつと古い佛であらうと

他から推測しては價値がない、釋氏の宮に生れて八十で拔提河の畔でおかくれになつたといふ、年齡八十の壽命を保つた現實界の釋迦如來そのものが、この法華經の眞理によつて久遠實成の佛だといふことがあらはれたといふところに、尊い味がある、それは大聖人も「本尊鈔」の中に凡夫が卽佛になるといふ證據に『悉達太子ハ人界ヨリシテ佛身ヲ成ズ、此等ノ現證ヲ以テ之ヲ信ズ可キ也』と仰しやつた、これは佛身を成じた生々しき證據人の第一人者たる釋迦如來が先づその內容を開發され、久遠實成といふことがわかつた、これは實に人生の大事件だ。

◇

ところが現實の釋尊が久遠劫來の佛であるといふ事柄の內面に含んで居る條件が又大事件だ、どう大事件だといふと、その釋尊の內容を明したことによつて、天地法界の一切を今の言葉でいふと、宇宙萬有、森羅萬象でも構はない、一切衆生でも何でも構はない、大衆的でもよい、あらゆるものが共にその中にはいつてしまつて、神さまだの、佛さまだの、人間離れのしたものがあるといふことが一切帳消しになつてしまふ、十萬億土の阿彌陀樣なんどは一ばん早く閉店してしまつたのだ、『賣家と唐樣で書く三代目』といふが、十萬億土の阿彌陀さんは一番先に貸家札を貼つてしまつた。

現實以上のものはすべて皆方便だ、それはさうしなければ衆生の妄想を破ることが出來ないから、時には極樂を說き、又は佛は別のものだと說いた、そして今お前達の持つてをる斯ういふ尊いものがあるといふことを知らせる爲に、『斯クノ如キハ皆方便ヲ以テ分別セシナリ』と仰せになつた、或は己事を示し或は他事を示す、是皆悉く方便なりで、天の一月が萬水に影を浮べたやうなものだ、月は天にあるんだ、影は大海にも浮べば水溜りにも浮ぶ、けれども池の月、川の月、水溜りの月とはいはない、一つの月がいろ〳〵に影を浮べる、それどころではない、瀧の飛沫の一つ〳〵にも月は影を宿す、

小夜あらしあらしに瀧のくだかれて散る玉ごとに月ぞやどれる

それで、水に浮んだ月を見て天の月を忘れたら如何にもくだらないことである、この久遠の本佛といふことを忘れて、他の佛を求め菩薩を求めてゐるといふことは迷ひである、『そのことを嘆いて、『不識天月但觀池月』と釋してある、『天月を識らずして但池の月を觀る』よく畫題に猿が月影を獲りに行くのがある、手に手をつないで大勢の猿が水中に映つてゐる月影が美しいので、それを獲らうとして、柿か何かと思つたのだらう、甘さうだと思つて獲らうとするが、獨りではとれないので、大勢で手をつないでぶら下がつたので、その重量にたえずして枝が折れて皆水中に

おちて死んでしまつたといふ、猿猴捉月之圖といふのがよくある、丁度そんな形だ。

これを實際に解決する大使命を負びて本化の菩薩が出現した、それが本化の大菩薩だ、それは結局、佛の久遠實成といふものを明かして、印度出現の佛の內容を形で示して相場が決まつた、その印度出現の佛もたゞの佛でなく、內容からみとめて久遠實成の佛になる、その久遠實成の佛の相場が決まらんと、一切衆生が皆同一に成佛することが出來ない、『此ノ品ノ所詮ハ如來ノ三身ヲ明シテ弟子ノ三身ヲ增進セシム』とある、最後の結着は一切衆生の成佛といふことにある、一切衆生の成佛といふものはこゝに標準が立つた、こゝに集まるべきだといふことを示してゐる、よつて大聖人は如來を釋して、

『此ノ品ノ如來トハ、總ジテハ一切衆生ナリ、別シテハ日蓮ガ弟子檀那ナリ』

と仰しやつた、その一切衆生の佛たることを現はす爲に久遠實成を現はした、そこで吾々の價値が顯はれた。

◇

價値を知らないで生きてゐる位つまらないことはない、自分の價値を認めない人間は迷ふ、それが爲に慾張り、それが爲に徒らに空想を追ふ、卽ち醉生夢死の生活だ、享樂だとか悅樂だとかいつて娛樂の後を追つてお終ひにしてしまふ、或は利權の爲だとか、名利鬪爭で命を終る、それは皆人間の價値を知らないからである、そこで價値といふものを教へる爲に佛がこれを說かれた、であるから壽量、その壽量とは壽命を量るで、卽ち壽命の詮量といふ事だ、壽命といふことはどつちもいのちといふことだが、壽といふことは、壽は受なりで自分の受けいれた得分をいふ、それはつまり價値の本體だ、それから命とは連持なりで、連つてはたらいて行くことだ、何年生きるなら何年生きるときまつた壽命、どんな厄難にあつても盡きないのはそれは壽だ、「論語」にも『仁者ハ壽』といふ言葉があるが、この壽の字を使つてある、ことぶきともいつて目出度いことに使ふ、婚禮や何かの目出度い時の帛紗には必ず此の字を使ふそれは命長しといふことだ、けれども、命長しでも、たゞそればかりではいけないから、それが運動してゐなければならぬ、それが命である、命とは連持相續していくことである、この壽の方は限りのないことで、命の方に限りがある、同じ生命でも動く命は、去年と今年とは違ふ、昨日と今日とは違ふ、私は今生きてをるから昨日も生きてをつた、然し明日はわからない、多分死ぬまいと思ふが、昨日と生き今日と生き、明日と生きるとすると、それは命といふ、昨日の田中は今日の田中とは違ふ、田中そ　ものは違つてゐないが、昨日と今日とはどつかに違ふ、明日も亦

どう違ふかも知れない、斯うしてゐる中にも前念後念、念々相續して行つて斷へないが、絶えず變つて行く、變つて行くといふ間に長くつながる效力をもつてゐる、それが命だ、今の言葉でいふと生命だ、生命の哲學なんていふがその生命だ。

◇

そこで佛の壽命は無量無邊盡きないといふことから起つて來てゐる、そのことを話すのが如來壽量だ、量だ、一口にいふと佛の壽命の相場を立てるためには、詮量といふ、詮め量る、お經にも五百塵點といふことが明かしてある、『我實ニ成佛シテヨリ已來無量無邊百千萬億那由佗劫ナリ』とある、皆が謂つてゐる、摩訶陀國の淨飯王の子として生れ、釋氏の宮を出て悟りを開いて、今から四十何年前に佛になつたものと皆謂つてゐるが、ところがさうでないぞと『俺が成佛してから已來無量無邊百千萬億那由佗劫である』と仰しやつた。

そこでたゞ長いではわからない、これを具體的にいはなければならぬから、その長さを具體的に明かしたのが五百塵點の法門である、この五百塵點の長い間、この數はお前達に勘定出來るかといつた、そこで菩薩の旗頭たる彌勒菩薩がこれに答へて『無量無邊ニシテ算數ノ知ル所ニ非ズ我等ハ阿惟越致地ニ住スレドモ此事ノ中ニ於テハ亦達セザル所ナリ』と言つて、とても勘定出來ませんと答へた、さうであらう、この數は勘定出來ない、その勘定出來ない數、それより未だ俺の佛になつたのは古い、斯ういふ具體的に五百塵點といふ數量をあげて、佛の壽命のすでに久しいことを明かした、是は過去常住の法門である、過去にさかのぼつてはさうであるが、これからも亦さうである、『我本菩薩ノ道ヲ行ジテ成ゼシ所ノ壽命、今猶未ダ盡キズ復上ノ數に倍セリ』とあるから、どの位增えて行くかわからない、彌勒菩薩はこの少し前の涌出品で驚いて腰を拔かした、その疑ひを解決しようとして、どうしてこんなに菩薩が數限りなくあります？　四十餘年のうちにこんなに澤山のお弟子が出來るわけがない、斯ういふ疑ひをもつて、これはどういふお方であるかと訊いた時、これは俺の弟子だ、俺が佛になつてから手鹽にかけて育てあげた愛しの弟子だ、かうなつたものだから、彌勒菩薩がそれはどうも不思議だ、佛になつてから四十何年、どう考へてもこんなにお弟子が出來るわけがない、それがつまらない者なら兎も角、佛にも等しき皆大菩薩方である、その菩薩方が斯の如く數限りなくあつたといふのは、佛になつてから教へられたものだとなると勘定が合はないから、これには仔細があることだらう、佛が嘘をいふことはなからうが、さうすると此方に未だわからないことがあることになる、私はわからないでもよい、佛の仰しやることは絶對に信じてゐるから私は宜しいが、この儘でお說きにならないでしま

ふと、未來世の者は此の疑ひのために、この疑ひの解決が出來なかつたら、多くの者は惡道に墮ちるだらうから、その理由を說いて下さいといつてお願ひした、そこでその解決の爲に說かれたのが壽量品である。

◇

だから始めに『汝等當ニ如來ノ誠諦之語ヲ信解スベシ』といふことを三度仰せられた、本當のことをいつて聞かせるから信じろといつた、默つてゐても佛のお言葉は信ずるつもりでゐる、それを一ぺん大宣言をなされて、その次に又『汝等當ニ如來ノ誠諦ノ語ヲ信解スベシ』と三度まで念を押した、三度念を押したからその間に彌勒菩薩も三度承知しました、お敎は謹んで拜聽しまする、信解致しますると答へた、いゝか確か、確に信解致しまする、宜しいか、かういふ風に念を押した、我々にしても餘ほど重大事件でなければとんなに念を押さない、そして三度念を押した後で、また彌勒菩薩は『唯願ハクハ之ヲ說キタマヘ、我等當ニ佛ノ語ヲ信受シタテマツルベシ』ともう一ぺんやつた、これに對して、然らば說くから信心に住して諦かに聽聞せよと許した、これを三止三請重請許說といふ、さういふ嚴肅な嚴重な儀式のもとに說いたのが、短い間に澤山の弟子が出來たのを解決するためである。

實はお前達は四十何年の新米の佛だと思つてゐるが、俺は五百塵點劫の昔より佛になつたのだと說いた、これが如來壽量といふことだ、そこでこの量といふことは詮量、はかる、相場をきめるといふことだが、佛の壽命の相場をきめ、壽命がこんなに長いといふことを明かした、壽命といふものは果報だ、壽は受なりで果報だ、受けいれて自分のものになつたものは壽だ、だから壽命は果報だ、この果報は何から來るかといふと功德から來る、功德を積んで得たものが果報だ、その功德は何から來るといふと修行から來る、再言すると壽命は果報なり、果報は功德なり、功德は修行から來る、修行は何から來たる?、これは問題だから殘して行く。

◇

その壽命を詮量する、であるから詮量の量の中には二つの意味がある、先づ長短をはかる是は時に約して長短をはかる、それから大小をはかるこれは形に約するのである、人間の生れたては皆小さい、その小さい赤ん坊が母の胎の中にゐるともつと小さい、更に十月前のはじめ母の胎內に宿つた時は芥子粒ぐらゐだ、それが餘ほど大きくなつてアララン、カララン、アブドン、それが胎內でだん〳〵成長して來て終に出胎の時になつてオギヤアと生れる、けれどもいくら大きくなつても赤ん坊だから未だ小さい、それが百年生きるとか五十年生きるとか、日本人の慣例上五

十を壽命としてあるけれども、眞の日本人の壽命は平均三十八年しかもたないといふことだ、中には五十の天命を全うするものもあり、六十、七十、八十、九十と生きるものもある、百までも生きるものもあるがそれは少い、とにかくオギヤアと生れてから三十なり四十なりに達するまでがだん〳〵大きくなる、尤も五十にもなつて赤ん坊のやうにところがつてゐては仕方がないが、とも角も肥つて來る、始めは乳を呑み、食物を食ふ、食物をくつて成人して徴兵檢査時分迄には身の長五尺にもなる、五尺以上になると徴兵に採用されるといふ、すると赤ん坊の時は五尺ない、それが食物をくつて大きくなつて五尺に達する、その割で行くと五十、六十、七十と十年に一尺伸びるとして五十にして五尺に達するとしても私は七十だから七尺なければならん、八十、九十の人はもつとのびていかなければならぬ、ところがさうはのびない、どういふわけで歳をとると小さくなるか、私も近來小さくなつた、肉がおちて小さくなつた、目方も多分減つてるだらう、ひと頃は二十一貫五百目あつた、だん〳〵小さくなるといふのはどういふわけだ、是は大きくなる限度が知れてゐるのだから、峠のやうなもので下り坂になる、つまり死ぬ仕度をしてゐるわけだ、死ぬこととはなくなることで、なくなることとは小さくなりきつてしまふことだ、小さくなりきつてしまふと皆無になるから無いことからあることになり、有ることとから無いこととになる、つまり死ぬ準備である、心細いことである。

それは自分の一生を標準とするからさうなる、私のいよ〳〵死ぬ時には十六貫も十七貫もあるわけはない、最後は燒かれて灰になつてしまふ、それで田中といふものゝ一生は終る、この下に話なしといふことになる、けれども本有（ほんぬ）の田中智學はなくならない、私の精神は消えない、精神の上に宿つた身體は決して死なゝい、あの靈廟の中にはいつても何處に遍滿してゐるかも知れない、用がなければ天地の中に晝寢するが、用があれば何處へでも出て行く、靈魂不滅なんていふことは低級な思想ではわからない、物質の上からいつても無くなるものではない、靈魂不滅といふが靈魂が一體生れて來るといふことはない、生れて來ることがないから死ぬことがない、これが常住である、身體もさうだ、若葉の中でも櫻は櫻だ、年々歳々花相似たり、これ櫻の常住不滅だ、今櫻が五十年百年たつてもその生命は存してゐる、何時でも花咲き實がなる、久遠劫來これは止まない、であるから壽命といふ原則は流れてゐる、長い短いといふ長短を論ずる時問題である、死ぬといふ原則がないものだつたらその儘放り出しておいたら、人間が五十年七十年で死なないで、何時までも生きてゐる筈のものだから、人間は六尺となり八尺となり十尺となつて、世界中に廣がるほど大きくなる筈のものだ、死ぬといふ規則があるから息をついてゐる、息をつか

ないで延びつぱなしなら限りがない、だから形の大小が起こつて來る、これが命といふ、形は身體だ、この身體に心を宿したのを生命といふ、であるから佛の壽命が長く遠いといふことを詮量してゐる其の反面には、その形の大きいといふことも同時に現はれてゐる、それは前の寶塔品に釋迦と多寶の二佛が空中の多寶塔中に座を並べる、その時に十方分身の佛が現はれて、この娑婆世界にはいり切れないとある、そこで三度び國土を變じて清淨とする神通を現はした、それを三變土田といふ、三たび土田(國土のこと)を變じて清淨ならしめて、その世界に充ち滿ちた諸佛が在る、それを法華經の虛空會といふ、この時に已に佛の壽命の長いことを明かしたやうなものであるから、この寶塔品を壽量の密序と謂つて、壽量品の秘密の序分とされてある、如何となれば『スデニ分身ノ多キヲ見ル、當ニ知ルベシ成佛の久シキコトヲ』と釋してある、分身とは身體を分けたのである、それがこんなに多いといふには、成佛して久しくならなければ、それだけの大きな分量が出來ない、すでに分身の多きを見て成佛の久しきを知るべしで、それは佛意からいふと壽量品を說く準備だから密序といふ、だから起顯竟の三段で分ける時は、『法師寶塔ニ事起リ湧出壽量ニ事顯レ、神力囑累ニ事竟ル』といつて、その順序がピツタリとしてゐる。

◇

法華經二十八品の說相は大きな謎のやうなものである、又その形式は殆んど一つの戲曲のやうなものだ、一點もゆるみのない組織で一念三千の微妙の原理が說かれてゐる、哲學的に學究的に說かないで、かういふ風に說いたところに釋尊の智慧の廣大さがわかる、その中心眼目が壽量品である、佛法といふものは佛から出てゐる、一切のものは皆佛から出て來た、『禮樂征伐天子ヨリ出ヅ』で、それでなければ天下は治まらない、それが戰國時代には諸侯から出たから世が亂れた、今日は禮樂征伐が政黨から出る、政黨は眞に國を思ひ國を愛して、嚴密なる法令によつて世を警醒しようといふやうな議員が集つてゐるならそれもよからうが、それは聖德太子が國論によつて國內を治める、といつた所謂十七條憲法の宗に合ふが、さうではない、名譽や利權の爲に選擧を爭つて選擧される議員共が集まつてゐる、有象無象の小田原評定で、それが積極的の時にはなぐり合をする、消極的のものは居睡りをしてゐる、居睡りと喧嘩の外はないといつても可い、それは議員が居睡りをする病氣になつてゐるのでもない、喧嘩をする病氣でもない、それは佛法では境界性といふ、だから衆議院には憑物がしてゐるといつた人がある、それで議會に議員が行く時にはお祓ひでもしたら宜からうといつた人があるが、あの中にはいると利口な人が馬鹿になる、人格のある人も下品になる、議員はただ反對黨のことを馬鹿といふ、默れといふ、馬鹿なら

ば國家の法律を議する能力はない、默つてゐたら何も出來ない、この議員といふ制度は、話をして參政する爲に出來た、それを默れといふ、それでゐて事を議せるか、だまつてしまつたら默員だ、さういふ馬鹿々々しいことになる、さういふものばかりを選つて寄せて來たかといふとさうでもない、一人々々には相當偉い人もある、それは根本の規律がなかつたからさうなる、所謂國體意識をわすれたからさういふことになつた。

◇

凡夫の所作はみなさういふわけで、その標準を正しく與へるといふ爲に、先づ見本として現はしたのが釋迦如來、釋尊といふものは斯ういふものであるといふので壽命の長いことゝ、その壽命に比例して身體も大きい、天地法界と等しい、『三千大千世界ヲ見ルニ乃至芥子ノ如キ許リモ是菩薩ニシテ身命ヲステタマフ處ニ非ザルコト有ルコト無シ』といふ、それをもう一層高調したのが壽量品だ、であるからして壽命の長いといふことの中には、限りなく身體の量があるといふ、それで身といふことがこれから起る『身ハ積聚ヲ以テ義トナス』と釋して、身といふことは積聚といふことだ、積り聚まり纏まる、かうして骨だの肉だのいろ〳〵なものが聚つて、まとまつて身になる、その功德が聚つて身といふものが出來る、その身の中に魂があるのが生命、即ち壽命である、であるから壽命を論ずるには身を論じなければならぬ、身がなくて壽命はない、身に存した生命である、それを壽命といふ、そこで佛身といふものが起つて來る、山川が佛身觀を話すことになつてゐるから聞いたらうが、その第一根本は法身、それから報身、報身は智慧だ、法身は理だ、理を以て身體とするから何處まで大きいかわからない、智慧を以て身體とするからどこまで透徹してゐるかわからない、諸緣に應同する慈悲を以て應身とする、丁度天上の月が萬水に影を浮べるやうなものだ、何故かといふと月に光があるからだ、月に光がなかつたなら影はうつらない、光があるから無量無邊の萬水に影を浮べる、佛には智慧から生みいだした慈悲がある、その智慧は眞理から來た智慧である、眞理と智慧と合體して生みいだした用らきが慈悲となる、作用が慈悲となる、その慈悲があるからいろ〳〵の緣に應同して人を教化するとれを應身といふ。

三身といつても三つあるのではない、一つの身に三つの用らきがある、それを佛身といふ、佛の身とは大智慧で、法華經以前のものは小さい、法華經は大きい、だから『年紀大小を說く』と經文にある、年紀は時だ、時の長短と身體の大小となる、身體が大きくなると世界中の身體になつてしまふといふ事だ、その中の佛は一つだ、その大きな佛の組織中の一つが一切衆生である、そこでこれが佛の壽命の價値から、吾々の根本の價値がみとめられる、そこで縱に長短をはかつ

て、横へ形の大小をはかつた、だから極めて長くて極めて大きいといふ結論になる。

この世界は長い、ほろびない、常住不滅である、この形は際限がない、どこまでいつても際限がない、卽ち天地法界のすべてを盡してゐる、世界どころの騷ぎではない、世界萬國など〻いつても、此方からいふから大きいが、大體の理から見たら小さい、天を見ても星は無數にある、どんな智者でもどんな數理學者でも、天の星を數へた人はない、よしんばこれが光つてゐる星だけでも數へきれないが、その外に未だわからない星がある、だから時々方々の天文臺で今度何とか星を發見したといふ、發見した度にその發見した人の名を星につけて、小林星とか田中星とか名をつける、それがどの位あるかわからない、これは實に大きい、それを佛法では一つの世界とする、そのすべてを綜合した中心が日月である、その日月を中心とした一區劃があれだけある、その一區劃の日月がいくらあるか知れないとしてある、實に廣大なものである、その廣大なもの、生命の永久なもの、これが卽ち價値だ、その價値は眞理と同價である、眞理と同價であることが現前の事實であるとすると、その中に生きてゐる我々は決して無價値なものではない、といふことを考へなければならぬ、それを考へさせるために壽命を詮量した、その壽命の功德は何から來るかといふと偶然には來ない、それを神が造つたといふやうに、突然にさういふものがあるとすると、どうしても無解決の議論として永久に殘される、耶蘇教の人は人がいゝので疑はないから天下泰平だが、疑つたら信ずるどころではない、疑問の中心となり、問題が雲の如く湧くから、有りがたくも何ともない、それがだん〳〵哲學科學が進歩して來ると無神論が生れる。

◇

ところが久遠實成の佛の壽命はそんな曖昧なものではない、この壽命は果報だ、その果報は何から來たといふと、功德から來た、功德をつまなければ出來ない、功を積み德をかさねた、お經にも『積功累德』とある、德はその儘にあるものではない、長い間の作用がなければ功も德もあるのではない、積功累德だ、であるからその功德は修行から來る、修行から功德をつんで、功德から果報となる、佛の永久の壽命、無限の身體は何であるかといふと、それだけの無限の身體を置く場所がいる、そこで世界國土といふものがはじめて必要である、それを佛土といふ、『我ガ此土ハ安穩ニシテ天人常ニ充滿セリ』それが佛の國土だ、それは果報だ、それを佛自ら解決して『我本菩薩ノ道ヲ行ジテ成ゼシ所ノ壽命、今猶未ダ盡キズ、復上ノ數ニ倍セリ』とある、だから自我偈の中にも一言にこれを解決して『久修業所得』とある、偶然に得たものではない、菩薩の道を行じ、南無妙法蓮華經と唱へ、實行してこれを得たのである、久修業の業は功だ、德は得なりと

もいつて、得ることだ、久しく業を修して得るところだ、久遠劫來の大昔から俺の壽命は何時までと限りないものだが、その大昔から久しく業を修した、その結果得た壽命だ、とかういふことである。

であるから、久修業によつてこの果報を得たのである、お前方も同じこと、この妙法を持てば別段に壽命を新しくもつて來ないでも、その久しい佛の壽命の中にそつくりはいつてしまふ、これが本有の價値、即ち自分の價値だ、これが所謂生命の價値だ、その生命の價値をきめるといふので壽量の量といふ。

◇

壽命に限りがあると說く佛と、限りがないと說く佛、どつちにも屬せざる佛、どつちにも屬する佛いろ〳〵ある、限りがありながら限りがないと說く佛もある、阿彌陀の如きは十劫正覺といつて限りがある、極めて短期の佛である、であるに拘らず無量壽の佛といふ、有量にして無量といふ、この壽量品に現はれた佛は有量に非ず無量に非ず、法身の常住といふやうな理論一點ばりでいふ無量ではない、又本有の道理をはなれた現實の目の子勘定でいふ有量ではない、兩方を同時に有した佛である、であるから印度出現の釋尊、わが世界の歷史中に現はれた人物、吾々の敎法の祖師たる、この敎を建設して吾々に授け、且つ法華經を說いて末法の一切衆生に遺された、その現實界の偉人釋尊そのものはその儘久遠實成の佛である、この如來壽量品の如來は法身如來を正意とする說と、報身如來を正意とする說と、應身如來を正意とする說といろ〳〵ある、又當家の學者の中にもいろ〳〵あつて所謂學究的の議論がある、天台大師は正在報身の成佛といつて報身如來をとられた、けれども日蓮宗門では多く應身をとつてをつた、であるから釋尊は印度出現の釋尊を木像に刻んである、螺髮形の形、これは應身である、それに即して今は釋尊といふから應身正意ともいはれる、綱要日導といふ人は「祖書綱要」を書いて盛んに法身正意をとなへた、けれどもそれらは皆一具してゐるのである、現實界の應身の佛を正面にして、その中に三身を具足してゐるといふのが正しいのである、矢張り現實界の佛をとるといふ方がいゝのである、その現實界の佛卽ち久遠の佛でなければ我々は成佛することは出來ない、『悉達太子ハ人界ヨリシテ佛身ヲ成ズ、此等ノ現證ヲ以テ之ヲ信ズベキ也』といふ論據に立てば、その現實界の釋尊が卽ち久遠實成であることによつて釋尊の三身をあかして弟子の三身を增進せしむとなる、我々が『久修業所得』の中にはいつて大果報を得る、『釋尊ノ因行果德ノ二法ハ妙法蓮華經ノ五字ニ具足ス、我等此ノ五字ヲ受持スレバ自然ニ彼ノ因果ノ功德ヲ讓リ與ヘ給フ』といふことがはじめてものを

いふ、だから『久修業所得』は修行である、その修行は佛にあつては本有の慈悲から起る、それを因に約すれば信心である、我々も慈悲はあるが信心が起らなければ慈悲は出て來ない、慈悲がある等と一ぱし考へるのはそれは己惚である、正しい法に信心歸依して、絶對の歸依をさゝげる信といふものが先決條件とならなければ、あらゆる功德は發生しない、信を起して『今身より佛身に至るまで能く持ち奉る南無妙法蓮華經』と、ほんたうに三業受持を誓つた時、はじめて久遠實成にはいる、こゝに凡夫卽極卽身成佛とも娑婆卽寂光とも解決出來る、そこで果報を明すのが本領である。

◇

今度は壽命についで、國土常住の法門を顯はさなければ現實の解決は出來ない、國土は物質を代表する、物質が成佛しなければ吾々の精神も完全なる成佛はない、こゝを以て末法の時機に於いてはだん〳〵と漸を追つて物質主義が盛んになる、唯物主義のおこつたのは物を尊ぶ考へからで、これは墮落した考へだが、それは止むを得ない徵候である、そこで以て物質を開會して卽身成佛を明かす三大秘法が、末法の時機に相應するといふことはそこにある。

第三講　生活の靈化

今日は壽量品の三大事について適切に我等の信心修行の上に目標となる本尊と、その本尊に一致し得る修行と、その規律、これだけの經緯を原理的に話す。

前日にも申した通り、如來の修行が甚だ長い、又その壽命が長いといふことから大體佛といふものは、これまで說き來つたあらゆる佛と全然根底が變つて來たことが、この壽量品であらはれた、であるから天台大師が本門の壽量品を釋する時に、本に約して開權顯實すといつた、開權顯實といふことは四十餘年の方便經をとりのけて、その中の眞實を示すといふことが開權顯實といふことだ。

四十餘年未顯眞實となつて後、眞實を明したのが方便品だ、だからこれも開權顯實だ、然るに方便品では迹に約して開權顯實といつたので、それが壽量品に來ては本に約して開權顯實といはれてある、これは大變注目すべきところである。

◇

そこで從來法華經の教理の中で本迹の勝劣とか、一致とか長年の間もつれてをつた、然しこれは教理上の解釋の多少の異りから各々しのぎをけづつて、果は命がけで喧嘩したが、よく〳〵考へてみれば、どちらも各々據る所があつて、いづれも一面の眞理を現はしたものであるが、それを綜合して論ずると圓滿究竟の法華經の眞の安心に到達するわけであるから爭ふべき筋はない、研究はしなければならぬが爭ふ必要はない、それが門を分け派を分つて爭ふのは宗門分裂を來たした所以であつて、その分裂もいゝ分裂ならよいが、分裂のために宗門の氣息が伸びない、各々振はない、一天四海皆歸妙法といふ全體の宗門の願業に何等貢獻しない、その爲に統一的教陣を張ることが出來なかつた、正德年間に於ては日本國中に約八萬の寺を有してをつたといふ宗門、一番あとから出來て、一番盛んであつた宗門が、今日では各派を通じてわづかに五千に足らない、それほど衰頽してしまつたのは何のためだといふと、政府との衝突によつて宗門が迫害されたり、甚だしきに至つては禁じられたりした、　後奈良天皇の朝には勅禁を以て禁じられた、又德川時代に於ては貴族には日蓮宗を禁ずるといふ法令が出た、だから大名などは內心では信じても表面は大抵禪宗であつた、又夫人の名で信じてをつたといふみじめな有樣であつた、中世以前の日蓮宗は多く貴族の子弟が出家して日蓮宗の僧となつたものがどつさりある、ところがだん〳〵中流以上の人が宗門から離れたといふことは、別して貴族富豪等の亞流がだん〳〵日蓮宗と遠ざかつたのは、さういふやうに仕向けた幕府の政策である、然しそれは宗門の運命としては貴族よりも寧ろ大衆的であるのが宗門の目的だから、それはいゝけれども、とにかく宗門が萎微不振になつたといふことは、その根元は宗團の分裂といふことに依る、分裂によつて信仰なり解行なりが統一しない、教會制度も無論統一しない、互に喧嘩してゐる間に世の中はずん〳〵惡化して行く、年々榮ゆべきものが榮えない、一天四海はおろか、日本中の十分の一さへもお題目を唱へるものがないといふ有樣、又これを憤慨して起つものがないといふのが、宗門衰頽の原因である。

◇

發憤するものがないといふのは、教理の正準を失つた信仰の正統を得てをらん證據だ、さういふやうな宗門第一の誓ひが亡びて、目の前のことと自分だけのことゝなつたから規模が小さくなつた、この講習會では雄大といふことをいふが、その雄大性を失つた、日蓮聖人は『日蓮ハ一閻浮提第一ノ聖人ナリ』と名乘つた、これは誇張して大きくいつたものであり、大氣焰を吐かれたものであると思つてゐるが、それは決して誇張でも大氣焰でもない、一切衆生を救ふ目標であるといふことである、その大主張の下に日蓮聖人は起たれたのである、その教を信ずるものは、又そ

の考へでなければならぬ、『日蓮ガ弟子檀那ハ日蓮ノ如ク正理ヲ修行シタマヘ』とある、少くも祖師の如く信じ行ふといふことが、一般宗徒の心にあつたならば、どうしたらこの宗門は弘まるであらうか、どうしたら日本國中の人に又一閻浮提の人に、法華經を信じさせることが出來るかといふことが、箸の上げ下しにもそれが誓ひとなつてをれば、學問でその目的を達するために學問をする、或は藝術をもつものは藝術を以て弘める、或は金のあるものは金を以て弘めるといふやうに、どうかしてこの宗門を盛んにしようとする、即ち一乘法華の世にしなければならぬといふ、さうしなければ天下が泰平にならない、天下を泰平にするは此の法によると天台もいはれた、天台ですらさうである、まして立正安國を以て世に立つものが、現實の世を救へないなら、寧ろ無駄である、人生の片々たる煩悶慰藉ぐらゐの宗教を求めるといふやうな小規模のことでは、法華經の教理は埒があかない、煩悶してゐるやうなものは死んでも構はない、『魚鼈涸死す、あア悲しむべし』と古人もいつた、今すべての世の中を成佛させやうといふのに、その大きな仕事の前に個人の煩悶ぐらゐが何だ。

◇

今日はやゝともすると社會苦だとか、生活苦だとか、何でも苦しみといふことを振りまはす、世の中は苦しみでないものはない、人間生れて字を知るは苦しみの始めなりといふ、何にも知らぬと呑氣でよいが、少しでも物を知ると苦しむ、『一切衆生ノ異ノ苦シミヲ受クルハ我レ一人ノ苦シミナリ』と釋尊もいはれた、日蓮聖人は『日本國ノ一切衆生異ノ苦シミヲ受クルハ、悉クコレ日蓮一人ノ苦シミナリ』といつた、世を救はうといふ人さへ苦しみを背負つてゐるから救はれるものが苦しみを背負つてるのは當り前である、然し苦しみが苦しみで終つてはいけないから、樂しみがある、そこに人間の努力なり精進がある、そのために求むる道である、そして一切衆生をしてこの妙法に歸依せしめて、『天下萬民諸乘一佛乘トナリテ妙法獨リ繁昌セン時、萬民一同ニ南無妙法蓮華經ト唱ヘ奉ラバ、吹ク風枝ヲナラサズ雨壤ヲ碎カズ、代ハ羲農ノ世トナリテ今生ニハ不祥ノ災難ヲ拂ヒ、長生ノ術ヲ得、人法共ニ不老不死ノ理顯ハレン時ヲ御覽ゼヨ、現世安穩ノ證文疑ヒ有ルベカラザルモノナリ』とある、それが目的である、その目的に向つて進まうといふ、それを建設しようといふ、これが爲に受ける苦しみは苦しみでない、日蓮が法の爲に諸の難に遭ふは、日蓮の安樂行なりとある、誓ひが固ければその誓ひの上に於て人の生命は眞の價値を發揮する、それが今日愚圖々々として、世界は疏かに日本の片隅に追込まれて、僅かにいろ〳〵な宗旨と一緒にぐづ〳〵してゐるといふ情ない姿でゐるといふのは、いやしくもさういふ大誓願に對し

て慚死しなければならぬ、その根元はこの宗門の信仰が統一しない、解行が統一しない、卽ち宗門の安心が統一しなかつたからである、その統一しない原因は目標の大聖人を忘れたからである、自分々々を主として、異體同心といひながら何時までたつても同心しないからである。

異體同心といふことは、身體は異つても心は同じといふことだ、身體は各々異つてゐる、能力も異つてゐる、智慧も異つてゐる、それはいくら異つてゐてもよい、そのあらゆる異つてゐるものが、心だけは一つになるといふので、彼方のものも此方のものも用にたつ、『異體同心ナレバ萬事ヲ成ズ』と聖訓されてある、その同心とは何であるかといふと、お前と俺と同じ心にならうといふのではいけない、それを同心と思つてゐたから失敗したのだ、そんな愚劣な同心であるから本當の同心が成立しない、先づ自分の心を捨てゝ祖師の心に集まる、お前もさうだ俺もさうだとなれば默つてゐても同心する、祖師の心を通して一つになるといふ誓ひさへあれば、幾百萬人ゐても立ちどころに一つ心になれる、その同心でなければならない、それを失つたのだ、それを失つたから異體異心である、異體異心であれば未だ一軒燒けですむが、それでゐて形は一つの宗門、日蓮門下といつて、一つの形で南無妙法蓮華經を唱へてゐるから、形だけは同一で心が異つてゐることになる、同體異心となる、これを大聖人は『城者トシテ城ヲ破ルガ如シ』といはれた、城の持主が自分で城を破るのだ、かういふことが皆卽到に現はれてゐる間違ひなんだ、こんな間違ひをそつとして置いて、いくらお經を讀んでも、いくら御妙判を研究しても何にもならない、この卽到の間違ひを片つ端からほぐしていつて、夜があけるやうにならなければ活きた法門ではない、一切衆生を救ふとか、日本國をどうかするとか、世界をどうかするとかいふことはシヤラくさい、一天四海皆歸妙法はさておいて、自分達一宗團さへ未だ統一出來ないといふ根元は何處にあるかを先づ反省しなければならぬ、これ卽ち根本の解行を失し、根本の信仰を失したところから來つたといふ自覺を起さねばならぬ、此處にゐる人だけでも一致團結したら、それは何でもなく出來ることだ、それが爲に立てられた法門だ、修行だ、その根元をたづねて吾等の安心の本を養ふのが修行については三大秘法だ、三大秘法はそれを教へてゐる、それは悉くこの本門壽量の深義から現はれてゐる、たゞの佛法ではないぞといふために本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇といふやうに、一々本門といふ字を加へた、本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇とわざわざ本門とことわつたのは、法華經の本尊、法華經の題目、法華經の戒壇でなく、又佛法の本尊、佛法の題目、佛法の戒壇でもなく、正しく本門である、佛法の眼目は法華經、法華經の眼目は壽量品、その壽量品の文義の文底からあらはした法であるが故に、一々本門の本尊、本門の題目、

本門の戒壇といふのである。

◇

昔、一致勝劣の議論の盛んな時分に一致派の碩學で三大秘法を書くのに、本門の字を書くのをいやがつてたゞ本尊、修行、所期と三つに分けた、意味は本尊であり修行であり所期であるが、さういふ名稱を用ひて三大秘法を講釋しなければならぬといふことは、實に理由のないことである、本門といふ字が一々あるから勝劣派に加擔するやうになるからといふので、さういふ名稱を用ひた、名稱は大切だ、だから昔の聖人も『必ズヤ名ヲ正サンカ』と言つた、名の中に實がある、本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目と一々本門とかぶせられたのは、さうしなければならぬ理由がある、それは本門において剋成するところの法門でなければ用ひない、たとへ一念三千でも本門の所立でなければ用ひない、一念三千の法門の立場は迹門方便品にあるけれども、本門の魂のはいつた一念三千でなければならぬ、御妙判「撰時抄」に

『釋迦如來ノ御神我身ニ入カハラセ給ヒケルニヤ、我身ナガラ悅ビ身ニアマル、法華經ノ一念三千ト申ス大事ノ法門ハコレナリ』

と仰せられたのは爾だ、それといふのは、立正安國論を文應元年七月十六日幕府に奉つてより、三度天下國家を諫暁した、その事業は釋尊の御魂が俺に入かはつてゐるのだといふ、それが法華經の一念三千だといふ、即ち現實の上に一念三千を建設するそれが即ち本門の事圓である、それから船守彌三郎夫婦が大聖人の危難をお救ひ申して、我が家に連れかへつて地頭からきびしいふれがあるので岩窟の中に三十餘日おかくまひ申した、そして米のとぼしい中で粥なりをつくつて差上げたといふ、岩窟住ひだからいづれひどい生活である、彌三郎の家はさうでもなからうが、かくす爲に岩窟においてお粥か何かを差上げた、隨分ひどいものに違ひない、講習會の御馳走の方が餘程よい、さういふ極めて貧弱な御供養ではあつたが、當時にあつては未だ信仰せざるものが大聖人の風丰に接し、その御聲に接して油然として湧きおこつた義俠の精神、この常識の精神が緣因佛性の開發となつて御供養申上げた、供養の事柄はつまらないけれども、大聖人に供養することは地頭から固く禁じられた事なので先づ危險だ、冒險にやつたといふその決定心、その如法の精神を讃歎して、未だ富木播磨守にも四條金吾にもお明しにならない一念三千の法門を、漁師の夫婦に明された、一念三千の法門を開示されたのは、御妙判では彌三郎夫婦がはじめである、その「船守抄」に

『凡夫卽佛ナリ、佛卽凡夫ナリ、一念三千我實成佛ハ是ナリ、シカラバ夫婦二人ハ教主大覺世

尊ノ生レカハリ給ヒテ日蓮ヲタスケ給フカ』

と仰せられてあり、又同鈔の初の方に

『日蓮が父母ノ伊豆ノ伊東川奈ト云フ所ニ生レ變リタマフカ』

とも仰せられたのもそれと同轍である、それが一念三千である。

◇

即ち人生の事實に即して、人間生活の一ばん尊い高級な生活を成佛といひ、それを一念三千といふ、さういふことを一念三千の成佛と斷ずるといふことが本門だ、これが迹門ではない、迹門では天台の如く四種三昧を修行して摩訶止觀の觀法をこらし、二十五方便で心を錬へて、而して後悟りを開くといふ、それは今日の人間にはとても出來ない、十乘觀法はさておいて二十五方便の一つだも出來ない、しかもそれより上等の尊い法であるから、三十餘日日蓮聖人をおかくまひ申し、お粥でも或は麥飯でも、魚などは召上らないだらうから、いゝ加減な野菜ぐらゐを供養した、そのしがない生活、それでも日本の柱たる大聖人の生命を救つたといふことによつて、この時の彌三郎の三十餘日の御供養は、三千大千世界の富をつくした御馳走よりも價値がある、これが眞の有意義の生活だ、我々の生活もその通りである。

それでは一つさういふ事をやりたいからといつて、俎岩のまはりに行つて、日蓮聖人のやうな偉い人が出て來たら見つけてやらうといつても、それはいかん、それと同じ心になる、それと同じ意義の生活をする、それが一念三千の成佛だ、何でもないことだ、商人が商賣をする、百姓が耕作する、役人は政治をとる、議員は政治を議する、その各々の職務事業の上に即してその心が滿ちわたればそれが現身の成佛だ、無意義であつて、無效力で、何にも用にたゝないといふことが一ばんいけない、用に立たないといふものゝ果は害になる、役にたゝないものがぶらついてゐると、フワ〳〵してそこから諸の惡邪を釀して行く、そこでこれを一言に盡して我が過去世において菩薩の道を行じて得た壽命が今の壽命だ、この壽命はこれから後も決して滅びない、『今猶未ダ盡キズ、復上ノ數ニ倍セリ』とある、これを一言にしていへば功德である、即ち壽命は果報であり果報は功德から得たものだ、その功德は修行から來る、修行は正しい信仰から來る、かうなる、自我偈には『久シク業ヲ修シテ得ル所ナリ』と說いてある、偶然に得たものではない、耶蘇教の神のやうに初めから偉いものだといふのでは相場が許さぬ、價値のないものは相場が下るに決つてゐる、效力のあるものは相場が上る、價値によつて相場は上り下りするものだ、『久シク業ヲ修シテ得ル所』といふ功德が積んである、その功德から來た、それは何時から始まつたかわか

ちない、とても勘定出來ないといふ、卽ちわからんとした方がよい、そのわからない昔から矢張り功德は積みつゝある、今も積み今からも積む、その絕えざる功德の力が果報を生む、それが壽命となるといふ勘定になる、してみれば我々も矢張り功德を積む方にはいつて行けば、その壽命海中にはいる。

そこでわかりよく功德といふ事を簡單に話すと、功德は功と德だ、功は因、德は果、功は用らきで修行だ、それを積んで得たものが結果だ、勉强して商賣をかせぐことは功だ、稼いだ結果金持になつたのは德だ、だから德は得なりである。

釋尊がやつた事を我々の生活にうつすとどうなるかといふと、矢張り釋尊のやつた通りにやるのだが、その順序は戒定慧だ、これを三學といふ、學といふ以上矢張り學問のやうなものだ、學ぶといふことは習ふといふことだ、眞似ることだ、佛の通りに眞似をすることだ、眞似をしてどうなるといふと、それを實行したものが佛だからその通りにやれば佛に成る、どう學ぶといふと戒定慧といふ、戒は自分の心まかせに何かをしないといふことだ、それが一ばんの先決條件だ、自分の心まかせにしてゐては向うの通りにはならない、『質直ニシテ意柔輭ニ、一心ニ佛ヲ見タテマツラント欲シテ、自ラ身命ヲ惜マズ』一身を惜まないといふ、『自ラ身命ヲ惜マズ』といふのは自分を可愛がらないといふことだ、けれども自分を可愛がるといふ目的によつて佛にならうといふのだから、その爲に自分を捨てることはましやくに合はないことだと考へるが、それは仕方がない、自分はもとやりそこなつた、それを本に戻さうといふのだから仕方がない、自ら身命を惜しみつゝ惡道に墮ちた、だから一たん自分を否定しなければ本當の自分はあらはれない、眞の持前の相を見て本當のわれを建設するには、一たん誤つたわれを否定しなければならぬ、だから自ら身命を惜まずといふ、それが戒だ、いましめだ、戒めとは勝手放題をしない事をいふ。

それから今度は定、定といふのは散亂をふせぐ、心がぐらつかないやうに、ぐらついてゐれば決して道はまともに踏めない、心を一境に制して目的物に向つて心をとゞめる、卽ち佛道に心を止めなければならぬ、それが定だ、これは禪定といつてもろ〳〵の散亂を防ぐ。

それから第三には慧だ、慧はもろ〳〵の昧いことを去つて明るいことにつく、間違ひを去つて正しいことにつく、それが慧だ、智慧だ、卽ち戒と定と慧は、戒めと禪定と智慧だ、一般佛敎では禪定といふと坐禪を組んで心を一境に制することを修行する事をいふが、意味は同じことだ、それを單刀直入簡單にやる事が本門である、戒で勝手氣儘にしないやうに、定で心を一境に止めて、慧で間違つたものを取つてしまふ、例へて見ると、我々の煩惱迷ひに對して釋尊は獨り明か

だ、獨り光明赫々とした立派な御人格である、同じ一つの境界の中にありながら、我々の方はひどく墮落してしまつてをる、佛の方は功德でかためてをる、功德の成功者なんだ、我々の方はこれをやりそこなつた、その間違ひは何から來たかといふと、元品の無明といふ煩惱から來たのである、元品の無明とは眞理をかくす障りをいふので、一口にいふと手前勝手といふ己れが可愛いといふ心から起つた、本當の己を知らないで目前のみ追ひ、食ひたい放題飲みたい放題、食ひたいとは慾だ、自分の食慾の滿足するものを食ふ、その結果胃を惡くして障る、だから胃病にかゝつたものは警戒して食物を節し、惡いものを食つてはいけないといふ戒がある、規則をおく、けれども自分が食ひたいのをそれを我慢してといふことは馬鹿々々しいことであるから、苟くも食はんが爲に生きてゐるからといつて食ふものは亂暴だ、どうかして我が身體をよくして、自分の身體の破損を直したいと思ふものは醫者の禁令をまもつて、惡いものは食はずに消化のいゝものを食ふとか、多少の規律を守る、先づ條件の初めは自分勝手をやめる事から起る、それは自分の勝手は惡いやうだが、食ひたいのを我慢してゐれば軈て健全な身體になれば何でも食へる樣になる、それには苦い藥も熱い灸もするゐなければならぬ、それを我慢する、源功德の失墜は我々の罪だ、佛の方は功德だが我々の方は罪だ、この內容を惡といふ、この罪惡の衆生が罪惡でお終ひになつてはつまらないからそれを轉じて功德の方にならうといふから信仰も宗教も入用になる。

『是ノ諸ノ罪ノ衆生ハ、惡業ノ因緣ヲ以テ、阿僧祇劫ヲ過グレドモ三寶ノ名ヲ聞カズ』

とある、罪の衆生、その罪の衆生は、必ずこの罪には惡業の因緣がついてまはる、大體は罪だ、罪といふのは功德を失墜してしまつたことで根本は無明の煩惱からはじまつてやりそくなつた、それは又惡業の因緣が、何の因果だかついて來る、そしてだん〳〵墮落してしまつて『阿僧祇劫ヲ過グレドモ三寶ノ名ヲ聞カズ』といふ、この聞かずは三寶の名をも聞かず、名さへ聞かないといふことだ、佛の方は功德が聚積したから、その壽命は阿僧祇劫となる、壽命は無數劫、久しく業を修して得る所なりとなるが、此方の方は『不聞三寶名』だ、此方も矢張り阿僧祇劫だ、阿僧祇劫だけは負けないけれども、佛の方は功德が阿僧祇劫で、此方は惡業が阿僧祇劫だ、そこで物は相談だが、俺の方は功德が一杯あつて

『我ガ此ノ土ハ安穩ニシテ天人常ニ充滿セリ、園林諸ノ堂閣、種々ノ寶ヲ以テ莊嚴シ、寶樹華菓多クシテ、衆生ノ遊樂スル所ナリ、諸天天鼓ヲ擊テ、常ニ衆ノ伎樂ヲ作シ、曼陀羅華ヲ雨ラシテ佛及ビ大衆ニ散ズ』

實に愉快である、けれども彼方の方は

『苦海ニ沒在セリ』

で、阿僧祇劫を過ぐれども三寶の名をきかずだ、それは仕方がない、自分の身から出た錆だから仕方がない、お前達は勝手にアブ〳〵やつてゐろ、俺の方は天人常に充滿せりといつて別れてしまつて、佛は佛、衆生は衆生と別れてしまへば、佛法も鐵砲も何もない、ところでその佛は功德を積んだ、そして阿僧祇劫の壽命を得た、それで『我レ諸ノ衆生ヲ見レバ苦海ニ沒在セリ』又『不聞三寶名』だ、これが默つてどうしても見てゐられない、『此ノ子愍ムベシ、毒ニ中ブラレテ心皆顚倒セリ』どうかして救つてやりたい、

『每ニ自ラ是ノ念ヲ作ス、何ヲ以テカ衆生ヲシテ無上道ニ入リ、速ニ佛身ヲ成就スルコトヲ得セシメン』

といふ、この大慈大悲が三身常住の佛から、三世益物の化導となつて、どうかして衆生を救はうとなつて、どうかこの無上道に入れさせたいといふのが『得入無上道』とも『速成就佛身』とも いふのだ、その『得入無上道』が功で、『速成就佛身』が德だ、この俺と同じ功德の中に救ひとつてやりたい、明けても暮れてもそればかり思ふ、といふのが『每ニ自ヲ是ノ念ヲ作ス』といふ『每』の字だ、この大慈大悲が止まないから、佛の智慧が徹底して惡業の因緣で疾苦に痞せてゐる衆生が『得入無上道』するやうにするにはどうしたものであるかといふと、三寶の名を聞く事にまで到達すれば事は早い。

三寶とは佛法僧だ、佛と法と僧だ、僧とは本化の菩薩大聖人、法とは久遠の本法、これを今末法の我々に授くべく說かれたのだ、卽ち要法だ、三大秘法だ、佛とは本佛だ、この本佛の名を聞き、本法の名を聞き、本化の名を聞くとなれば、それはもうしめたものだ、『聞名』といふ、名を聞くことからはじまる、義を思ふといふのではない、名を聞く、名を聞くから始めてこれに緣が結ばれる、そこで『聞名ハ名字卽ノ位』といふ、その『聞』とは『有經名法華』で、法華本門の三寶の名を聞くことだ。

さういふ尊い且つさういふ手つとり早い確實な利益のある法なればこそ、迷ひに迷つた苦海の責の中にさまよつてゐる我々が、自分の人生を解決するのにかういふ正しい確かな手つ取り早い法はない、それでは先づその法に歸依しようと名を聞いて直ちにその道にはいる、南無久遠實成の本佛、南無本法妙法蓮華經、南無本化の大菩薩、この本門の三寶の名を聞いて名からはいる、それから今度は修行となる、これが今の功德と積むとのたてわけだ。

もう一つ德とは何ぞやといふと三つになる、法身・般若・解脫の三德である、先づその因は戒

定慧の三學、戒は戒壇、定は本尊、慧は題目である、戒は自儘をしない、それから定は心を一境に制する、これは時に約する、慧は賊を殺す、賊を捕へてしばつてこれを殺す、今罪惡の元品の無明の煩惱のために我々は墮落したから、その解決は煩惱を退治することにある、それは戒によつて檢束する、捕へる、それから今度は定によつて縛り上げる、更に慧によつて殺してしまふ、かうなる、この戒によつて捕へ、定によつて縛り、慧によつてこれを殺すといふことで煩惱は退治られる、然し日蓮主義の修行は受持卽成といつて、妙法を持つといふことにすべてのことはこもつてゐる、この道理を一語にして現はしたのである、この三學より得た結果の收穫は何だといふと德だ、德は無量無邊の德があるが、法身・般若・解脫の三德だ、法身はあやまらざる眞理を體達する、それを法身といふ、般若は智慧といふ、それから解脫は自在を得る、解脫といふのは縛られてゐるところから繩をとつて自在を得る、それが解脫である、これを佛についていへば、法身は卽ち法身如來、般若は報身如來、解脫は應身如來である、けれども今德の上からいつたらこの三だ、この三德を名づけて大涅槃といふ、これが横でなく縱でなく、卽ち時間を超越し空間を超越し、三德自在に一つの中に三つがチヤントはいつて、それをたとへて三德の大涅槃の相といふ、これを『世ノ伊ノ三點ノ如シ』といふ。

このいの字ばかりは不思議だ、支那でもこの字がはじまり、印度でもこの字がはじまりだ、日本でもこれがはじまりである、西洋で使つてゐる字は少し違ふが、昔は三國共通の字の形はいの字で、ものゝ不思議とされてある、日本のいの字は「い」とやるがそれは略したのであつて、昔は「ゝい」と書いた、然しこれでは手數がかゝるから、上の「ゝ」を省いて「い」とやつた、「ゝい」は卽ち三つの星だ、これを大涅槃の相といふ、この三つの點はどつちが縱、どつちが横といふことはない、そこで法身・般若・解脫の三つも、三つ寄つて一つの用らきに現はれるから、横ならず縱ならずして一體の三用である、そこでこれを「圓伊」といふ。

圓伊といふのは法華經の道理のことをいふ、そこで私はこの申孝園の謙濟橋の勾欄に三つの星をつけた、それは圓伊の法の三點をあらはしたもので、法華經の教理の象徵だ、得船堀といふ堀のそばにある防波堤にも三つの星がある、天氣の時に見て御覽、これは圓伊の三德、卽ち大涅槃の相をあらはしたものだ、その大涅槃の相といふことが、壽命の結果なんだ、涅槃といふことはなくなるといふことに說いてあるが、法華經の壽量品ではなくならないことになる、小乘經では涅槃はなくなつてしまふが、卽ち滅といふのであるが、法華經の教理では涅槃といふことは不生不滅といふ、卽ちこの三德は不滅相となつて、もろもろの騷がしいことがやんでそしてもろ〳〵

の有爲轉變がやんで、常住の相に安住することを涅槃といふ、本門十妙の中の本壽命妙、それは果報だ、本涅槃妙といふのは德をいふ、法身・般若・解脫の三德、これが一轉して常樂我淨となり、それから割出してゆく、我々にあつては三學、三大秘法、題目の修行が自分の三德を成就する、それは一つ〳〵別に成就するのでなく、題目によつて信仰を統一し、安心を決定して、國家の意義、人生の意義の落着に達する、心が朗かできび〳〵してゐて何ものにも屈しない、動搖しない堅固不拔の信力に住し、そしてこの世を經營し、その上で商人（あきんど）になつても政治家になつてもそれでやつていかなければならぬ、その根本要素を缺いたものが世の中に充滿してゐる、それが商人となるから暴利を貪り、それが政治家になるから世の中に面倒を惹き起す、

『善ニツケ惡ニツケ法華經ヲ捨ツルハ地獄ノ業ナルベシ』

と大聖人は喝破した。

大聖人の主張は、正法を立てゝ國を安ずるにある、この佛の正理を我々に移す、それが正しい修行である、それを受持の一行といふ、面倒なことはいらない、法華經をよく信じよく持つて、本佛の命令に從ふ、その本佛の命令を間違ひなく解釋して下された本化の教、即ち大聖人に服從すれば本佛の教に服從することになる。

『正直ニ方便ヲ捨テ、但法華經ヲ信ジ、南無妙法蓮華經ト唱フル人ハ、煩惱業苦ノ三道、法身般若解脫ノ三德ト轉ジテ、三觀三諦即一心ニ顯ハレ、其人所住ノ處ハ常寂光土ナリ、能居所居身土色心俱體俱用無作三身、本門壽量ノ當體蓮華ノ佛トハ日蓮ガ弟子檀那等ノ中ノ事ナリ』

この色は身體、心はこゝろ、『身土色心俱體俱用無作三身、本門壽量ノ當體蓮華ノ佛トハ日蓮ガ弟子檀那等ノ中ノ事ナリ』とある、だから『此ノ品ノ如來トハ總ジテハ一切衆生ナリ、別シテハ日蓮ガ弟子檀那ナリ』となる、如來壽量の如來とは一切衆生のことをいふけれども、如來は釋迦如來が本場だ、我々は如來ではない罪の衆生だ、その罪惡の衆生が決して罪惡の儘でをるべきではない、根本は本佛の境地から分離して來たものである、その事を知らずにゐて自ら罪惡に墮ちてゐるが、根を洗つて見ると如來である、その根を洗ふ根元を明かしたから、『此ノ品ノ如來トハ、總ジテハ一切衆生、別シテハ日蓮ガ弟子檀那』と二つに分けた、これを早合點すると大騷動だ、『總ジテハ一切衆生、別シテハ日蓮ガ弟子檀那』といふその『總ジテハ一切衆生ナリ』といふことは哲理的解釋である、『別シテハ日蓮ガ弟子檀那ナリ』といふのは宗教的解釋である、我々は今信を起し行を修し、道を求めてその信に入らうとしてをる、であるから無條件でこの世の中に生存するのでなく、一定の條件の下に道に入らうとかういふのである、これを一般人と一緒にす

ることは出來ない、若しこれを一般人と一緒にしてしまふなら宗教といふものは存在する必要はない、だから大聖人は『總別ノ二義ヲ知ラザルモノハ成佛思ヒモヨラズ』と仰しやつた。

信仰修行の目的は成佛であるが、その成佛としてはまづこの總別の二義を明かにしなければならぬ、『總ジテハ一切衆生』であるからといつても、一切衆生が佛なら其の儘でもいゝではないかとなる、さうなると宗教の意義をなさない、修行の理由が成り立つて來ない。

『總ジテハ如來トハ一切衆生ナリ、別シテハ日蓮ガ弟子檀那ナリ、――總別ノ二義ヲ知ラザルモノハ成佛思ヒモヨラズ』

これは當家の學者でも、この義を失墜して法華本門の實義は、森羅萬象悉く佛境界であると說いて『物を見るに妙法ならざるなく、人を見るに本佛ならざるなし』といふやうな安心だから、何にもしないでも佛であるといつて、禪宗の出來損ひのやうなことをいつてゐる、この釋尊付囑の大法を大聖人が御艱難され、生命がけで血を以てきづかれたこの法門を、そんな空漠たる理論一ぺんで片づけてしまはふといふことで、長い間ごたついてゐたから、この宗教がどんなに失墜し實世間に效力をなさない、たま〳〵信仰をいへば迷信でなければ信仰でないやうにいふ、國家と共に成佛するとか、世界と共に成佛するとかいふ高尙な安心を認めない、國家を忘れ世を忘れ、自分だけの個人主義、利己本位の信仰、家内安全息災延命の信仰、經には『諸天ハ晝夜ニ常ニ法ノ爲ノ故ニコレヲ衞護ル』とある、法のことはそつちのけにして、たゞどうか護つてくれといふ、『法ノ爲ノ故ニ』とある、法を信ずるから、法が大切だから諸天善神が護るといふ原理から來てゐる、法を持たないで、法はそつちのけで、自己本位で、神よ賴む佛よ賴むといつても、それは自分の爲にたのむのだ、未來は極樂淨土にやつて下さい、どうかこの世の病氣災難をはらつて、そして自分だけ安穩にして下さい、稼がないで儲けさせて下さい、餘り働かないで金を得るやうに護つて下さい、かういふやうな低級な慾望をふりかざして、それも一種の煩悶であるからその煩悶の慰藉を宗教に求めるといつたやうな信仰、それを坊さんたるものが默つて見てゐることはない、それよりもつと大きなものを求めなければならぬと教へてやらなければならぬのに、なすが儘にまかしてゐる、默つてゐるどころか迷信を鼓吹して、肝心の末法應時の大法が雲にかくれて、世を照すことの出來ないやうにしてしまつて、形骸だけの宗團、お題目でやつてゐるから、宗教打倒運動が起る、全體宗教打倒は今非常に必要であらうと思ふ、日蓮聖人は七百年前に打倒宗教の運動を起した、諸宗無得道墮地獄の根元と叫ばれたが、これ以上の打倒はない、丁度ダリヤの花が腐つて散ることを知らないやうな按排に、時機にもはづれ佛法の使命にもそむいてゐな

がら、生をむさぼつてこの世の中に厄介になつて恥をさらしてゐる不得要領の佛法、こんなものは潰さなければならぬ、諸宗無得道といふ所だ、今や日蓮主義の一類もその病に罹つて、徒らに後生安樂を願ふくらゐで、やつとこさ惰力でつないでゐる、この大法は潑剌として世を指導し、これに魂を與へ人生に花を咲かせ、現當二つの本願を滿足せしむべき立派な使命を帶びてゐながら、棚の上にあげて置いて、相變らず御多分にもれない迷信界にまごついてゐるやうな有樣、それをこの正確で適切なる指導によつて正しくその原據を與へたのが三大秘法である。

三大秘法は法ではなく修行である、法が卽修行に顯はれるものが三大秘法である、卽ち事實である、理想の雲の上に只崇むべきものではなく、現實の上に建設すべきものである、本門の本尊本門の戒壇、本門の題目、皆さうである、ところが國家から見たら本門の戒壇が本尊と題目とを背負つてゐる、本尊から見れば、戒壇と題目とが其の中にあり、又題目から見れば其の中に他の二つがある、どれか一つが缺ければ三つ各〻缺ける事になる、それは今の總別二義の中に於て、別してこの佛の教に從つて、

『質直ニシテ意柔輭ニ、一心ニ佛ヲ見タテマツラント欲シテ自ラ身命ヲ惜シマズ』

となつて、三寶の名を今度は聞くやうになる、さうなつて始めて信を起す。

それから、その信が正直に植はりついて始めて我等が功德海に入る、それが本門壽量の金言を信じて、

『正直ニ方便ヲ捨テ、但法華經ヲ信ジ、南無妙法蓮華經ト唱フル人ハ、煩惱業苦ノ三道、法身般若解脫ノ三德ト轉ジテ、三觀三諦卽一身ニ顯レ、其人所住ノ處ハ常寂光土ナリ、能居所居身土色心俱體俱用無作三身、本門壽量ノ當體蓮華ノ佛トハ日蓮ガ弟子檀那等ノ中ノ事ナリ』

となる、その『中ノ事ナリ』といふのは、他はいけないといふのである、中に限る、この經を如法に持つたものに限るといふことである、だから持ちといふ、持たなければいけない。

それではどうしても信じないものはどうする、何にしても信じさせる、『以何令衆生』とある、どうしても信じさせなければならぬ、彼等がこの法を信じないといふのはその方法に缺陷があるからだ、どうなりとして信じさせる、てんづけに宗教を以ていかなければ、學問、議論、政治、藝術、或は經濟、何を以てしても法華經を信じさせるやうに仕向けて行く、何でもよい、國家の經濟といふやうなことでも我々のやうな貧弱なものでも相集つて經濟的に法華經を弘める、日蓮主義の經濟を以て弘めるといふ考へが起れば甚だ簡單に出來る、けれども今のところでは異體同心でない異體異心だ、甚だしきは同體異心だからそれが出來ない、如何に衰弱せりといつても日

蓮宗門の寺院は五千ある、單稱だけでも三千七百ある、その檀信徒は戸數でいへば約四十萬ある、人口でいへば少くも百四五十萬はある、これだけのものが皆異體同心に、皆大聖人を信じ妙法を信じて、如法にその信念が發達してをれば、宛然たる一勢力となる、これだけのものゝ生命財産が集まつて有意義に働いたら、三井や岩崎ぐらゐの勢力以上だ、三井岩崎のやうなものでも政友會や民政黨を動かしてゐる、ましてそれ以上の勢力となれば今の政黨なんか何でもない、日蓮主義の經濟を以て世を救ふことは一朝にして出來る、世の中のいろ〳〵な失業問題だの、財政難だの、さういふ不條理なことがなくなつて、根本の光明から照されて眞の法華經的政治、法華經的經濟、法華經的産業、法華經的學問、法華經的社會が實現すれば必ず『吹ク風枝ヲナラサズ』といふやうになつて、雨がこんなに降つたり、天候が不順で人の病が增惡して來るとかいふやうなことはなくなる、今年などは夏になつてこんな陽氣は何十年にない、これは天に病があるので、從つて人心も險惡になる、天地和順といかないから人間も不良な精神を釀して來る、人間がいら〳〵する、神經がたかぶる、ろくな事を考へない、これをもつてます〳〵世の中は暗黑となる、これを照すべき光明である、俱體俱用無作三身、本門壽量の當體蓮華の佛を感得することは、日蓮が弟子檀那等の中の事なりと掟られてある、だからこれでなければならぬとなつて弘める、それが一天四海皆歸妙法である、世界中が一妙法に歸するといふのでなければ世界問題の解決は出來ない、世界問題の解決が出來ない以上は個人の解決が未だ出來ない、我等の成佛は未だ未成品だ、國家と共に成佛することに於て國民的に成佛が決定する、世界人類と共に成佛するといふことによつて我等の人生は決定する、目標はそこにある、それを本として而して後に進む、それであるから不惜身命でなければならぬ、續種護法でなければならぬ、これでお終ひだと『倒れて而して後に止む』ではいけない、生々世々止まない、死んでも止まない、子々孫々まで傳へ、自分は亡者となつても必ずこの事業は達成しなければならぬといふ大決定心、大勇猛心に全國日蓮門徒が起つたら、貧弱なりといへども未だ〳〵日本を整理し、世界に對抗する力がある。

『一閻浮提ニ人ゴトニ有智無智ヲキラハズ一同ニ他事ヲステ、南無妙法蓮華經ト唱フベシ』といふのが、日蓮主義の大宣言であり大事業である、それは命がけだ、その大誓願の中に我々はいつたのだ、日蓮門下としてはいつたのだ、自分の力でやるのではない、大聖人の誓願に同化してこれを貫きたいと考へさへすればよい、財力あるものは財力、智慧あるものは智慧によつて、各々の持つてゐるいろ〳〵な力を集めて來て、これを大聖人の一つの事業に集中する、それが異體同心だ、身體は異つてゐるが、各々には皆いろ〳〵な力がある、それが一つの力に集る、異體

いよ〳〵異にして同心いよ〳〵同となる、それが異體同心だ、即ち大聖人の心を以て心とする、そのために出來た法華宗門だ、その眼目骨髓が三大秘法だ、然らばその原則は何から來たかといふと、今の功德を分析して戒定慧の三學と法身般若解脫の三德となつて、この功德を積めばこそ壽命は長い、汝等もこの功德を積まなければならぬ、俺の眞似をするといつても、たゞ俺の中にはいつて來ればよい、されば

『釋尊ノ因行果德ノ二法ハ妙法蓮華經ノ五字ニ具足ス、我等此ノ五字ヲ受持スレバ自然ニ彼ノ因果ノ功德ヲ讓リ與ヘタマフ』

とあつて、本佛釋尊の因果の功德が妙法五字の中に集中して居る、その妙法五字を持ちさへすれば、自然にこの因果の功德を讓り與へたまふ、さうするには先づ三寶の名を聞くことからはじまる、名を聞いて信を起す、それから日蓮門下となる、日蓮門下とならない以上はどうしても如來壽量の如來の財産を相續することは出來ない、子は子でも勘當された道樂息子である、讓り與へ給ふといふ資格がない。

そこで成佛を願はゞ總別の二義をわきまへなければならぬ、總別の二義をわきまへなければ成佛は思ひもよらずと指定してある、だから『此ノ品ノ如來トハ總ジテハ一切衆生ナリ、別シテハ日蓮ガ弟子檀那等ノ中ノ事ナリ』と判じて他のものはいけないと仰しやつた、ところが皆他だ、それをこの中に入れなければならぬ、この中に入れようといふのが我々の仕事だ、極樂がどうなるか、地獄がどうなるか、何がどうなるか、そんなことは詮索する必要はない、言ひつけられた通りやつてゐればよい、その意と殁交渉で南無妙法蓮華經といくらやつても、それは駄目だ、これを行意といふ、行意がそこになければならぬ、一天四海皆歸妙法といふ誓願から生み出されたお題目でなければ同向にもならない、未來の佛果も得られない、現世安穩も成じない、正しき本尊、正しき修行、正しき行意、これにはづれたら落第だ、然らばこの法門の上においてこれを正しく究めなければならぬ、先づ最初に御本尊に於て組織的に見ることにしよう。

然しこれは話が擴がるから次の講座において話さう。

第四講　理想と現實の一致

今度の講習會に、はじめは十日間毎日出講するつもりであつたから、もつといろ〳〵な題をつけて話す心算でありましたが、身體の工合で隔日となつたので、おまけに時間が制限されて一時間半といふことになつた、二時間乃至二時間半位で十日もやらなければ話が一寸まとまらない、よつて題を變へずに最初に出した「三大事」といふことを、もうあと一回で納めてしまう。

その三大事といふことは、大體三大秘法のことであるが、その三大秘法の根源とする法は何であるかといふと、妙法蓮華經の五字の中心たる妙といふことである、

『品々ノ内ニ咸ク體等ヲ具シ句々ノ下通ジテ妙ノ名ヲ結ス』

と妙樂が釋してあつて、一句々々の中に皆妙の義がある、大聖人も前後中間妙法蓮華經の五字を以て貫いたのが法華經である、この意がなければ法華經にならぬ、妙法蓮華經の五字はその義に非ず一部の意なり、つまり妙といふことが眼目なんだ、佛の形について種子・尊形・三摩耶といふ三つの條件がある、三摩耶は本誓で佛菩薩の誓ひをいふ、尊形はその現はした相をいふ、その上に種子といふ、種である、よく梵字でいろ〳〵な佛菩薩の符號の象徴のやうなものがある、あれを種子といふ、天親菩薩は法華經の種子について種子無上といふ法門をとかれた、この上もない種といふことと、種の中のまた種といふことである、種がなければ芽が出ない、幹も枝も葉も花も木の實も、一切種から出生する、そこでこの妙法蓮華經は三世成佛の佛の種である、その種といふことを痛切に理解する焦點が妙の字にある、そこで天台大師は迹門の十妙といふものを明かし、又本門においても十通りの妙を明かしてゐる、つまり迹門の十妙、本門の十妙、觀心の十妙といつて妙の字をいろ〳〵に說くが、究竟して百二十重の妙といふことにもなる、のみならず一切萬法を妙によつて活かして行くから、實は八萬四千の法門皆妙になるし、その根源は妙法蓮華經の大眞理の一つである、それが裸體の眞理ではいけない、眞理といふものは宇宙に遍滿してゐる、別に佛が出て說かなくても、佛があつてもなくても、眞理は宇宙に儼存してゐる、それが佛が出で眞理を悟つて、我々にわかるやうに敎へて下されたといふのである、そこで複製された眞理が始めてこゝに出來てくる、これが佛法では乘といふ。

◇

種といふことについて、手をつけないでも、そのまゝ眞理といふものは儼存してをるものであ

る、それはすなはち種のないことはない、それを性種といふ、凡夫でも惡人でも佛の種はもつてゐる、その儘で持つてゐる、けれどもそれではいつまでも寶の持腐れで、眞理を開發出來ない、種が芽をふいて來ない、そこで佛が一切衆生になりかはつて、一ばん正しい智慧をもつて正しく眞理を見たその心で一切衆生に眞理といふものはかういふものだといふことを案内して下さる、からなつたらば凡夫にわかるだらうといふ手勝手のいゝ樣に加減をして說いて下さる、それからまた行つても見せて下さる、その中にも衆生の心の方に多分つき合つて話した部分と、それから佛の御自分の本性をその儘說いたのと二つある、衆生の心に多分隨つて說いたのを隨他意、權智といふ、佛の權智といふ、一切衆生の心を中心として說かれたからである、それから佛の本領の通り、衆生の如何に拘らず說いたのを隨自意、實智といふ、何であらうとこの權實の二つを以てその性種、即ち眞理そのものをば佛がチヤント料理加減して與へて下されたのを乘種といふ。

◇

乘といふのは敎といふことだ。

『諸佛兩足尊、法ハ常ニ無性ナリ、佛種ハ緣ニ從ツテ起ルト知ロシメス、是ノ故ニ一乘ヲ說キタマフ』

とある、佛の種は緣から發生して來る、であるが故にその緣を標準として、その緣の方の基礎から說き進んで行つて、救ひとられなければならぬ、だから緣を閑却することは出來ない、ところで性種といふ方は緣も絲瓜もいらない、天地の理法は宛然として存在してをる、悟らせるとか修行させるとかいふには、その方法を案出して適當に與へなければならぬ、與へていくにはいろいろの緣をたどつていかなければならぬ、こゝにおいて緣因佛性といふものが始めて入用となる、『是ノ故ニ一乘ヲ說キタマフ』即ちこの妙法蓮華經の法を說いて、その法の力を設定してそれに賴つて來いといふのだ。

佛の方の腹の中にある眞理は、妙法蓮華經は本法といふ、それからそれを慥へあげて我々に授けるやうに料理して與へられたものを要法といふ、經文の中にも

『諸ノ經方ニ依テ、藥草ノ色香美味皆悉ク具足セルヲ求メテ擣キ篩ヒ和合シテ、子ニ與ヘテ服セシム』

とある、擣いたり篩つたり調合したりして、良藥にして與へてやつたが、その久遠の本法をば末法の要法として授けられた、要は『かなめ』だ、これにさへ賴ればたしかだといふ要領を得てこしらへた法だ、同じ南無妙法蓮華經だが釋尊の腹の中にあれば本法、それが上行菩薩に與へられ

て、我々が實際に行つて效果のあるやうになつたのを要法といふ、即ち乘種だ、その乘種を要としたものだ、だから種は妙法蓮華經の種だ、その種といふことは妙法蓮華經と五字あるが、妙の一字をもつて代表する、だから妙に力を入れて說いた。

全體いふと正しいといふことだ、たゞ正しいではいけない、甘味がなければならぬ、これに甘味をつけたのが妙といふことだ、梵語では薩といふ、法護三藏といふ人は正と飜譯して正法華經といつた、妙とは正しいことだ、その正しいことにもう一つの義理、うるほひを添加した意味が妙となる、羅什三藏は妙と譯した、そこで天台大師も日蓮聖人も妙の方に賛成してゐる、然しながら正でないといふのではない、正は正だが正だけではまだ足りない、あの人は正直な人といつて正直はよいが、人間は正直ばかりでいけないことがある、その正直に甘味がなければならぬ、妙はかほよしといふことだ、かほよしといふのは、女の顏の美しいことだ、尤も白粉や何かをつけていろんな簪をさして美しくしたことをいふのではない、白粉をつけないでも、簪をつけないでも、紅をさゝないでも、生の儘で何ともいへない愛嬌がある、尤もお婆さんではない、だから女扁に少と書く、かほよしといふのは皺があつてはいけない、年どろでなければいけない、十六から十七八といふところかナ、鬼も十七番茶も出花といふから、その邊だ、その若い娘の何ともいへない愛嬌のある呼吸をいふ、その愛嬌のあるといふ中に、愛嬌といつてもいろ〳〵ある、わざ〳〵造つた愛嬌もある、けれども未婚の少女は身體が汚れない、その汚れないといふところにどこか神々しいところがある、その神々しいところに又いふにいはれない愛嬌がある、それを程よしといふ、その意味から妙の字は來つたから、妙といふことはうるほひのある、ほどのよい、何ともいへないといふ呼吸をいふ、そこに形容の出來ない甘味がある、だから妙とは不可思議なり、この法は思議し難しと釋尊も言つてある。

その內容は正しいといふ、この正しいといふことは曲らないことが正しい事だが、曲らざるばかりでなく、明るいといふ意味もある、正の字を「あかるい」とも「まど」とも訓む、家の明りをとる採光の方角を正といふ、もの〻上ともいふ、中心ともいふ、司ともいふ、正の字はいろ〳〵さういふ義理がある、だから何とかの正といふのはかみといふことである、今でもその字を使つて檢事正とかいふ、それはもの〻上に立つことだ、だから明るいとか、曲らないとか、中心とかいふ意味を含んで正といふ、文字の形からいつても、一を守つて以て止まるといふ義理になる、一を守つて以て止まるといふのは、天地萬物には中心がある、それをはづれてはならん、即ち中心を把住することをいふ、それを仕上げてくると妙になるから、羅什三藏は妙といつた、妙

なる法だ、法が妙だから妙なる法といふ、これを音便と義便といふ、法妙なるが故にその法を妙法といふのだ、本來いふと妙法蓮華經といつてよい、それが妙なる法として一つの組織の下に我々の通則となるといふ場合に、妙なる法となつて妙法と讃歎した言葉と變化して來て妙法とかうなる、その有樣を譬へて蓮華といふ、譬喩をもつて蓮華と說いてあるが、今一往釋に從へば蓮華といふものは極めて淨いものである、淨いといつても只の淨さではない、自ら徹底して淨い、どうしても汚れを以て汚すことの出來ないものである、汚い水をかけてもよごれない徹底して淨いものだ、それから蓮華は蕾が出るとその中に實がある、花が育つと實が一しよに育つ、それを華菓同時といふ、たいていの花は花が咲いて散つてから實がなるが、蓮華は同時に花と實がなる、これを天地法界の森羅萬象の悉くに一念三千の佛性が存在してをる、因果同時であるといふことを、妙法蓮華經の道理によく合つたものであるから蓮華を譬へに借りた。

◇

當體蓮華といふことは、この世の中がすべてそのまゝ蓮華であるといふことで、最後佛敎の道理においては、譬喩の蓮華でなく當體蓮華である、本門壽量の當體蓮華といふ、我々も蓮華だ、その妙法蓮華の筋道を條理整然とあらはしたことを經といふ、そこで妙法蓮華經の五字は、天台大師も名體宗用敎の五重玄の五字を以て解釋した、けれどもその法の價値を現はすには妙の字でなければならぬ、そこで妙といふ義理を述べられた、今本門の十妙といふこと、あの本門の十妙が、この壽量品の十通りの方面から妙の義理をあらはしたといふことである。

本因妙
本果妙
本國土妙
本感應妙
本神通妙
本說法妙
本眷屬妙
本涅槃妙
本壽命妙
本利益妙

これは順序から申すと、感應、神通、說法、眷屬、利益とかうなるが、どちらからいつても妙が

十あるといふのではない、十の方面から妙の義理を心得ていくといふことである。

◇

これを一々くはしく話すと大層な時間をとりますから、要するに一言にして先に話しておく、本因妙は佛の修行した因位の修行をいふ、本果妙といふのは、それから得た佛の果報、佛果をいふ、本國土妙といふのは、その本果の成佛の住所場所をいふ、その功德をなづけて本壽命妙といふ、その功德の安住を名づけて本涅槃妙といふ、それからその佛がいよ〳〵衆生を敎化する上に於て衆生の機根に應じて救ひの手をのばして行くそれが本感應妙だ、感應が成立すると先づ佛は神通力を以て、衆生のいろ〳〵な執着した迷ひを一ぺん破る、それが本神通妙だ、それから後に法を說く、それが本說法妙、法を說いたから敎を受けたものがこゝに出來て弟子が出來る、それが本眷屬妙、眷屬があるからその眷屬がどういふ利益を受けるといふ、妙法蓮華經によつて受ける利益を明かす、それが本利益妙、それが尋常のことでない、皆中心的であり徹底的であるがゆゑに妙といふ。

これは十妙といふことを明す大體であるが、この中で何が眼目だといふと、本因本果本國土の三つが根本だ、迹門にも十妙がある、それは因が多く果が少い、本門の十妙は果が多くて因が少い、何故かといふと、迹門は因位の修行の法門で、本門は佛の境界を明かしたものであるから果を重んずる、本因妙を除くの外は皆果である、果を開いてあとを意（こゝろ）としてある、さうすると本因本果本國土といふとの本因、卽ち釋尊の因位の修行といふものは、妙法蓮華經の一ばん正しい修行の法といふものはどういふものか、その正しい修行によつて得た果報はどういふものか、その果報を標示するところの依地卽ち本國土といふものはどういふものか、この三つを詮索すれば始めて成佛の大要といふものはこゝに決まる、その三妙の以下に稱してをるところの壽命、涅槃、感應、神通、說法、利益、眷屬、それは皆それから出て來る、その中の骨が、本因、本果、本國土の三妙である。

方便品の十如是といふのは、所謂妙法の法を境界的にとる、十通りに觀察した。

『所謂諸法ノ如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等』

これを十如是といふ、その十如是といふその十如是の中でも如是相、如是性、如是體の相性體の三つが本である、あとの力・作・因・緣・果・報・本末究竟等はそれから出て來た、それで名體宗用敎の五重玄義といつても、體宗用の三つが本である、それを總じて名といひ、それの組織的說明を

教といふ、つまり三つだ、萬事は皆三つで落着のつくやうになつてゐる。

昨日、前回に話した功德の中の功は修行であつてそれは戒定慧の三學、それからその行功から得た德は、法身・般若・解脫の三德になつて、その三德の身に積聚したものを法身、報身、應身の三身ともいふ、三德といひ、三身といひ、それを觀察する法を三觀といふ、觀察する大意を空假中の三諦といふ、その觀察を用ゐるところの智慧を空觀、假觀、中觀とこの三つの觀をやる、智を三智といふ、それは一切智、道種智、一切種智の三つで、一切智は空觀、道種智は假觀、一切種智は卽ち中道觀である、つまり三觀といふのも、三智といふのも、三涅槃といふのも、三つの數量を帶びて說いた法は、皆同じ系統の法門が違つて現はれてゐるにすぎない、だから『一三ヲ成ズ』といふ、だから三は並べて三つあるといふのでなく、一つのものに三面觀察が起つて來る、三大秘法もつまりそのわけである。

然しながら先づ順序としてこゝに根元法としての今の妙の字の義理、三妙だ、本因、本果、本國土の三妙、それを一つ觀察してゆく、それから我々の修行の實際において規則だてられた三大秘法、本尊、題目、戒壇といふ三大秘法、これは先づ佛法の上の一ばんせりつめた最高無類の、これより外は行くところがないといふ勝れた本仕事だ、三大秘法といふ秘法といふのはさういふことだ、秘法といふのはたゞかくすといふのとは違ふ、一ばん勝れた法といふことだ、秘密といふことは極尊いことを意味してゐる、三大秘法といふのは三つの秘密の大法といふことで、秘密といふことはひしがくしにすることではなく、人の容易にわからない、ぼんやりしたものではわからないといふので秘密といふ。

◇

この三大秘法は法門的原理としては、本因、本果、本國土の三妙から起つて來る、この三妙に自ら他の七妙を兼ね具へ、乃至三十妙、百二十重の妙、又及ぼしては八萬四千の妙、一切のことは皆この一妙におさまる、その一妙といふのは何であるかといふと、一念三千の種子、これを佛因といつてある、一念三千の佛因を說かざる敎は佛の種がないから、修行しても佛に成れない、種を播かなければ芽が出ない、種は大切だ、そこでこの妙法蓮華經を以て佛因とし種とする、是は性種といふ種であるが、それに乘種といふ佛の說法が通じて現はれて來た、卽ち佛の慈悲といふもの、佛の功德といふもの、佛の智慧といふもの、さういふものが皆性種の上に集中して來る、乘種といふのは敎の上の種だ、だから南無妙法蓮華經といふのは乘種だ、どつちかといふと通用してどつちも使ふが、妙法蓮華經といふ五字は眞理そのものゝ名で、南無妙法蓮華經いふのは妙法蓮

華經に歸依することだ、たゞ妙法蓮華經ではいけない、南無妙法蓮華經でなければならぬ、妙法に南無し奉るとなつてはじめて妙法蓮華經をわが心田に下すといふ所作が起る、それが種だ、その種から芽が生えて佛となることが出來る。

この法界は一つの中心に集まる、その一つの中心といふのは何だといふと、例へば森羅萬象といつても、三千法界といつても數が多いといつて驚いてはいけない、その多い數の中に中心がある、その中心は卽ち本佛だ、その本佛には功德といふものが結晶してなつたから、功德そのものから出たものでなければならぬ、人は善人になると世が治まるといふのは、この功德を延長して行くことだ、功德が中心にならなければ、どんなうまいことをいつても何にもならない、眞理といつても功德を加味してゐない眞理は効力がない、『久修業所得』といふのでなければ我々の成佛の種とはならない。

◇

ところで先づこれを私が今、皆さんにごくわかりのよいやうに、お經の文の上で會通を加へておく、壽量品の最も人によく讀まれてをるのは自我偈だ、自我偈の中で十句の要法といふのは、壽量品の中で一番大切なところとしてある、これは法華ばかりではない、どの宗旨でも壽量品の中の十句の要法をば大切なものとしてある、それは

我此土安穩　天人常充滿
園林諸堂閣　種種寶莊嚴
寶樹多華菓　衆生所遊樂
諸天擊天鼓　常作衆伎樂
雨曼陀羅華　散佛及大衆

この十句だ、壽量品の最要たるとの十句は本門壽量の義理を得る上に於て覿面の根據だ、且つ又誰でも讀んで知つてるからこれを話す。

『我此土安穩、天人常充滿、園林諸堂閣、種種寶莊嚴、寶樹多華菓、衆生所遊樂、諸天擊天鼓、常作衆伎樂、雨曼陀羅華、散佛及大衆』とこの十句、この十句をば先づ三妙にはじめ觀察して行く、『我此土安穩、天人常充滿』といふのは本國土妙をいふ、『我ガ此ノ土ハ安穩ニシテ天人常ニ充滿セリ』一切衆生の方は、有爲轉變のいろ〳〵の苦しみがあつても、その苦の娑婆が俺の方で見ると極樂淨土である、我が此の土は安穩にして天人常に充滿せりだ、我土と彼土と二つあるのでなく、我々の住んでをる現實の娑婆だ、この外に佛の國土といふものは、十萬億土の先とか、

東方とかに國土があるのでなく、我々の住んでをるこの世界を『我レ成佛シテヨリ常ニ此ノ娑婆世界ニ住セリ』といふ、この娑婆は穢土といつて、迷ひの土で苦しみの國である、早くこれを捨てゝ極樂世界の阿彌陀の世界に行かうと考へてゐるその考へ方を打破つて、この娑婆世界が即ち俺の居る所、本佛の居るで所ある、『寂光ノ外ニ娑婆アルニ非ズ』、これは佛の方から見た寂光淨土である、その寂光淨土に我々が住んでこれを娑婆としてをる、佛の方の目から見ると間違つて居ることは變則であつて、苦しくも何ともない、その證據を明して『我ガ此土ハ安穩ニシテ天人常ニ充滿セリ』といつた、天も人も常に充滿してをる、掛値はない。

『園林諸ノ堂閣種種ノ寶ヲ以テ莊嚴シ』、色々な林があつて、その林の中にはいろ〳〵なお堂や閣があつて、それは皆世にも珍らしい樣々な寶をもつてかざられたつてある、その林にあるところの木には、花もどつさりあるし、實も房々となつてをつて、如何にも美しい、のみならずその花なり實なりは、又宛もその味は天の甘露の如く、例へばそのなつてをる實を一つ食ふと何ともいへないほど甘い、のみならずそれが何年の壽命でもそれで保てるといふ、不思議な効果のある結構なものが、どつさりなつてをる、であるからよろこんで皆その實を取つて食べ、花を眺めて衆生が遊樂する、たゞそればかりではない、更に諸天の天人がゐて天の皷を擊つて、常に諸の伎樂をなす、天人がいろ〳〵の舞をもつて慰さめる、『寶樹多華菓衆生所遊樂、諸天擊天皷、常作衆伎樂』とある、なほその上に天上からは曼陀羅華を雨すとある、曼陀羅華といつて目出度い花、それが天から雨つて來る、芳香馥郁たる花が雨つて來る、それが佛樣の上にのみ雨るのでなく、それを取りまいてゐる多くの一般大衆の上にも雨る、『佛及ビ大衆ニ散ズ』と、かういふ結構な世界である、と佛の境界をあかした、これが別にあるのでなく、娑婆世界がさうなんだ。

◇

こゝに問題が起る、此方は、我々衆生は苦しみの海に沒在してをる、人類苦であるとか、生活苦であるとか騒いでをる、この不景氣ではたまらないといつてガタ〳〵やつてをる、この不景氣でたまらないといつて人が苦しんでゐる世界そのものが『我此土安穩、天人常充滿』の佛境界だといふ、どつちが本當だ、それが、苦しみが娑婆で、佛の國は別にある、といふのでは問題はないが、『我常在此』とあつて常に此に住すといつて、これが佛の國だ、その佛の國はかういふ風に天人が常に充滿して、天の皷を擊つて伎樂をなすといふが、我々凡夫の方ではなか〳〵さういかない、我々の見た四苦八苦の娑婆が本當か、佛の御覽になつた『我此土安穩』の方が本當か、これ

は今の議會の法則で多數決によると、佛の見方は否決されてしまふ、何故ならば凡夫の方が多いから多數決でやられてはたまらない、ところで今の世の中は多數決で一切處置しようと考へてをる、何事も苦の世界であるといふ觀察でこの世界を見てをる、だから苦しまなければならぬものゝやうに思つてゐる、ところがそれは嫌ひでありながら、いろ〳〵な苦しみを求めて何とか苦といふことをよくいふが、生活苦とか人類苦とかわざ〳〵かういふことをつくつて、その中に埋まつてゐる、ところがその住んでゐる娑婆世界が本佛の境界であれば、どつちを標準とするかといふことになる、即ち我々は信仰といひ成佛といふのは、標準を佛におかなければならぬ。

一（塗板に横線を引かる）

これが世の中だ、横に見た世の中だ、國といつても社會といつても横に廣いものである、これは方に約する、所に約する、境界に約する、此方の方から勘定して行つてだん〳〵やると、三つにも四つにも十にもなる、それを十界といふ、境界を十に分つて十界といふ。

◇

今度は、横に見ないで縱に見なければならぬ、縱に見ることを考へなければならぬ、縱に見るとは何であるかといふと、ものゝ起りだ、ものゝ起りとものゝ行末だ、これが縱だ、即ち時に約する。

十（先に引かれた横線に更に縱線を引かる）

横は空間の觀察で、世の中はいろ〳〵のことがあつて、この横線の左から右までには距離がある、その間でいろ〳〵衝突する、間違ひもあつて世の中は複雜になつて行く、今度は空間でなく時間の上から觀る、方に約して觀察しないで時に約して觀察する、さうするとものゝ起りだ、これは因果の法則だ、物の起りは花から實になつて、實からまた花になつてくるのは縱だ、その起りをば此方の方から見るから本といふ、その行く先を見るから末となつて、本末となる、この終始本末といふ方の觀察は縱の觀察だ、縱は縱で觀察し、横は横で觀察しては何時までたつても要領を得ない、これを要領を得させるには何うするかといふと、横に縱を重ねて

十

と持つてくる、横を縱にしてしまふ、空間を時間化する、同時に時間をも空間化する、文字でい

ふと十の字です、十の字はかなふといふ、だからこれは口扁を書いても叶ふといふ、よく寄席の看板に『大入叶』と書くが、御祈禱の方では叶といふことを一つの咒ひにいふ、お札や何かを書くと必らず叶ふといふ字を書く、叶ふといふのは、横と縦とがピツタリ一つになるといふのは、空間と時間とが交叉して來てはじめて意義を生ずるといふので、叶ふといふ、だから祈つたりするにはこれが入用だ、で宗教情操といふものは、此方の信仰をもつて或る目的を得やうといふ、その信仰が嵩じて修行になる、そこで一般宗教の原則としては爾ういふ意味は何處にもある、十字の印といふのは普通の宗教では皆使ふ、十字架といつて耶蘇教の印にしてゐるが、あれは耶蘇の磔柱だといふが、とにかく耶蘇教以前の宗教には十文字を用ゐてゐる例はいくらもある、佛教でも同じことだ。

◇

横と縦と交叉して行くところに一つの用が起る、かうして見ると問題は今度はまん中の交叉點に來る、

（更に十字の中心に丸を付けらる）

これは横と縦と全然ちがつた方角のものが、まん中で一つになる、これが中心點だ、これを叶ふといふのである、よく九字を切るなんてことをいふが、即ち叶ふといふことをいくつもやるのだ、これは物の成就する力を生み出す本だ、即ちこの横は法です、森羅萬象の法です、それを『如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等』と、佛は十通りに諸法實相を說いた、その諸法の實相として、實の相として見たのは、即ち妙法蓮華經の道理を以て貫いて見たから縦の三諦の道理だ、即ちこゝでいふと三大秘法、その三諦の諦理を以て十法を見たといふので、この交叉點が大切だ、中心は何であるかといふと即ち諸法の諦理といふ、諦理は間違ひのないことである、佛の諦理をもつて諸法を觀察したといふ中心點がこれが佛の種になる、これを叶ふといふ。

この十字は、耶蘇教の方では、十字は耶蘇教が本場のやうにいつてゐるが、古いのは佛教が古い、この十の字の頭を曲げる（左圖）と、これは用きを示したものである、

これを萬字といふ、十字を一層有意義にしたものが萬字で、これは十字が運動を起した印だ。

佛は本果である、本果の佛の根據地は何であるかといふと本國土妙である、その仕事は何であるかといふと本因妙である、かうなる、だから一往いへば、本果妙は本尊、本國土妙は戒壇、本因妙は題目とかうなる、けれどもこの戒壇といふ、これは戒を受ける場所といふことだ、大聖人は三大秘法については、本尊は可なりくはしく說かれ、題目のことはもつとくはしくお說きになつたが、戒壇のことは餘りくはしくお說きにならなかつた、「報恩鈔」に三大秘法の解釋を求められた中に、本尊と題目は解釋をお下しになつてをるが、戒壇だけは名を票して義を釋せず、『二ニハ本門ノ戒壇』とおあげになつただけである、これを古來何か故あつて戒壇の講釋をなさらないだらうといふやうに說いてある、ところでさうでない、この『本門戒壇』といふ語はもうそれで釋したことになつてゐる、本門の戒といへば、戒はかういふものだ、作法はかういふものだ、と御講釋になるが、本門の戒壇といふことをあげられた以上は、それで解釋はすんでゐる、何故ならば本門の戒壇といふのは、小乘の戒壇、權大乘の戒壇、法華迹門の戒壇は從來あるが、本門の戒壇はない、それがなければならんと主張するのは、本門の戒壇といふものを實現さへすれば解決される、それは何處であるかといふと國だ、本門の戒壇といふのは國を釋した、日本國を釋したのだ、それでは日本だけの話かといふと、それは世界の問題だ、世界問題の解決として、世界の戒壇は日本に建つと、かういふ意味の本門戒壇である、迹門の戒壇は比叡山の延曆寺に先づ一時立つた、これは日本中を統一した、日本中の佛法を一ペン一つにして、叡山に法華經の戒壇が立つた、これは迹門だ、ところで本門の戒壇はもつと大きい、今度は世界中の人がお題目を唱へるやうになつて、そしてその儀式を受けるところは何處に建てるか、それはイギリスやロシヤに建てずして日本に建てなければならぬ、これは世界がさういふ意味で日本に戒壇を建てることを要求する、これは日本が要求するのでなく世界が日本に要求するのである、本門の戒壇論などといつていろ〳〵にいふ人があるが、さういふ無茶なことを考へてをるから法華の法門も人間の安心も立たずに、いつまでもふらついてゐるのである、日本の國家をもつて戒壇とすることは、世界のためにするのである、世界を統一する場合の戒壇、それを日本に建てるといふことを論ずるのが卽ち世界の解決と日本の解決と一緒にしたものである、それは法華經がたま〳〵日本に弘まつたから、どうせどつかにやるなら日本にやらうといふのとは違ふ、日本は法華經の弘まりはじむべき國で、法華經の眼目中心が始めて發祥すべき國で、そして世界を法華經的信仰によつて結着すべき運命を有つた國だといふので、これを本緣の國といふのである、この法華經は日本の人だけの敎ではない、日本の人だけを敎化しようといふので佛が殘したのでなく閻浮提の良藥である、

閻浮提とは世界中といふことである、決して日本だけといふことではない、けれどもその閻浮提の中心の中心を定めなければならぬ、その中心が日本である。

◇

この日本からはじまらなければ、一閻浮提の解決がつかない、一番古い國で、後仕末をつける國である、世界のあらゆる文明が集まつて來て、こゝで仕上げをすべき運命の國だ、印度の文明でも、支那の文明でも、三韓の文明でも、乃至ギリシヤ、ローマの文明でも、あらゆるものが皆日本に來る、又來つゝある、日本が世界の文明を解決するところの運命がこゝに宿つてをる、それであるから、眞似をすることも事實だ、如何なるものでも皆一ペンかみしめてみようといふ、それで日本は傳統が古いから、仕上つたものがだん〳〵味がついて來る、若しエジプトやギリシヤの文明が早く日本に來てゐたら、もつと彼等の文明は日本において發達したかも知れない、印度の文明は間接に佛教を通じて日本に來てをる、けれども一ばん印度の哲理の正味のものは、日本に發達してゐる、印度にはもうない、日本に來て發達してしまつて印度にはない、今印度には小乘教しかない、支那の文明もさうだ、仁義忠孝の孔子の教とか、文化とかは、日本に來てよく完全に發達し咀嚼されてゐる、尙これからももつと發達するだらう、音樂美術の上でも日本に來てよく發達してゐる、それが日本が卽ち世界の最後を處理するところの國の資格として　神武天皇建國の趣意とこの法華經の運命が、奇態に符節を合はしたやうに、因緣が熟してゐる、だから『一閻浮提第一ノ本尊此ノ國ニ立ツ可シ』、世界の一切を統一する御本尊が、この日本に立つ、一閻浮提第一の本尊がこの日本に立つとある。

◇

お題目もこの日本からはじまつた、最後結着の所謂この法を信じて戒を受けるところの戒壇も日本に建つ、

『三國並ニ一閻浮提ノ人懺悔滅罪ノ戒法ノミナラズ、大梵天王帝釋等モ來下シテ躡ミ給フベキ戒壇ナリ』

といふ戒壇だ、世界中の人どころではない、あらゆる宗教が皆これに統一さるべきものである、耶蘇教の神でも、マホメツト教の神でも、ありとあらゆるものが皆日本に來て、本門の戒壇を躡まなければならぬ、といふくらゐなかういふ運命を擔つてをるのが日本なり世界なりで、それを解決する使命をもつてゐるのが法華經である、

『此經則爲閻浮提人病之良藥、若人有病得聞是經病卽消滅不老不死』

の大法が、この日本に弘まり、日本に戒壇が建つといふ、だから戒壇といふのは卽ち御本尊が成立するところを戒壇といふ。

そこで『我此土安穩、天人常充滿』は本國土妙である、何故に國土から先に明かしたかといふとこれは迹門にはないことだ、迹門には國土の話はちつともない、『十方佛土中唯有一乘法』といふことはあるが、縱に本門の實義が加はつたから現實化してこの娑婆世界となる、この娑婆世界となつたら今度は現實にもう一層閻浮提となる、閻浮提となつてその內となつて外に出ないとなれば、一ばん良いところを撰ばなければならぬから、それにはあらゆる點において日本が勝れてゐる、歷史の上においても、亦位置の上においても、日本が世界のまん中だ、まん中といふことは尤も觀察によつて違ふが、然し當然文明の綜合點からいつて、あらゆる點から綜合して日本は中心である、緯度の關係からいつても、寒暖中和の關係からいつても中心である、近來日本は細長くなつてしまつて極めて暑いところと寒いところとあつてこのくらゐ細長い國はない、この意義であらゆるものを綜合して何んなものでも住ひよく、何んなものゝ意義でも解釋し得る、理解し得るといふ性質をもつてをる、附子のやうな溫まる藥も石膏のやうな冷す藥も出來る、極端から極端まであるといふことはあらゆるものを綜合する度量をもつた證據だ、その中心點の日本であるが故にこの日本に世界救濟の大本尊が立つ、本門の題目が弘まり始める、だから國家の基礎として人生を解決しなければならぬ、今日の人は人類とか社會とかばかりを考へて、國家の關門をなるたけ拂ひのけやうとしてゐる、それは今まで世間でいふ國家はあつてもなくてもいゝが、それは問題が別である、今法華經の實義でいふ國家はそんなものではない、少くも日本建國の意味からいふ國家は、領土と主權と人民との三つが寄つて國家と名づけるといふ彼の國家學でいふやうな國家では日本の國家はさばけない、日本の國家をなす源は　天照大神だ、神だ、神の意志を傳へた道だ、それからその道を體現する代表者が　天皇、それを實行するところの國民だ、それの物質的原料となる國土だ、この五つがなければ日本の國家は解釋し得ない、一般國家學の原則では解釋し得ないものを持つてゐる、學問とか理窟とかいへば西洋人の考へより外にはないと淺墓な人間は思つてゐる、蜉蝣が夏生れて夏死ぬから氷や霜の話を知らない、氷や霜に遭つたことがないからである、けれども蜉蝣が氷や霜なんてものは世にないものだと否定しても、氷はある、それは蜉蝣が冬を知らないからだ、西洋の學問は佛敎のやうな廣大なもの、日本國體のやうな深遠なものを、未だ要素の中に入れてゐない、だから學問がせまい、淺い、そのせまい淺い學問から生れた宗敎學なんてものから、佛敎を解釋しようなんてことは以ての外だ。

佛教はそんないゝ氣なものではない、佛教は『佛若シ說カズンバ彌勒ナホ闇シ』、極めて深遠廣大な佛教の教理は矢張り佛教の原則によらなければならぬ、先づ先決條件として國土常住といふことを明すのが本國土妙だ、であるから『我常ニ此ノ娑婆世界ニ在リ』といはれ、それから御本尊においても、

『其ノ御本尊の體爲ラク、本師ノ娑婆ノ上ニ寶塔空ニ居シ、塔中ノ妙法蓮華經ノ左右ニ釋迦牟尼佛多寶佛、釋尊ノ脇士ハ上行等ノ四菩薩、文殊彌勒等ハ四菩薩ノ眷屬トシテ末座ニ居シ、迹化他方ノ大小ノ諸菩薩ハ萬民ノ大地ニ處シテ雲客月卿ヲ見ルガ如シ、十方ノ諸佛ハ大地ノ上ニ處シタマフ、迹佛迹土ヲ表スルガ故也』

とある、この御本尊の現はれる先決條件は、卽ち戒壇の立脚地である、要するに御本尊、題目が現はれたといふことは、日本乃至世界が成佛するといふ意味だから、處においては戒壇だ、その戒壇を說明したものは御本尊だ、よつて『我此土安穩、天人常充滿』といふ本國土妙から起つて來なければならぬ、それから、『園林諸堂閣、種種寶莊嚴、寶樹多華菓、諸天擊天鼓、常作衆伎樂』これだけの道理が佛から菩薩から、あらゆる諸天善神から、一切を含んだ、先づ堅固といふので成立する、これで本果妙が成就する、それから『曼陀羅華ヲ雨シテ佛及ビ大衆ニ散ズ』で、はじめてこゝに本因妙が現はれて來る。

そこでこれを王法の上から眺めて三大秘法、佛法の上から王法をながめてやりとりする、王法といふのは世間のことをいふ、世間の法が佛法と無關係でお前は其方、俺は此方と別になつては何もならない、世の中といふものは惡いものだ、娑婆は穢土で汚れたものだ、であるから娑婆を放つてしまつて、我等は安樂世界の阿彌陀のところへゆく、後は野となれ山となれと出てしまつては、世の中は何時までたつても救はれない、自分さへよければ他人はどうでもよいといふならそれでもよいが、どうかして此の土を極樂淨土にしよう、『我此土安穩、天人常充滿』の國土にしようといふ、向上性進步性あるものゝみが充滿してをれば此の土は榮えて行く、あらゆる文化產業政治學問藝術、一切のものが皆本佛の洗禮を受ける、そして妙の字の種によつて妙化してゆくといふことが、王法は佛法に冥し佛法は王法に合することなのである、さうするやうに仕上げてゆくことが、佛法が王法に合することである、法と國とが一つになつて氣が合つて、各々に所を得、功用をなしていかなければ、佛法も身代限り、世間法も目茶目茶だ、『是ノ諸ノ罪ノ衆生ハ、惡業ノ因緣ヲ以テ、阿僧祇劫ヲ過グレドモ、三寶ノ名ヲ聞カズ』で、生死の大海に憂き苦しみを重ねて浮ぶ時がない、無意義の一生を送る、わづか二十四時間でも、若しこの意義ある生活を自

覺したら、この一日は十年百年千年萬年の價値がある、然るにさういふ考へもなくぶらり〳〵と生きてゐては、何年生きてもそれは無駄だ、その無駄に生きるために、一日に三度づゝ毎日飯を食ふ、その飯はこの國土から出來る、その國土で出來る米を食ひつぶして、この世の中の爲にもならないことを、無駄飯を食つて無駄糞をたれてをるといふことは、何とも情ない、甚しきに至つてはこの法を呪ひ、國土を呪ふ顚倒に陷つてゐる、『佗ノ毒藥ヲ飲ミ藥發シ悶亂シテ地に宛轉ス――此ノ子愍ムベシ毒ニ中ラレテ心皆顚倒セリ』と經文にある、であるから飲んだ毒藥を吐き、病を治して本然の壽命に立ちかへらなければならぬ。

それには、この十文字が大切だ、この横と縱との交叉點が大切だ、卽ち世間と佛法との接觸點だ、こゝに交通巡査も何んにも立つてゐない、この交叉點が我等の中心となつて、こゝに妙の種が植わる、王法佛法の冥合が成就しなければ、本尊も題目も何にもならない、いくら聲を大にして題目を唱へても、念佛を唱へる代りに題目をやつてゐる程度だ、それが道樂なら問題は別だが、いやじくも今日人生の解決としてやらうといふには、そんなことではいけない、もう一つ、御本尊の上でなほ一歩進めて、王佛冥合の道理を解決して、講を終りたいと思ふが、それは明日にゆづる。

第五講　世界救濟の起點

今日臨時に、時間がないから豫定より少し席數を餘計にして、なるたけ纏めたいと思つて、臨時に出講することにした。

今日曉方から激痛を起して今まだ注射をしてゐますが、若し途中でひどく痛むやうだつたら御免を蒙る、その代り今明兩日に大體を話し得ないやうなことであつたらあとで補足して、速記に書き足して「毒鼓」なり「天業民報」なりに出すが、なるたけやれるだけやるつもりだ、ことによるとやつてゐる間に治るかも知れない、往々さういふ例がよくある、如何にも皆さんの眞面目な態度を見て感激して今日又やるつもりになつた、唯何分話す事柄が實は非常にむづかしいことを話すので、若し會衆諸君が悉く佛教の學問の素養の揃つてゐる人だと話も大分樂だけれども、いろ〳〵の方がおいでになるので、先づ何方にも略わかるやうに話さうといふには、餘ほど面倒だ、然しながらわからない話をしたところで仕方がない、わかるやうに話さなければならぬ、わかるやうに話すといふことになると、佛教の學問は學問で決つた定規がある、その定規の幾分を

犧牲にしなければ話せない、なかなか面倒だ。

先づ私共の考へてをる宗學とか學問とかいふことは、世間一般の人のいつてをるのと少し違ふ、それは我々の新發明ではない、昔の聖人が言ひ殘されたことで、學問は實學でなければならぬ、たゞその義理詮索の面倒なことをうんと知つてをるから、それで學問といふわけではない、學問は己に得る道である、自分が反省して見てそれが自分の血なり肉なり骨なりにならなければ、本當の學問ではない、昔し聖人の教へた事柄を學問とも何ともしないで、實際に行つてゐる人がよくある、忠孝なら忠孝の道を實踐窮行して、これを學問とも道德とも知らないで、自ら行つてゐる人がある、それが本當の學問だと老子もいつてある、また論語には『未ダ學バズト曰フト雖モ、吾ハ必ズコレヲ學ビタリト謂ハン』と讃美してある、まして日蓮所立の法門は現實の解決、即當にある自分を立てゝそして世に處する道を明らめて行くといふ、實際的學問である、であるから大聖人が學問思索の原則を明かした中に『道理ハ文證ニ過ギズ、文證ハ現證ニ過ギズ』とある、即ちこの三つを具備しなければ眞の學問ではない、思想といつても學問といつても、道理と文證と現證の三つが具備しなければ死んだ學問だ、現證は即ち現實の解決だ。

◇

三大秘法の法門といつても、何か別に封印でもつけて、雲の上にでも安置してあるやうに思ふと違ふ、『一代聖教ハ我身ノ日記ナリ』と仰せられた、これはそんなに珍らしいことではない、支那の陸象山といふ學者は『我六經ヲ注スルニアラズ、六經我ヲ注スルナリ』といつた、六經を解釋して、この道理はかうだといつて自分が註釋して、六經そのものを註釋すると考へると違ふ、聖人の教の經典が却つて此方を註釋してゐると、かういふ言葉がある、外典の賢者さへさうである、ましてこれは凡夫がすぐ佛になるといふ道を教へるのであるから、實際自分の生活の指導原理となつていかないやうなものならば、その佛法は口の佛法である、佛壇の中に閉ぢこめてある佛様だけが尊く、その前でお經をたんと讀むから信仰であるといふ、從來の惰力的信仰は、要領を得ない如何がはしい現象だ、昔は寺といふものは、聚落城邑を離れた山林にあるものとしてある、それは觀察をめぐらしたり修行をするのは、世間のいろ〳〵な塵氛と交ると心を亂すから、そこで精神を統合するために世に交はらないやうに、深く山林に交つたといふ、これは極めて消極的だ、さういふ佛法もある、然しながら五濁爛漫のこの世の中の、そのまつたゞ中に現はれて師子奮迅の勢ひを奮つて、この混亂雜沓を極めた人生を解決するといふ佛法は、徒らに山林に交つては居れない、即ち聚落城邑の中に現はれて村から村、里から里、繁劇なる生活狀態の中に飛

び込んで、それを指導して行かなくてはならぬ、だから山林佛法ではいけない、お寺は皆山號といふものがついてゐる、此處いらにある寺も皆何とか山といつてゐる、あれは山林佛教の名殘りである、身延山久遠寺だとかいふのは實際に山だからいゝが、里にあるお寺でも寺は山號をつけてゐる、この隣にある妙覺寺は金島山、後にある長勝寺は何とか山、彼方の方に見えてゐる感應寺といふ寺は江久山、みんな山號がある、これは皆山林佛教の名殘りだ、山號がついてゐては惡いといふことはないが、説くところの法、行ふところの道こそは、現實の世を指導し、生きた解決を與へることが日蓮主義の教である。

◇

そこで本題は「三大事」といふ、これはお言葉にあつて、大事といふことは、經文は一大事の因緣とあつて一大事といふ、その一大事は非常なものであつて、最も深い義理を持つてをるといふわけから御付屬の時『甚深之事』といはれた。

『要ヲ以テ之ヲ言ハバ、如來ノ一切ノ所有之法、如來ノ一切ノ自在ノ神力、如來ノ一切ノ祕要之藏、如來ノ一切ノ甚深之事、皆此經ニ於テ宣示顯説ス』

とある、これを四句の要法といふ、それはどういふわけかといふと、釋尊が上行菩薩に付囑する時、『要ヲ以テ之ヲ言ハバ』と仰せられた、『以要言之』一切の佛法をば四つにくゝつてこれを肝要とされた、すなはち通俗の言葉でいふと要領である、この要領を得ない爲に學べば學ぶほど、行へば行ふほど複雜になつてしまふ、だから佛法は盛んになつて、堂塔伽藍は金碧莊嚴をきそつて如何にも堂々として世の中に光り輝いてゐるが、その教の内容は人生に直接何等作用しない、山林佛法になつてしまつてをるか、或は遠き未來を願ひ求めるといふ、先づこの世の中に卽當に用がない、未來も大事であるが、未來よりももつと大切なものは現世だ、その現世がうまくいかなくては未來がよいわけがない、法華經には『現世安穩後生善處』といつてある、何故ならば未來は後に來る現世だから、今の現世が安穩でなければ駄目だ、故に『現世安穩ニシテ後ニ善處ニ生ズ』とある、この現世安穩な爲に必要な佛教である、だから立正安國論とはそこだ、それを一口にいへば空想の道理――理想の高いのを皆空想といふが、無用な想像は全く役に立たない、兎に角理想といふものは現實の世界と違つてをるから空想のやうなものだ、理想はどのくらゐ高くても、それが現實の上に役立たぬものなら、それこそ空想である、理想が高ければ高いほど、實際の上に確たる解決力がなければならない、政治家でも理想を離れた政治家は標準がない、無定見だ、だからその日暮しで後から後からと追はれてやつてゐる、今の政界の有樣を見ても知れる、一定

の方針といふものがない、それは深遠なる理想を持つてをらぬからだ、死んだ大隈さんは高遠な理想といふことをいつたが、それは實際に行ひ得ない高遠な理想である、これでは何にもならない、高山の水は幽谷に下るが、山の水は山が高いほど深い谷に下つて來る、高い教ほど低いところを整理して行く力が多い、『如來ノ一切ノ甚深之事』といふのは何であるかといふと、即ち此の我々の人生の上に、現實の境界の中に入眼した、如來の甚深の事といふものを點眼してそれを活かす、現實の解決といつても、現實そのものを現實そのものゝまゝで引用するのではない、現實に深味を與へ、明るさを與へるところが宗教の宗教たる所以である、その爲に日蓮聖人は出現したのである、そしてその甚深の事を三大秘法とお釋しになつたわけである。

これは、義理を正しく研究して、『如來秘密神通之力』の經文により、自我偈の『衆僧俱出靈鷲山』の文により、『一心欲見佛不自惜身命』の文により、明文の義理の研究はいろ〳〵ある、あるがその義意を綜合すれば、壽量品の本門の義理の眞實から盛り出した三大秘法である、經文の譬へには、これを『色香美キ味ヒ皆悉ク具足セリ』とある、色・香・美き味ひと三つにあげてある。

色
香
味

この藥は色も美し、香も美し、味ひも美い、それをば唯そのまゝ與へないで、

擣
篩
和合

で、擣篩和合して與へた、擣は擣くだ、篩は篩ふ、即ち精製することだ、今の製藥法でいへば、いろ〳〵機械的に精分を取るといふことだ、昔のことだから擣いたり篩つたりだ、それからその精分の、能く本領を、效力をあらはすやうに和合する、この和合といふことは、西洋の藥にはあまりないやうだが、漢藥ではすべて調合といつてある、或る藥と或る藥とを合して或る效力をなす、たとへば葛根湯はいろ〳〵なものを七つ寄せて來て、その各々の精分が煎じられて一緒になつて、とゝに一つの用らきを生ずる、漢藥の調劑法はさうなつてゐる、そこでその藥の中にも、主として性能の主要分となる藥と補ひとなる藥とを合はせる、しかもその五つなり七つなり混ぜ合せた藥が別々に作用するのでなく、混じて一つの葛根湯とか、大青龍湯とかいふ藥になると、

混成的に整理された用らきが出る、かういふ方法で調合といふことをする、私は門外漢だから醫者のことは知らないが、どうも藥の精分利能をいろ〳〵合はせて調合して或る效目を現はすといふことは、醫學及び藥劑の方でいつても、藥學又は治療學の上においても、恐らく非常に進歩したものだらうと思ふ、今に西洋の藥もさうなるかも知れない、このごろは所謂漢法を研究するものが出て來たが、何千年前にかういふ一つの術が東洋にあつたといふことは、東洋文化の侮るべからざる所以がこゝにもある、であるから調合といふことは藥では大切だ、それだ、『擣キ篩ヒ和合シテ子ニ與ヘテ服セシム』古來この『色香美味擣篩和合』を三大秘法の法門に配當して說くことは、すでに事古りてをるが、かういふわけだ、色も香も味も美い、それをば又擣いたり篩つたり和合したりして、念よく拵へ上げて我等に授けたといふ、それを『以要言之』といつた、それでこれを四箇の要法といふ。

◇

そこで大聖人も『廣略要ノ中ニハ日蓮ハ廣略ヲ捨テ、要ヲ取ル』と仰せられた、卽ち一代佛敎を廣とすれば法華經は略だ、法華の三部經は略だ、それからその中の本門なら本門は要だ、又廣を法華經の一部とすれば、法華經一部八卷六萬九千三百八十四字は廣だ、その中の壽量品とか特別に必要なものは略だ、その中でも亦壽量品の南無妙法蓮華經、それを以て一經の肝心とすると、これが要だ、『日蓮ハ廣略ヲ捨テ、要ヲ取ル』それは又あるところには、『廣略要ノ中ニハ要ガ中ノ要ナリ』と仰せられた、要中の要、この要を取り損ふからものが混亂してしまふ、佛法は廣大であり、書物も澤山あり、お寺も澤山あるが、實際の世の中の用に立たないのは卽ち要を得ないからである、要を敎へないからである、一例をあげていへば法華の修行でも昔の像法時代の修行に後戻りして、お經をたんと讀むといふのがある、小說を讀むよりもいゝかも知れないが、お經をたんと讀んだから功德があるといふことはそれは昔の話だ、昔は法華經を六萬遍讀めば六根淸淨を得るといふので、朝から晩までお經を讀んだ、お經を讀むことがうんと修行をしたことになるといふので、その名殘を止めて千部萬部といふやうなことをやる、本山では全部やる、法華經を千部讀む、卽ち日に一部づゝ讀んで百人の坊さんが讀むと一日に百部、それを十日やると千部となる、或は百部經といふ、これはお經をうんと讀むと功德があるといふことを考へた像法時代のことを末法の今の世に殘したもので、不得要領の標本だ、在家もまたお經をうんと讀めば信心だと思つて、よくお題目を何十萬遍唱へたなどといふ、お題目をうんと唱へれば功德があるといふやうに考へてゐる、ところが題目の精神はそんなものではない、一生涯に一ペンでも成佛する

といふのでなければならぬ。

『問テ云ク、法華經ノ意ヲモ知ラズ義理ヲモ味ハズシテ、只南無妙法蓮華經ト計リ五字七字ニ限リテ一日ニ一遍、一月乃至一年十年、一期生ノ間ニ只一遍ナンド唱ヘ奉ラン功德ハ、輕重ノ惡ニ引カレズシテ四惡趣ニモ趣カズ、終ニ不退ノ位ニ到ルベキ耶、答テ云ク、然ル可キ也』

と「法華題目鈔」にある、一生涯に一ペンでも出來るとかう答へた、それは何だといふと、深刻に大聖人の教へられたすべてを甘受して、本佛の威德利益を徹底的に信じたものが、一生涯にたつた一ペンでも、その深い信によつて唱へる題目は、その人の一生を通じて唱へたと同じことになる、かういふ題目だ、それが要の要たる所以である。

◇

さういふ深い義理のある、廣大な利益のある題目であるから、捨てようとて捨てられない、止むに止まれない心の信念の迸發として南無妙法蓮華經と出て、それが連續してゐるといふのは一生涯でもよい、何べんやつたら效くといふやうなものではない、一生涯にたつた一ぺんでも卽身成佛するといふ、それを要行といふ、末法の要行といふのである、この意味において授けたお題目である、釋尊の腹の中にある悟りの法では、今我々の用にたゝない、それは隣のお寶である、釋尊と我々とは境界が違ふからだめだ、その釋尊の腹の中にある智慧を言葉にあらはす、卽ち要を以て言ふといつて、四箇の要法に結んで上行に付囑した、これで末法濁惡のものを救ひ取れよと、

『汝取ツテ服スベシ、差エジト憂フルコト勿レ』

と、この敎を使を遣はして仰せられた、その使とは本化の菩薩である、その本化の菩薩が塔中に於いて別に付囑された、特別に佛法を四句の要法に結んで授けられた、一代佛敎をば要に收束して、これで救ふのだ、法華經の魂、佛の魂、天地法界の魂、この魂を入れて救ふのだ、餘計な面倒なことはいらない、急所だ、急所をつかなければならぬ、これが要だ、いゝか、確かり言付けたぞ、委細かしこまりました、如來の滅後において一切衆生を仰せの如く救ひましようとお受けした、『日月ノ光明ノ能ク諸ノ幽冥ヲ除クガ如ク斯ノ人世間ニ行ジテ能ク衆生ノ闇ヲ滅ス』と折紙をつけた上行、その上行が末法の大道理としてお說きになつたのがこの要法だ、だから佛の腹の中にある原始的の南無妙法蓮華經ではない、擣いて篩つて和合して色香味ひをすつかり仕上げた法だから、これを要法といふ、けれども、この根源は本法から出て來てゐる、それが要法となつて、我等の前に現はれて要行となつて我々が修行する、これが三大秘法である、三大秘法に結ん

で來なければ佛法は不得要領である。

大體、世を救ふ佛法が不得要領である、『佛法ハ體ノ如シ世間ハ影ノ如シ、體曲レバ影ナ、メナリ』とある、體の方が不得要領だから世間も不得要領だ、　欽明天皇の十三年に佛法が日本に渡つて今日まで千何百年、朝廷も幕府も諸大名も貴族から平民にいたるまで、各〻財を惜まず佛法を保護し、廣大な寺も建て多くの出家沙門も養つて寺や僧は稻麻竹葦の如く世の中にある、今は極めて衰頽してゐるが、それでも未だ寺は七萬からある、僧侶の數も十萬からあるだらう、これだけあつて莨爾たる日本が徹底的に教化出來ない、その寺院の住職やなんかは悉く皆その宗旨の學問あり、衆人の上に立つてものを教へるやうになつて、一ぱし聰明な人がゐる、しかもかういふ風な立派な佛法があつて、そして耶蘇教の感化力にも及ばない、天理教や何かのあゝいふ劣等な宗教の感化力だにも及ばない、各宗甍をならべて人心を指導してゐるのに盗人や强盗はどん〳〵増えていく、寧ろます〳〵上手になる、犯罪の數は年々増加してくる、法律的犯罪は申すまでもないが、社會の道德律の低下、浮華放縱の習ひはます〳〵盛んに、輕佻詭激の風も亦長じて、共産黨だとか無政府主義だとか革命思想だとかゞ勃興汎濫してをるといふ、この手もつけられないやうな有樣になつて、何の面目あつて堂塔伽藍の中で鉦を鳴らし、經陀羅尼を讀んで是れ佛法なりとすましてをられるか、これを深く反省してみたら、その佛法が要領を得ない證據だ、世間と沒交渉である證據だ、それが脈であるから道理、文證、現證の三つをそなへて、『佛法ト申スハ道理ナリ、道理ト申スハ主人ニ勝ツモノナリ』といはれた。

◇

佛法といつても別に何も不思議な手品を使ふんではない、卽ち道理だ、その道理の中に中心と深さを與へ、『道理ト申スハ主人ニ勝ツモノナリ』、如何なるものよりも道理は强い、日本でいへば日本の國家組織でいへば、　天皇は神聖にして侵すべからず、不可侵の權能を持ち給ふものは天皇だ、　天皇よりも尊いものはない、けれども　天皇でも頭を下げられるものが一つある、卽ち道である、

『朕爾臣民ト共ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ』

と仰しやつた、道の前には服從すると仰せられた、その道とは卽ち　天照大神の御心を傳へた國家存立の原則それが道だ、それを世間では王法といふ、その王法といふのは佛法の方で世間の法を扱ふ時の名が王法だ、この王法に對して佛法といふ、これは悟りの法だ、卽ちこの王法に魂を入れるのが佛法だ、この佛法にして世間法卽ち王法に魂を入れなかつたら、佛法はからつぽうだ。

日本は神國だ、なにも佛敎の世話にならなくても神の敎がある、佛法が來なくても疾に神の敎はあるんだ、佛法は天竺の法だ、など丶考へてゐるやうなことだから、何時までも解決がつかない、天竺も日本もない、法の上より見たら世界は一つだ、それは日本といふ國は世界のために生れた國なんだ、釋尊は印度に出現した、印度が便利がい丶から印度に出現された、印度には九十五種の外道が現はれてゐるから、その比較研究をするのに便利だから印度に出現した。

そこで日蓮大聖人は閻浮統一の本尊を顯した、その本尊は象徴である、妙法蓮華經の表現であり、世界解決の象徴である、南無妙法蓮華經と中央に書いた、お曼陀羅を見るとわかるが中央に書いてある、それからその南無妙法蓮華經の直下に日蓮と署名してある、それが中柱だ、この中柱の兩側に鬼子母神十羅刹女を勸請してある、これを外墻（けしやう）といふ、これはあまりい丶言葉ではないが古來いつてあるから假りに使つておく、これは本尊の外郭です、これに持國毘沙門等の四天王と不動愛染とを勸請してある、これは題目を書く筆の大きさと、この四天王不動愛染と、日蓮といふ花押とは同じ大きさで書く、それからこの中に十界を攝する、卽ち大體三部になつてをる、上段を佛部といふ、これは曼荼羅の方式で、次を蓮華部となす、それから後を金剛部といふ、佛部、蓮華部、金剛部、佛部は佛の座だ、蓮華部は先づ菩薩、或は聲聞、緣覺などの座だ、金剛部といふと、天人龍神等の佛法を守る方の側だ、金剛といふのは早くいふと武裝した護衛者といふことだ、この三部において佛部には釋迦多寶の二佛、それから十方分身の諸佛、三世の諸佛、それから本化の四菩薩を佛部に勸請してある、これが普通の菩薩と違ふわけだ、何故ならば本化の四菩薩は、本佛同體の菩薩である、その他の菩薩的の菩薩、觀音、普賢、文殊等は、これを迹化の菩薩といふ、文殊彌勒等の菩薩は眷屬として末座に居し給ふ、四菩薩の眷屬だ、家來だ、だから末座に居すとある。

今度は天上界の中でも大日月天、明星天子、大梵天王、これは世界を造つた神だといふ、卽ちこの世界の中で、さういふ役を司るもの、さういふ創造の神を全部包含してある、若し宗敎でいへば、マホメツト敎の神も、キリスト敎の神もあるし、その外あらゆる世界の今日までにあつたすべての宗敎の神は、何でも皆はいつてゐる、『體ノ神ツラナル、其ノ餘ノ用ノ神豈モルベキヤ』といふから何でもはいつてゐる、太陽でも月でも星でも、およそ三千世界の中の一つの役目を持つて居るものは皆はいつてゐる、そこでこれを皆人格的に解釋してある、太陽は一つの火のかたまりといふが、けれども火のかたまりでも、宇宙の大勢力を代表した光力絕倫なものであるからこれを神格化して神となす、たとへランプでも厄介になつたらこれに恩義を感ずるのは當り前だ、

これを神なりとして南無日天子として拜むところに高尚な精神力がある、その他、山でも川でも海でも、およそこの全宇宙にあるすべての物質も、效力の偉大なるものは神と認める、萬有神敎のやうな下劣な考へとは違ふ、天上の一月影萬水に浮ぶ、卽ち久遠の本佛といふ宇宙の靈元だ、この間も感想演說にあつた宇宙の大生命といふその大生命だ、けれどもたゞ大生命ではいけない、その大生命だが、久遠劫來の功德を積集したものだ。

餘敎でいふ神は功德はない、宗派神道などでいふ神もさうだ、神はすでにあるものだといふことになる、神の因行を認めない、これは佛法ではじめて認めた、五戒十善を修して人となる、その十善の上に思想的の善根を完備して、高尚な道義の行因の報いで天に生れる、その天の中にまた階級がある、大梵天王帝釋天王なんていふ、どの天はどの修行をしてその天に生れるといつてあらゆるものにそれになる所以の原因と修行とある、であるからお曼荼羅は全部の神に皆大の字がある、大梵天王、帝釋天王等すべての天の字に王をつけて天王といふ、そして必ず點を打つてある、これを稱美點といふ、これはその行因の報いで、それだけの果報を得たといふので、もぐりの神樣ではない、それだけの修行をしてそれだけの株を得たものであるといふ印に、稱美點がすべての王の字についてゐる、これは漢字の作法で王の字の去聲に圓をつける、卽ち王道を行つて天下を得たといふ印なんだ、普通の王といふのは階級の上の王といふだけだ、右の肩に圓をつけたのは王道を行つた立派な王樣といふことになる、將棋の駒に片つ方は王に點がついてゐる、通俗にはこれを玉將といつてゐる、俗稱には金銀があるからそれの司だから玉といふが、さうではない、一方の肩に圓のあるのは、王の道を行つた有道の王といふので、それが必ず勝つといふことになつてゐるから、弱い方のものが圓のないものを持つて、上のものが玉將を持つのが作法だ、それは王道を行つてゐるといふ印で王といふ。

それから蓮華部の方では皆南無がつく、南無多寶如來、南無釋迦牟尼佛、南無文殊師利菩薩、南無普賢菩薩、南無彌勒菩薩、南無藥王菩薩、南無舍利弗尊者、南無大迦葉尊者、それが皆南無がつく、四聖には皆南無がつく、佛、菩薩、聲聞、緣覺を四聖といふ、これは何のわけだといふと、修行の標準手本となる人達だから、それに歸依する、歸依は南無といつてこれを禮拜する、そこではじめて修行が起つて來る、だから四聖には南無をつける、勿論本尊の中には、總歸妙の本尊が文永七年に御書きになつたものがある、それは普通の式によつて、常識によつた御本尊であらゆるものに南無がついてゐる、それは內證悟道といつて、悟りの意味をあらはしたものである、中山の木像で一尊四菩薩と、二尊四菩薩とある、二尊四菩薩は法華經の會座をあらはす、一

尊四菩薩は久遠の本佛と本化を現はす、これが中山にあつて同日にあらはしたものである、これは教道門の本尊と證道門の本尊である、佐渡においてお書きになつた本尊、これは我々の修行の標式とする普通の式である、それからすべてのものに南無のついたものは木像の一尊四菩薩と同じことで、悟りの上であらはしたから證道門である、修行の上では教道門の本尊を標式とする、今話した眞中に中尊、この中尊がまん中を貫いて、これが中軸だ、この南無妙法蓮華經といふ久遠實成の釋尊の悟りの法、それからその悟りの法を精製して我等が持つところの心の標準としてお與へになつたこの南無妙法蓮華經、これは一切萬法の中心であり、一切萬法を活かすところの鍵である、然しながらそれを我々に授けないといふなら、法華經がいかに幽玄なものでも、それは説明にすぎない、又昔し話に過ぎない、それを適切に我等の現實の上にもたらした解決點が南無妙法蓮華經だといふ、その證據には日蓮花押がとれと連絡してをる、連絡してをらなければこの南無妙法蓮華經はたゞの文字になる、法華經にあらはれた衆生の病の藥とはならん。

◇

そこでこの日蓮とは何ものであるか、これは本化上行、別付囑の大菩薩であるといふことは、經文の上から絞り出して來てはじめてわかる、さうでない前はなんだ、とれは日本人だ、今から七百五十年ばかり前の承久四年二月十六日に日本の安房の國東條の鄕、小湊の漁村に貫名の次郎重忠といふ流人の伜として生れた、本は武士だが今では漁師、その漁師の子に生れた所謂梅陀羅の子だ、善日磨といふ日本人だ、その善日磨が大きくなつて日蓮となつた、そとで日蓮聖人の血統には父方には神代の血をうけてゐる、天津兒屋根命の血を受け、母方には皇族の血を受けてゐる、日本民族は神別れ、皇別れ、夷別れとある、神別れとは神代の神より別れたもので、皇別れは皇族が民間に降つたもので大抵は源といふ姓をたまはる、　宇多天皇から出て臣籍にはいつたものは宇多源氏、　村上天皇から出て臣籍にはいつたものは村上源氏、　嵯峨天皇から出たものは嵯峨源氏といふやうに源といふ姓を賜ふた、これは皇族の中から出た人民といふので源としたらうと思ふが、今ではその源の姓で一ぱん榮えてゐるのは　清和天皇から出た清和源氏だ、これからは華やかなる者が出てゐる、多田滿仲頼義、八幡太郎義家、それから爲義、義朝、頼朝などといふ、中には義經、爲朝といふやうな人氣役者が出てをる、後になつては新田義貞も、足利も德川も出てをる、近世は源の光圀、義家の弟の義光は甲州に下つて甲斐源氏といつて、武田信玄もその中から出てをる、今の南部侯爵家も佐竹侯爵もあの中である、南部の中では大聖人に歸依した波木井六郎、これも南部氏で今その末孫が建武時代の功勞によつて男爵を授けられてゐる、

その一人は伯爵になつた、清和源氏だけは大層繁昌してゐる。

桓武天皇から出たのは、平安朝をひらかれた意味からこれを平氏といふ、この方の大立物は誰でも知つてゐる清盛だ、傲る平家は久しからずといはれて、大層增長慢心したために亡ぼされたが、その中にも重盛は偉かつた。

清和源氏と　桓武天皇から出た平家は大變榮えた、それから神代から別れた藤原氏も榮えた、橘氏は　敏達天皇或は　聖武天皇から出た、この源平藤橘といふ四姓が、大分民間に繁榮した、それからもと天孫民族の下る前に居つた先住民族の末孫もある、それから朝鮮、韃靼、肅愼などから歸伏して日本人になつたものもある、これ等を神別れ、皇別れ、夷別れといふ、けれども畢竟これ等は同化して悉く一統されて大和民族となつてをる。

日蓮聖人はこの皇別れの血と神別れの血とが合流してお生れになつた、兎に角日本人だ、現實の日本人だ、我々より七百年前に日本國民として生れた、しかも王侯貴族の種でなく、權門豪族を母として生れず、渺たる邊海の一漁村たる小湊の漁業生活の家に生れた、面倒だから日蓮は旃陀羅の家より出づといつた、これを悪解して穢多であるといつて日蓮聖人を讒誣した書物がいくらもある、旃陀羅といふことは殺生を業とするといふ意味でお書きになつた、けれどもそれは何でも可い、漁師といふことでも穢多といふことでもかまはない、穢多なんてことは、別にさういふ氏族が存在するといふことは、日本國體においては認めないことだ、四民平等と　明治天皇は仰せられて、その階級をはらつてしまはれた、何であらうとも、卑しい民家に生れた平民的生存者である、その日蓮それが承久三年の日本の大事件、日本の大事件とのみ解釋しないで、世界人類の大事件と解釋されて、何の相場違ひでかういふことが起つたらうと、世間及び佛法の兩面から疑ひを起して、これを解決しなければ世に生れた甲斐がない、佛法を信じた甲斐がない、この解決こそ世界を進退する鍵だと考へられた。

◇

その解決をもつて自ら任じて、千載萬劫のために、これを解決して世の罪を除かうといふのである、その爲には日本第一の智者にならねばならんといふので、虛空藏菩薩が淸澄にあるから、どうぞ今智慧が入用だといつて願を起して毎日參籠した、その滿願の日に堂から落ちて血を吐いて、その後は心地朗々としたといふ、その凡血の笹といふのが今でもある、その時の血がついてゐるわけでもあるまいが、さういふ傳へだ、それから虛藏空菩薩から智慧をさづかつて、すべてのことが夜のあけるやうにわかる、それから志を起して先づ鎌倉に殺到して、當時の流行である

禪宗と念佛宗を研究して、これの間違つてゐることを觀破したから、佛教の根源たる叡山に入つて佛教の蘊奥を極めようとして十年間專心正統の佛教を學び、その間あるひは高野に、あるひは四天王寺に、あるひは南都の東大寺に興福寺に、あるひは法隆寺に、あらゆる寺々に至つて、その宗門々々の奥義をつくし、兼て儒教及び神道をも學んで、二十餘年の研學を經て、最後に決定したのが法華經に非ずんば世を救ふことは出來ない、この解決は法華經にあるとして、志を決して建長五年の三月叡山を去つて、先づ伊勢に參拜した。

伊勢の　皇大神は日本を開いた御先祖だ、この日本を開いた御先祖の神は卽ち世界の中心たるべき御先祖である、今自分が一閻浮提のものを救ふべき法を建てるに當つては、先づこの心中を皇大神に申上げなければならぬと、間の山の常明寺に水どりをとつて參籠して誓願を述べた。

◇

それから伊勢を立つて房州淸澄に行つた、これは自分の發心の靈地であり、智慧をさづけてくれた虛空藏菩薩の住みたまふところであり、我を生んだ父母の國であり、師匠のゐる國である、だから建長五年四月廿八日に旭の森に行つて惡魔を降伏して、師匠道善坊に向つても語らず、父母に向つても語らず、一山の大衆の集り來るにも述べず、さういふものを相手にしないで、四月二十八日の拂曉、雲を破つて出るところの、東海にゆるぎ出した大日輪に向つて、はじめて南無妙法蓮華經と唱へた、これは何であるか、宇宙萬有の中心たるものは、代表物は天の日輪である、だから世界といふものに、宇宙といふものに、人生といふものに向つて下すべき大法を築くのであるから、大日輪に向つて南無妙法蓮華經と、はじめて火蓋を切つた、これは世界のあらゆる宗教に曾て類例のないことだ。

人間を相手にしない、天を相手にした、天の中心たる日輪を相手にした、宇宙萬有の中心たる日輪に向つて、十返ばかり高い聲で題目を唱へた、旭の森に行つて、東海の彼方から昇る日輪は想像したばかりでその雄大さが思はれる、その雄大莊嚴な日輪に向つて南無妙法蓮華經と唱へたといふ、それでもう世界の解決は出來てゐる。

◇

それから山を下つてはじめて南面堂に於て、正午十二時を期して、此處でも正中法座といつて十二時に御本尊に祈請をとめる、との十二時は諸佛の食をあがる時といつてある、この正中の時刻に於て南面堂に於て、地頭東條景信はじめ一山の人々に向つて、はじめてこの法華經でなければ世は救へないといふ大法輪を轉じた、そして先づ胸中に描いた三大秘法は、先づ南無妙法蓮華

經の本門の題目だけは總概的にこの四月二十八日の朝、日天子に向つて南無妙法蓮華經と唱へた、本門の題目の中には、その踏んでをる日本、この踏んでをる地球、世界、これは本門の戒壇の地である、その内容の法門は塔中別付の法門、斯の如き本尊は在世四十餘年の間にもこれなし、たゞ八品の間においてこれを開いた、法華經八年の間でも唯八品に限る、この八品始顯の本尊は大聖人の胸中の肉團にあらはれた、世界を統一すべき本尊として、これはすぐ顯はすことは出來ない、それを顯はすものは顯はす資格のある本化上行だといふことが定められてある、上行であることが定まらないうちに顯はせば、贋札をつくるやうなものだ、そこでこれは時機を待つ、經文には『數々見擯出』とある、法華經を弘めるものは度々流難に遭ふ、所を追はれる、日蓮若し法華經の故に度々流罪に遭ふことがなかつたら、法華經の文字は悉く反古である、『日蓮ダニモ此ノ國ニ生レズバ、殆ンド世尊ハ大妄語ノ人』とは何だ、法華經を末法に弘めると必ず三類の强敵が起つて、終に迫害する、度々所を追はれるとある、然るに弘長元年五月十二日、日蓮聖人は伊豆の伊東に流罪にされ、文永八年には、表向には佐渡流罪であり、裏面では首を斬らうとした、然し首は斬れなかつた、仕方がないから佐渡に流した、だから佐渡に流すといふことが熟しなければ、この法華經を弘める人、上行菩薩だといふことは自分ではわかつてゐても、世間に立證することは出來ない、夢のやうな豫言者では精神病者になる、日蓮聖人は非常識のことは大嫌ひだ、完全なる常識を確實につんだ常識以上の法門でなければ、本化の法門ではない、よく宗教の信仰として非常識のことをやるものがある、この間も兒島高德の狐だといふ話をしたが、あゝいふ連中が宗教家の間には幾らもある。

日蓮聖人は道理、文證、現證が揃はなければ用ゐなかつた、自らをあらはすにもさうである、死罪に遭つた、流罪に遭つた、しかも度々遭つた、いよ〳〵俺は法華經の豫言に適中したといふことが、何人も爭へないといふことになつた、その上であらはされたのが本尊だ、本尊の緣起部の中に、

『文永八年太歲辛未九月十二日御勘氣ヲ蒙リ佐渡ノ國ニ遠流セラル、同ジキ十年太歲癸酉七月八日、日蓮始メテ之ヲ圖ス』

といつてある、それから經證部の方には、

『法華弘通之者今世有留難事』

とある、佛教の言葉に嘘はない、その通り適中した、その通り流罪死罪に遭つた、さうすると上行に違ひはあるまい、その上行といふ資格が定まつたら、それは末法の爲にこの法華經を傳へ弘

めるといふ、特別の付囑を受けた、塔中面授の資格者である、その資格者としてこの御本尊は、法華經の内容はこの通りのものであるといふことを顯はしたものが御本尊であるから、日蓮聖人は本法所持、要法能弘の導師である、釋尊から南無妙法蓮華經をもつて一切衆生を救へ、『是ノ好キ良藥ヲ今留メテ此ニ在ク、汝取ツテ服スベシ、差エジト憂フルコト勿レト、コノ教ヲ作シ已ツテ復タ他國ニ至リ、使ヲ遣ハシテ還ツテ告グ』といふその使は俺だ、『遣使還告』とは地涌なり、その日蓮が所傳した南無妙法蓮華經でなければ本當の末法の要法でないと限つて、この下に日蓮と御署名になつた、これをあはてゝ御曼荼羅の書き主だから、こゝに自分の名を書いたといふ風に考へたら大變な間違ひだ、そこで、後の人が誤つて、お曼荼羅を書く人が書主といふつもりで自分の名を皆下に書く、もつともこれは本尊の議論のあるところで、それこそ一つの特別な學問であるから、こゝに詳しく述べられないが、それは違ふ、この末法守護の大本として授けられた本尊は、大聖人が下にゐなければならぬ、書主としての名は緣起部の方にある。

◇

南無妙法蓮華經、日蓮、その間を貫くものがなんであるかといふと、それは日本の神樣ではないか、一閻浮提第一の本尊に日本の神樣を勸請するのは何ういふ譯だといふものがあるかも知れないが、これは單に日本の神樣といふのみではない、　天照大神は世界の神樣だ、世界を救ふために現はれた神樣だ、その世界を救ふのに何處の場所がよからうとお探しになつて子孫を下された、この唯一王道をおし弘めるには何處か宜い場所でなければならぬ、譬へば場所が惡いと店を開いても賣れない、何處が宜からうと天眼をもつて考へられたところが、『國有り日本』となつた、この日本國土を持つてをる大國主命に談判して、斯ういふわけであるから國を奉れ、神の道を布いて世を救ふために、一切の衆生のために子孫を下して王道の大經綸を行ふのであるから、私事でないからと談判して、最後に武甕槌神と經津主神が下つて談判したところ、親子共に心を合せて、さういふ神聖な事業なら國の全部を喜んで差上げる、私は隱居致しますといつて、當時伜の世ですから伜に申しつけて、まことに綺麗にこの國を讓つた、この大國主命も實に偉いものである、『德孤ナラズ必ズ隣アリ』　天照大神の聖德と相つぐべきものである、だから、　神武天皇は御卽位のはじめに、この神を大和の橿原に勸請された。

◇

ところが、大國主命の末の息子の建御名方命といふのが承知しない、これは俺の國を獲りに來たのだ、といつて承知しない、お父さんと兄さんとが說明したが承知しない、部族を率ゐ武力を

以て抵抗した、そこで戰爭となつて出雲から戰つて敗軍して信州まで追ひとめられてしまつた、そこで降參した、降參したから斬つてしまうべきであるのに　天照大神の御使たる武甕槌神は、さういふ慘虐なことはなさらない、命は助けた、のみならず諏訪の一國はお前にやるから、これより外には出るなよ、といつて諏訪に封じた、それが今の諏訪明神である、それは有道の君が有道の政を行はれるのだから、亂暴なことはなさらない、欲のために獲るのではなく、道のために建設するのである、その譯が解つたから大國主命は獻上した。

して見れば日本は日本の日本ではない、世界の日本だ、世界の始末をつける國たる日本だ、そこで　天照大神は世界に光臨せらるゝ神樣だ、　天照大神は一閻浮提統一の本尊に中軸要點として顯はされた、八幡はこれは皇宗を意味した、御代々の　天皇の代表としてあげたのである、これは直接には　應神天皇を祭つた神樣としてある、勿論　應神天皇を祭つた、　應神天皇は大陸文明を日本に誘ひ來つた先祖である、即ち世界統一の準備をなされた天子樣が　應神天皇だ、お母樣のお腹にゐられる時から外國に行つて武德をあらはし、後に大陸の文明を入れて、王仁を呼んで外國の文學を研究なされた、さういふ大規模な天子樣である、然しその八幡大菩薩の內容は近來に至つて研究をとげて見たところが、火々出見尊を祭つてあることがわかつた、火々出見尊は　神武天皇の御祖父さんだが、　神武天皇も火々出見といつた、だから、宇佐八幡は　神武天皇を祭つたのだといふ說が盛んになつた、それから宗像の大神を祭つたことも事實である、この大神に對して直接に神德を仰いで、神功皇后をお祭りした、それから御代々の天子の代表として應神天皇をお祭りした、彥火々出見尊、　神武天皇を宇狹津彥が初めて彼處にお祭りした、一柱騰宮においてお祭りしたといふ歷史的事實からおして、內容は御代々の天子樣だ、だから　皇祖皇宗だ、だから　天照大神八幡と日本の宗廟を中心において、御勸請なされたといふのは、即ち國家問題、世界問題の解決の中軸である證據だ。

◇

そこでその內容を開いて、あらゆる佛菩薩、あらゆる天上界の神々から、阿修羅王から畜生の八大龍王等、十界のすべてを漏さず勸請したのみならず、　天照大神八幡等『體ノ神列ナル、其餘ノ用ノ神豈漏ルベキ……妙法五字ノ光明ニ照ラサレテ本有ノ尊形トナル、コレヲ本尊トハ申スナリ』と日女御前御返事にある、あらゆるものが祭られてある、それは妙法蓮華經の內容を開いて、宇宙萬有の當體をあらはしたものである、一念三千の事實を畫いたものだ、その中堅主體たる南無妙法蓮華經は即ち久遠實成の釋尊の悟りの法、修行の法である、その南無妙法蓮華經の光

明にみんな照されてゐる、光明とは何ぞや、これが所謂私が極力述べてをる功德である、宇宙の大生命が功德化された、功德を背負つた大生命だ、功と德とを具へた大生命だ。

『皇祖皇考、乃チ神乃チ聖ニシテ慶ヲ積ミ、暉ヲ重ネ、多ク年所ヲ歷タリ』

と　神武天皇は仰せられた、　明治天皇は

『德ヲ樹ツルコト深厚』

と仰せられた、即ち功德だ、日本の先祖は昔から功を積み德を重ねて、どうかして社會民生を指導しよう、人類同善、そして世界を一軒の家にしようといふ、人類同善四海一家、これはたつた八字だが、日本國體の全部をいひ現はしてある、　天照大神の神勅も、　神武天皇の御宣言も、全部との中にはいつてゐる、人間は一つの善に集まらなければならぬ、そして世界は一軒の家のごとくにならなければならぬ、それが善がちがつてゐるから衝突が來る、惡と惡とが衝突し、善と善とが衝突するから善が弱くなる、だから惡が強くなる、そこで爭ひが絶えない、爭ひが絶えないから一軒の家の中でさへ爭つてゐる、だから廣い世界が一つになることは出來ない、

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちわかぐらむ

と　明治天皇は仰つしやつた、四海は兄弟であるべきもの、全世界の人類はみな同胞兄弟である

べきのが、何の故にこんなに戰爭があつたりするのかと御述懷なされた。

それで人間が皆一つの善に集まれば、思想も行動も、目的も利害も一つになるから、世界は一つになる、『八紘ヲ掩ウテ宇ト爲ス』といふ、世界を一つの家にするといふ、　神武天皇の御理想があらはれる。

◇

即ち佛法以外において、佛法とピントが合ふやうに、世界統一を計畫した國は日本より外にない、であるから、日本は法華經と使命を同じうしてをる、かるが故に日本に法華經がなければならぬ、法華經は日本でなければならぬ、そこで函蓋相應して日本と法華經とがピツタリ一致した時、一閻浮提の一切衆生は救はれる、即ち世界問題の解決はこれからはじまる、そこで世界統一の基本に、南無妙法蓮華經と　天照大神八幡大菩薩と、それから日蓮聖人とこれを中尊としてある、だから南無妙法蓮華經の下にその寺の住職の名を書いてあるのは、弟子曼荼羅といふものにはあるが、弟子免狀のやうなものにはなるが、これを修行の目的たる本尊と混淆してをる、だから本尊問題が解決しない、解決しないから人本尊、法本尊といふやうな議論が出る、近來もまたさういふことが勃發して來て、本多君が本尊論を出すと淸水君や田邊君が勝手なことを云つて、

どれがどうだかわからないやうにする、私はそんな議論はいらない、本尊の開顯者は日蓮聖人だ、その議論もチヤンと日蓮聖人の御書にきまつてゐる通りに考へないのは頭が曲つてゐる、今さら七百年も經つてさういふことをいふやうでは仕方がない、そこで私は歌を詠んだ、

本尊がまだ定まらぬ宗旨なら開業前の店と知るべし

この歌を前の宗教局長の下村君に見せたら、實にこれに相違ないといつて非常に擊節した。

これは日蓮聖人が、實は『日蓮始メテ之ヲ圖ス』とあるが、はじめて建立したわけではない、大覺世尊が久遠實成の昔において制定せられた本尊だ、

『是レ全ク日蓮ガ自作ニアラズ、多寶塔中大牟尼世尊分身ノ諸佛スリカタギタル本尊ナリ』

とある。

日蓮聖人の自作でさへないといふ、これが直接我等の上に、この佛法の光が王法にあらはれて作用する、『佛法ハ體ノ如ク世間ハ影ノ如シ』、この世間法の上に影響して來た。

◇

そこで始めにもどつて、壽量品の十句の要文を申上げる、『我此土安穩、天人常充滿』といふのは、この中尊を現したものである、本國土妙を明したものである、これが本尊の立場である、そこで、　天照大神が中軸にならなければならぬ、我が此の土は安穩だ、天人常に充滿せり、天も人も充滿する、それは各々滿足してゐることだ、この頃人口が殖えて困るといふ日本は、毎年八十萬人殖えるといふ、丁度四國の土佐一國だけの人口が年々殖えてゆく、十年たつと十殖えることになる、どうしても從來の米だけでは足りない、田や畑に二階三階は出來ないから困る、そこで他の國をとつて人を移さなければならぬといふ問題も起つて來る、私はそんな面倒なことをしなくともよいと思ふ、いくら人間が殖えてもよい、人間には能力がある、それを發揮すれば利益を得る道はいくらもある、そこで私は國業論を發表してゐる、多ければ多いほど國力を增大して天壤無窮の膨張性がある、そこで『我此土安穩、天人常充滿』の本國土妙が御本尊の中心となる、それを三大秘法では本門の戒壇といふ。

曼荼羅といふことは場所といふことだ、茲には壇とある、或は義理で飜譯して諸佛聚といふ、或は矢張り義理で飜譯して功德聚ともいふ、諸の佛の集つてゐる場所といふことだ、それから佛の內容は功德の集つてゐるところだから功德聚ともいふ、けれども正しい飜譯は壇といふ、たゞの壇ではないから淨壇、淨い壇といふ、これは曼荼羅といふことだ、この曼荼羅はいろ〳〵な佛樣が雜然とどつさり集まつてゐるといふのではない、佛のあらゆる功德を集めたといふことが壇

だ、曼荼羅は壇といふことだ、聚るといふことだ、聚るには場所がいる、場所のないところに聚ることは出來ない、その場所、立脚地、そこで國といふものがいる、世界、國家といふものが始めてこゝに入用となる、個人の生命を托するところの場所、同時に我等の仕事の建設地となる場所、また我等の仕事のいろ〳〵の材料を生み出す物質の供給所、それはみな國土である、山林もある、器物もある、もろ〳〵の動物植物、あらゆるものが國土から產出する、それを以て道を行ひ世を救ふ材料とするからこの國土が成佛する、それを集めて人欲の國となし、世を害し人を苦しめるところの惡事のためにその材料を使ふといふのは、三惡道充滿である、

『善ニツケ惡ニツケ法華經ヲ捨ツルハ地獄ノ業ナルベシ』

といふのは、そのことをいふのだ、であるから本門の戒壇といふことは、本尊を事實に現はすことを戒壇といふ、戒壇に立脚しない本尊はない、『我此土安穩、天人常充滿』とは、本門の本尊を戒壇として事實の上に建設することだ。

◇

次に『園林諸堂閣、種々寶莊嚴』、これは本門十妙の中には本壽命妙、本涅槃妙等をかねて現はす、園林諸の堂閣は建物だ、それが單の建物ではなく、種々の寶を以て莊嚴してある、寶を以て莊嚴することは本利益妙だ、佛法で申せばとれは定慧の力といつて、禪定と智慧だ、それで莊嚴といふ、即ち佛の利益だ、お曼荼羅の方でいふと、とれは三部の中の佛部である。

次は『寶樹多華菓、衆生所遊樂』、寶の樹にいろ〳〵の花や實があつて、衆生は樂しんで遊ぶといふ寶の樹に多くの花や實がなるといふのは本感應妙、衆生の遊樂する所なりとは本眷屬妙を現はす、これを現實の上でいつても、產業が均霑しないでは國民の生活が安定しない、『寶樹多華菓』とは產業の榮えることをいひ、『衆生所遊樂』とは生活の安定を意味する、『衆生所遊樂』の本眷屬妙、それは『寶樹多華菓』の本感應妙から來る、この二句は蓮華部をあらはす、因果では修行である。

次に『諸天擊天鼓、常作衆伎樂』、これは諸天が天の鼓を擊つ、即ち本說法妙をあらはす、鼓は怠りを戒めて警戒を與へる、即ちこれは說法妙だ、此處(申孝園)でも太鼓を擊つてそれからとゝ(講堂)に集まる、この間から太鼓の擊ちやうが惡いから注意しろといつてあるが、何かを持つていつてあてれば音はするが、精神がこもつてゐなければならぬ、すべて精神がはいらなければ本當の音はしない、響はしても法界の精神が籠らなければ、人間の心腑にしみわたらない、諸の懈怠を戒めていくのだから、諸天が天鼓を擊つ、これは本說法妙だ、『天鼓自然鳴』とあつて、と

れは果報の鼓だから自然に鳴る、諸天が鳴らさうと思ふとポーンと鳴る、これは佛の無問自説の説法をこれにたとへる、衆生が問ふから佛が話すのでなく、話さなければならぬ必要があつて説くことを無問自説といふ、即ち日蓮聖人の法華經の弘通は無問自説だ、世の中の自然の要求はあるが、誰か氣がついて聞いたのではなく、逃げる後から追ひかけて行つて話す、それが本説法妙だ、『常ニ衆ノ伎樂ヲ作ス』天の鼓を擊つて衆の伎樂をなす、伎樂は舞だ、踊だ、これは本神通妙をあらはす、舞といふものはある一つの意識を形に表現する、即ち神通だ、これは本尊の中では本尊の四方の護り、國を護る金剛部である。

そこで『園林諸堂閣、種種寶莊嚴、寶樹多華菓、衆生所遊樂、諸天擊天鼓、常作衆伎樂』これだけが、本壽命妙、本涅槃妙、本利益妙、本感應妙、本眷屬妙、本説法妙と、この七つを綜合して、これは皆本佛の果德からあらはれる、これを總體して本果妙といふ、また、この中柱の南無妙法蓮華經に日蓮、これが本國土妙、國土の魂は國體といふことだ、國があつても魂がなければならぬ、國體の上から觀察して本國土妙となる。

◇

それから『曼陀羅華ヲ雨ラシテ佛及ビ大衆ニ散ズ』、曼陀羅華といふのは、これは瑞華だ、香もよし色もよし、そして目出度い意味を含んだ花だ、それを天から雨らして佛及び大衆に散ず、佛ばかりでなく大衆にも散ずるといふ、これは即ち曼陀羅華を雨らせるといふそれが、佛及び大衆に散ずるといふ、久遠の本因を行ずることをいふ、本因妙だ、お題目だ、此の(中孝園)の大靈廟の寶塔を見ると、あれは上からだん〳〵に十界が彼處に形にあらはれてゐる、一ばん下が地獄で、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、その上の蓮華が菩薩、南無妙法蓮華經の塔の塔身が佛界である、それに櫻の花が全部散つてゐる、それは十界平等に成佛する形を現はした、蓮華でやるべきであらうが、日本だから櫻でやつた、それが『雨曼陀羅華、散佛及大衆』を形にあらはした、一ペン廟監の許可を得て、足を淨めてあの中を見てもよろしい、無斷で入ることはいけないが、靈廟監の案内を得て上つて見學してよろしい。

十界平等に成佛するとある。

『今本時ノ娑婆世界ハ三災ヲ離レ四劫ヲ出デタル常住ノ淨土ナリ、佛既ニ過去ニモ滅セズ未來ニモ生ゼズ、所化以ツテ同體ナリ』

といふ、この本國土妙は即ち十界久遠の法をあらはす、『雨曼陀羅華、散佛及大衆』は本因妙をあらはす、そして『園林諸堂閣』から『常作衆伎樂』までを綜合して本果妙をあらはす。

◇

かくて戒壇と題目とが一つの本尊にあらはれ、一つの題目の中に本尊と戒壇とがあらはれ、一つの戒壇の中に本尊と題目とが現はれて、國家及び人生に、今の言葉でいへば人間の社會、今の人は社會といふことばかりに重きをおいて國家といふことを閑却してゐる、それといふのは今まで國家主義とか、だらしのない國家主義を振りまはして、眞理に國境なし、藝術に國境なしなんといはれるやうな國家である、日本でいふ國家はそんなものではない、あらゆる國を統轄して一つの生命を與へる、生命の源泉地が國家であるといふのだ、だから國家を離れた社會なんていふものはもぐりの社會だ、さういふ社會を社會としてをるから、社會は安定しない、この社會を收束してはじめて國家といふものが出來る、國家に約せざる社會は、社會そのものが紊亂を免れない、私のいふ國家は、國家社會主義者のいふやうな國家とは違ふ、法華經の洗禮を受けないもぐりのものではない、此方は釋尊や日蓮聖人が世を救ふために苦勞した、その苦勞人のいふことを聞いてゐるのである、國家に結ばれざる社會は放漫の社會で、年中紛亂を來たす、さういふ社會で今の人生は無方針だからその日〳〵の出來心で送つてゐる、そこで刹那主義だの個人主義だのが起る、人はどうでもよい、自分さへよければよいといつて世を亂す、これを一つにしなければならぬ、人生を統一し、國家を統一するといふ廣大なる指導の淵源が、この法華經本門壽量の實義たる三大秘法の活きた法門だ、この活きた人生の解決を閑却して、これを空想の議論と考へては罰が當たる。

◇

そこで當家の學問だ、日蓮主義は一切實學である、萬法を統一する學問だから南面の學といふ、あらゆるものを統轄するものだから大王學ともいふ、さういふ意味の學問が當家の學問、この本門の三學、これが三大事だ、この三大事が王法と佛法との感應となる、如何に感應して如何に統一するか、入我我入といふ、どつちがはいつてどゆちがどつちに赴くのか、その連絡交叉點をよく研究して、この久遠實成の淵源廣大な大法が、最も適切に人生の上に役立つて活潑に働くといふのが、三大秘法のおちるところの要領である。

あとは明日結論する、幸ひ痛みを緩和して、そこばくの奉仕をなし得たことは喜ばしい次第である。

第六講　國家と共に成佛せよ

本日は、三大事の大體を結論することに致します、この事は、この三秘の一つ宛を別にくはしく話しをすれば、隨分多量の時間を要するわけで、こゝでは三秘が一つにはたらく呼吸を合點するといふことが目的であつたので、三大秘法と三つを立てゝあるが、それは前にも申した通り、一體の三用、一つのものゝ三つの用らきをその一面々々から觀察して、これを三大秘法といふのである、その實體は何であるかといふと、妙法蓮華經の一つである。

妙法蓮華經を目的とする時、それが本尊となり、それを我が身の上に移して信念にうつたへて用らかせる時題目となり、それを我が身及び我が事業の上に實際の用らきに現はして行く時戒壇となるので、卽ち一つの南無妙法蓮華經がその三方面から、必要によつてこれを三大秘法と名づけられた。

◇

この三大秘法については、こゝに大體先づ二つの條件を考へて置かなければならぬ、この三大秘法といふものが世の中に現はれたといふこと、及びそれが作用を起しく行くといふことについては、書物や理窟の上で考へ出して、これが出來る筈のものではない、卽ち釋尊の付囑によらなければ出來ない、その付囑も總附屬と別付囑とあるが、その中でこれは別付囑、卽ち塔中別付（たつちゆうえつぶ）の法といつて、釋迦如來が寶塔の中において、特別に傳授せられた法といふ、よつて大聖人も『日蓮タシカニ靈山ニオイテ面授相承セシナリ』といはれてある、靈山別付の法といふ、けれども靈山の地の上ではなく虛空會であるから塔中の付囑といふ、塔の中で上行に付囑したから、一切事はすんでゐるわけであるが、また寶塔からお出ましになつた時に、念のため上行菩薩以外の總ての者に、これを公衆的に發表したのが塔外の付囑、お前はすんだから其方に行つてゐろ、あとの者にいひ聞かせるといふのではない、矢張り上行である、上行だけでなく多くの菩薩一同の前で公式に宣示したといふのが塔外の付囑、であるから塔中付囑の釋尊は坐像である、それから塔外の付囑の釋尊は寶塔からお出ましになつた釋尊は立像の釋尊である、御承知の如く、大聖人御所持の佛像に立像の釋迦佛といふのがある、この立像の釋迦佛といふのは弘長元年伊豆の伊東に御流罪となつた時に、その地頭八郎左衞門朝高が病氣によつて大聖人に懺悔して歸伏した時、その歸伏の引出物として、かつて伊東の海中から自分が得たといふその立像佛を獻上した、それは囑

累品の釋尊である、即ち塔の中からお出ましになつて、寶塔の中から立つて、多くの菩薩に向つて法華經を付囑した、これを塔外の總付囑といふ。

◇

前の塔中の付囑は何を付囑したかといふと、壽量品の肝要名體宗用教の五重玄の五字なりとある、三大秘法の法門がこの時塔中別付囑となつて上行に委托されたのである、それは末法の一切衆生を救ふには、その中心主役たるものは妙法蓮華經の大良藥である、さうしておいて再び塔の中からお出ましになつて、多くの菩薩方に向つて、上行を筆頭に、さてお前達に更めていひ聞かせるといつて付囑されたのが、如來の滅後の後において法華經を護持し流通する事は、それは佛の恩を報ずる方法である、然しその付囑の中にはかういふ一つの除外條件がついてをる、若し法華經を信ぜざる者があつたらば、『如來ノ餘ノ深法ノ中ニ於テ示教利喜スベシ』と、天づけにいつた、法華經の正味の法門がわからぬものがあつたら、この法華經以外の餘の深法、法華經の外の一ばん深い法、それをよく說いて聞かせろ、かういふ附帶條件がある、これは何を意味したかといふと、塔中の別付囑は正味生一本の妙法蓮華經だ、然しそれだけでわからぬといふ場合には、その肝心の正味の妙法蓮華經をわからせるために、それに悟入せしむる爲に、他の介添を用ひるそれが『餘深法中示教利喜』といふ、であるから天台の釋では、餘の深法といふのは別教であるとしてある、別教といふと大乘經の中では華嚴經、般若經、それから方等部の諸大乘經、これは皆一分の圓理、法華經の意味と、それからそれに附帶して隔歷の法門を說いてある、それが別教だ、この經々は別と圓と二つを兼ねて說いたから、それを兼ねるといふ、それから方等部の諸大乘經は、これは大乘及び小乘のすべての法を用ひて說いた、然しこれは比較研究のために說いたから、對翻といつて比べるといふ、それから般若部の諸大乘經は、純小乘の教理は一切用ひない、大小通用の通別圓の三教を說かれた、それは正には圓教を說き傍には別教及び通教を說いたから帶、帶びるといふ、その間に介在する純小乘經、今西洋人などが佛教々々といつてゐるのはこれだ、これは但といつて、雜物もない小乘經だ、かやうに兼但對帶といつて四つに分ける、即ち圓融の圓理を直接に說かないで、その圓理の準備として說いた別教、それをすべて別教といふ、廣くあらゆる法をつくさざるところのない大きいものである。

◇

然しながらそれの結末はあげない、結末の用らき、それが即ち圓融一致するといふことは、圓教でなければ說かない、圓教は法華經だ、法華經を完全な圓教といふ、その外の大乘經は一分の

法華經の意味を、小分用ひてあるからこれを釋して昔の圓といふ、昔の圓といふのは法華經以前の昔に聞いたのであるからで、法華經は今圓、これを今昔二圓といつてむづかしい法門になる、昔も今も圓の理は變らないといふ道理と、今昔二圓の道理が違ふといふ二つの門目は、法華經の教學上かなり重大な問題になる。

ところで法華經はこの圓理を説いて純圓一實、圓も圓、一ぱん究竟した圓理を説いた、その圓理を説く豫備行動たる別教、これは圓理といふものを豫想するから活きるが、若し圓教の道理とはなれてしまつたら、別教は唯廣いといふだけで何の效はない、ところで『餘ノ深法』といふのは、即ち別教であると天台の教學ではこれを判じてあるが、その別教は圓理を豫想した意味からいへば直ちに分の圓理といふことがいへる、然しこの『餘ノ深法』といふのは、天台は本化の化導に遠慮してあるから別教と判じたのである、けれども今塔中別付囑の純圓の、極正味の中心的法華經からくらべれば、同じ法華經の中でも文上の法華經と文底の法華經と違つてをる、文の法華經、義の法華經、意の法華經と三段にも違つてゐる、『餘經モ法華經モ詮ナシ』といはれる法華經、『法華經ハ文字ハアレドモ衆生ノ病ノ藥トハナラズ』といはれる法華經、それらの法華經は適切正味の藥とはならないが、指導法とはなる、これは此の塔中別付の法より外のもので、法華經といへども餘の深法といつてよい。

であるから『餘ノ深法』とは即ち一分の圓理をあげたものだ、聖賢の法でも法華經の圓理と照應するものは、それが釋尊佛乘の種子、即ち佛の種子でなくとも肥料にはなる、肥料と種とは違ふ、けれども肥料がなければ成長しない、肥料は必要である、けれども肥料が即種だとはいへない、佛乘の種子たる種は一念三千の妙法蓮華經より外にない、これが直接に佛因である、その外のものは助緣だ、文底秘沈の妙法蓮華經、この法華經の精神、眼目たる南無妙法蓮華經を以て正味の藥とすれば、法華經の文上のあらゆる本迹二門の道理はその助緣となる、であるから『餘ノ深法』はそこまでいつて構はない、それは此方が天台大師に遠慮することはない、であるから私は『餘ノ深法』といふものは、日本國體の如く世間の法であつても、中心において一ぱん正しく直ちに法華經の眞理に一致するものは『餘ノ深法』といつてよい。

それは塔外の總付囑だ、これをお前方に立會の上でいひ渡すからといつて授けられた、これは日蓮聖人にとつては、佐渡において三大秘法の圓滿にあらはされた時が即ち塔中付囑の全面影を露出した時である、その前に建長五年四月二十八日の宗旨建立の時から、胸中には塔中別付囑のことを秘めてをつたが、表にあらはさない、それをある一部の學者の如きは、日蓮聖人もだん

〳〵智慧がついて佐渡に行つてから本尊を考へ出したなどゝいふ、甚だしきに至つては文永十年に本尊を顯はしたが、未だ不完全だから後に身延にはいつて建治及び弘安の時に、不完全を補つて修正したのが建治弘安の本尊であるから、それでなければ本當の日蓮聖人の本尊でないといふやうなことをいふ、これは怪しからんことである、それどころではない、日蓮聖人の腹の中においては、建長五年に最早そのことは決定してをる、それは大聖人自ら仰せられたことに、『建長五年四月二十八日ニハジメテ題目ヲ唱ヘタリ、コレハ日蓮ノ今者已滿足ナリ』、俺の一切の所願はこれで滿足したのだといつてある、隨自意の日蓮聖人はそれで三大秘法が南無妙法蓮華經となつてあらはれた、それが有象無象の人間に向はずに、天の日輪に向つて唱へた、日本人の身體から日本語を以て、この宇宙の大眞理たる南無妙法蓮華經、釋尊の塔中付囑の大法たる南無妙法蓮華經それが日本人の力、日本の言語を以てあらはれた是れが始まりである、現はした日蓮聖人は日本人だ、南無妙法蓮華經といふのも日本語だ、文字は支那字でも音は日本音だ、そして對告衆たるものは大日輪だ、日輪には支那もアメリカも日本もない、宇宙全部を照らすものだ、即ち全宇宙の一切の總名代として、一ばんの力の表現物としての大日輪、それに向つて南無妙法蓮華經と唱へた、この時の大聖人の胸中には三大秘法が描かれたに違ひない、たゞ順序がなければ現はしてもわからない。

◇

芝居をやつてもさうだ、忠臣藏をやつて先づ主役は由良之助だが、事件の起りは鹽谷判官、その相手は高師直だ、九太夫もお輕も勘平もある、それらがそろつて忠臣藏は出來る、筋書も役者もそろつてゐる、然し早い方がいゝからといつて由良之助も九太夫もはじめから出ては芝居にはならない、何事も早い方がいゝからといつて、葬ひでも一時間の中に告別式をして骨にするといふ世の中だから、又さういふ忠臣藏が出るかも知れない、一幕の中に一切のものが出てレビュー式にやつて萬歳といふやうなものが出來るかも知れない、然しそれでは忠臣藏にはならない、チヤンとそれだけの順序を經て行かなければならぬ、由良之助大立物なりと雖も、序幕から出るわけにはいかない、判官が腹を切つてからでなければ出られない、判官は由良之助を待ちかねてゐた、力彌、由良之助は未だかといつてきいた、さうだらう、腹を切らうといふのに國家老の大石に會つてからといつて待つてゐる譯にはいかない、とつおいつの間に見物の心理をそこに仕向けるる、まだか、まだ參上仕りません、この上は止むを得ない、腹を切らうと刀を腹に突つ通すと、そこに由良之助が來る、これは判官よりも何よりも滿場の見物の方が待ちかねてゐる、それは作

者の腕前だ、いきなり始めに由良之助が出て、報告をうけとつたといふところから始まつたら、底をわつたつまらないものになる、そこでいろ〳〵場面を展開して、判官が腹を切つてから來るので由良之助が引つ立つ、忠臣藏もいよ〳〵本題にはいるとなる、それから先は勘平の腹切りもよからうし、茶屋場もよからう、最後討入となつて本懷を遂げる順序となる、順序を顚倒したら一切は瓦解してしまふ。

◇

今、末法を救ふところの大仕掛の本化の大弘通もその通り、塔中別付の法を始めからそつくりのどから手の出るほど現はしたいが、順序次第がなければ人が承知しないから、『說ハ必ズ次第アリ』で、次第を沒却することは出來ない、であるから本尊は文永十年七月八日でなければ顯せない譯がある、卽ち流罪死罪を身に積んで、その本尊を顯はす人、その修行を敎へる人、それは本化上行であることが何人にも異議のないやうにならなければ人が承知しない、よく神を信ずるとか佛を信ずるとかいふもの〻心理情操の中には、迷信的な頭、或は一種の幻覺で、何だか朧氣に變態心理のやうなところから、淸いは淸いが矢張り規則をふまない變態心理が宗敎には幾らもある、天理敎の先祖だとか、大本敎の元祖だとか、あゝいふ人達には一種不可思議な、妙な普通の道理を越階した不思議なことをやつて有がたがつてゐる、どつちかといふとキリストもその方の親方だ、時代の原則、道理によらなくて、イキナリ奇蹟を現はしたといふことは、その人淸しと雖も未だ理に稱はないものである、道理文證現證が必要だ、であるから萬人ともに成程といふ道理文證現證の三つがそろはなければならぬ、それでなければならぬ、それでなければ萬代不易の敎とすることは出來ない、さういふ感情的なことや、御夢想のやうな迷信的のものではどんな力があつてもそれは一時性のものである、何時消えるかわからない、萬代に向つて消えないといふ事は確固たる道理の上に立たなければならぬ。

然しそれまで待つてゐるといふことは出來ない、先づ火蓋をきらなければならぬ、それでから建長五年に題目を唱へた、然し題目の內容を顯はす本尊は、顯はす人が上行であるといふとの證據がそろはなければならぬ、それは他人がどさへてくれるから、此方ばかりでいふわけにはいかない、三類の强敵が競ひ起つて、そして法華經の行者を迫害する、その迫害が經文の通りに現はれなければならぬ、だから『如來現在猶多怨嫉』、如來在世の時でも怨み嫉む者が多い、況や如來の滅度の後に於てをやと釋尊が明言された、惡世末法五濁爛漫の時になつたら、必ずこの法華經に敵するものが多い、その敵は必ず害を加へようとする、怨嫉の結果迫害となつてあらは

れる、惡口罵詈、打擲刄傷、流罪死罪、いろいろな迫害を法華經の行者に加へるであらうと豫言された、その通りにならなければこの大豫言者は落第だ、よつて緣起部の中においては、

『文永八年太歲辛未九月十二日御勘氣ヲ蒙リ佐渡國ニ遠流セラル同ジキ十年太歲癸酉七月八日日蓮始メテ之ヲ圖ス』

とある、その文永十年四月二十五日に「觀心本尊抄」を書かれ、御本尊の內容を理義整然と說明された、これは「如來滅後五五百歲始觀心本尊抄」といふ、それからこれを實物にあらはして、圖しいだしたのが四月五月六月七月と數ケ月の後、一の谷に移つて七月八日にはじめて顯はされた、これは靈山塔中において、面授口訣されたる別付囑の、いよ〳〵の紐を解いて中の箱を開けるのだ。

題目は開宗のはじめにあげてある、本尊は一代の中心たる佐渡において顯はされた、佐渡においては「觀心本尊抄」及び「開目抄」をあらはした、「開目抄」は御流罪になつた翌年の二月、我が身本化上行であるといふことを名乘つた御妙判だ、法華經を弘めるものは安穩であるべきにこの通り艱難をする、それでは俺は法華經の行者でないであらうか、それとも諸天が護らないのであらうか、これは現實に於て解釋のしかねることである、その疑ひに對して、そも〳〵日蓮が何ものであるかといふことを解決する爲に、『此ノ疑ヒ此ノ書ノ肝心』といはれた、その前に龍口の法難において首斬られんとしたが、終に斬ることが出來ない、それから佐渡にお渡りになつた、そのことをば翌年追想してお書きになつた、御文章に

『日蓮トイヒシ者ハ、去年九月十二日子丑ノ時ニ頸刎ラレヌ、此ハ魂魄佐渡ノ國ニイタリテ、返ル年ノ二月、雪中ニ書シテ有緣ノ弟子ニ送レバ、怖ロシクテ畏ロシカラズ、見ン人何ニ怖ヂヌラン、此ハ釋迦多寶十方ノ諸佛ノ未來日本國當世ヲ映シ給フ明鏡ナリ、記念(かたみ)トモ見ルベシ』

から名のられてある、この法華經の現文に日本國も一切衆生も世界中も映つてをる、その鏡に映つた相はこの通り、法華經誹謗の故に國が亂れるとチヤント映つてゐる、さればこの鏡には、これを救ふところの上行も映らなければならぬ、であるからその前に、日蓮といふものは死んでしまつたのだ、これは魂魄佐渡が島に渡つて、返る年の二月雪中に書いた、これは魂だ、これは何を意味してをるか、この藝術的に筆をお染めになつた大文章には、卽ち大聖人の發迹顯本といふことが現はされてある、凡夫の日蓮が死んで魂の日蓮がこゝに來たといふことは、日蓮聖人の大自覺をあらはす、こゝで上行の資格といふものを明瞭に、念入りに承認させておいて、その翌年「觀心本尊抄」を著された、その「觀心本尊抄」をおかきになつたのは四月の二十五日で、四月

は月末で五六と二月準備して、本尊の曼荼羅の圖式について考案をお練りになつて、その結果とのお曼荼羅を七月八日にお顯はしになつた、如何にも秩序整然としてゐる、丁度その開宗が曾て類のない堂々たるものであるやうに、その本懐を顯はす御本尊の顯發も、一糸亂れず條然として大本尊をあらはされた、これは經證身に具足するが故だ、この時でなければ顯はすことが出來ない、上行といふ相場が決つてしまはなければ顯はすことが出來ない、それは上行に寶塔の中で釋尊が授けられた法だ、他の者のあづかり知らない法だ、上行でなければ顯はせない、上行といふことが決らないと書くことが出來ない、だから『說ハ必ズ次第アリ』で宗旨建立の時題目は發表したが、本尊は御一代の最中心、佐渡の最中心たる文永十年七月八日にこれを御顯發になつた。

◇

次に本門の戒壇だ、これは何時あらはす、これは後にある、題目を弘めて本尊を輝かして、一閻浮提の一切衆生が本尊できまつて一閻浮提の一切衆生の精神思想を題目で統一して、その上で戒壇が建つ、だから戒壇は未來だ、これを『事ノ戒法』といふ、三國並に一閻浮提の衆生悉く南無妙法蓮華經と唱へて、その發祥地たる日本に來て日本の　天皇の膝下で大戒法を受けて、世界中の人がはじめて本當の人間になる、その時が來れば始めて戒壇が出來上る、その戒壇は　日本天皇の勅命によらなければ出來ない、だから　日本帝室は本門戒壇の御願主となられる、　桓武天皇が迹門の戒壇の御願主であられた如く、　桓武天皇と傳敎大師の御關係の如く『王臣一同ニ』南無妙法蓮華經と唱へる時が來れば、必ず本化の菩薩がまた出現する、日蓮聖人が再び世にお出ましになる、日蓮と名乘らなくても、その時にゐる偉人の大きな人でもよい、大きな人がなければ大勢の正しい人が寄つてもよい、何でもよい、それと日本の帝室とが一致されて、それから國民が一致する、それは世界中の人類のために建てるのだから、卽ち世界統一のために建てるのだから日本でも一ばんいゝ場所でなければならぬ、

『靈山淨土ニ似タラン最勝ノ地ヲ尋ネテ戒壇ヲ建立スベキモノ歟、時ヲ待ツベキノミ』

とある。

本門戒壇は時を待たなければ建つことは出來ない、何故ならば、王臣一同に歸依しなければ本門戒壇は建たない、昔のやうに帝王だけが歸依したら臣民は何うでもよいではいけない、さういふ貴族的の佛法ではいけない、

『王法佛法ニ冥シ、佛法王法ニ合シテ、王臣一同ニ三秘密ノ法ヲ持チテ』

とある、帝室と人民とが一致しなければならぬといつてある。

そして、この法華經は政治の上からいへば政治の源だ、

『疾ク言ヒタランニハ政道ノ法ゾカシ』

とある、また人倫道德の上からいつたら人倫道德の源だ、社會組織の上からいつたら社會組織の標準だ、さうなつて始めて戒壇は建立されるから、戒壇は後にある。

『時ヲ待ツベキノミ』

といつても、默つてゐてはいけない、その時をこしらへなければならぬ、牡丹餅が棚から落ちるといつて待つてゐるやうな事ではいけない。

『廣宣流布ハ大地ヲ的トス』

とあるから、祖師の利益で弘まるといつてもそれはいけない、時をつくるべく待たなければならぬ、『英雄時をつくる』といふが、この妙法弘通の方は大英雄的の勢である、君子とも英雄とも豪傑とも聖人とも、あらゆる最高級の言葉をもつて形容しても、形容しきれないほどの大きな仕事だ、であるからして『時ヲ待ツベキノミ』といふのは、向うから來る時を獨りで待つてゐるのではない、みづからその時を來らすべく準備しなければならぬ、努力しなければならぬ。

◇

であるから『一天四海皆歸妙法』といふことを、我等の誓願事業として、一擧手一投足の間にもこれを忘れてはならない、であるから、題目は建長五年、本尊は文永十年、戒壇は未來と順序があるから、こゝで三大秘法とその原則を大聖人がお建てになつたから、これを建立といふ、事の三大事を建立するといふ、建立は大聖人が建立された、この建立が後に大成して成就する、それは世界中が一つになつて題目を唱へるといふ時が來なければならぬ、來らすべく我々は努力する、その努力が我等の生命であり、持戒なり仕事である、これがあるからはりがあつて生きてゐられる、これがなかつたら蟲けらのやうに日を送つてしまふ。

我々人類は活きんが爲に何てことをよくいふが、活きんが爲にといふことは一轉すれば食はんが爲になる、活きんが爲に食ふならまだいゝ、食はんが爲に活きてゐる奴がある、人間は活きることよりももつと大事なことが一つある、それはその活きることを意義あらしむることだ、それは活きることよりも大事だ、卽ち意義ある活き方をしたいと、これで本當の人間だ、無意義に活きてゐるものは唯活きんがためだ、だから生活本位だ、活きるためには何んなこともしなければならんといふことを賢明のやうに思つてゐるが、人間は必ずしも活きてゐなければならんことはない、この天地法界の目から見たら、人間の生死なんてものは何でもない、何等の意義なく活き

てゐるものが、死なうがどうしようが、天地法界には何等の關係もない、そこで人間は意義ある生を持たんければならぬ、卽ちこの妙法の持者となり、妙法の護持者となり、妙法の弘通者となつて、本領たる誓願を全うしようといふことの爲に活きてゐなければならぬといふその生命は、實に大した價値だ、その人の活きるためには諸天善神が悉く力を揃へてこれを守らなければならぬ、『諸天晝夜ニ常ニ法ノ爲ノ故ニ之ヲ衞護ル』とある、法が大事だから衞護る、法には關係なし唯自分が活きたいでは、諸天善神は守らない、勝手に死ねといふ、神樣の前に行つて無事息災に守つて下さいとか、家內安全とかいつて拜むけれども、法に關係がなかつたら、安全でなくても早く死んでも、そんなことはどうでもよいといふことになる、勝手にしなさいとなる、俺は知らんとなる、ところが法の爲に生存を續けなければならぬとなつたら、諸天善神の方から何うか守らせて下さいと來なければならぬ、國もその通り、人もその通り、その意義を成就する爲に信仰といふものが要るんだ。

◇

「觀心本尊抄」に『天晴地明』といふ言葉がある、

『天晴レヌレバ地明ラカナリ』

天がカラリと晴れゝば大地の一切萬事が分明にわかる、天とは何ぞや、卽ち法華經である、地とは何ぞや、卽ち一切世間だ、

『法華ヲ識ルモノハ世法ヲ得ベキカ』

とある、天が晴れゝば地が明らかだ、法華を識れば世法が明らかになる、これを大聖人は

『法ヲ知リ國ヲ思フノ志尤モ賞セラルベキノ處、邪法邪教ノ輩讒言スルノ間、久シク大忠ヲ懷イテ未ダ微望ヲ達セズ』

と仰しやつた、法を知り國を思ふ、法とは何ぞや、これは二つある、

佛　法

世　法

だ、法を知り國を思ふ、法を知つたり國を思つたりではない、法を知るが故に國を思ふ、いくら國を思つても法を知らなければ駄目だ、愛國心、國家思想とよく世間でいふが、それは無標準、無定見で國を愛する、俺の國だから愛するといふだけで、さういふ淺薄な愛國心ならば、禽獸の境界と大して違はないことになる、人間は高級なる國家思想といふものを持たなければならぬ、それは何であるかといふと、法の原則に叶つた意味で國を思はなければならない。

それだから法を知り國を思ふ、國とは何だといふと、國の魂、國の相だ、國の魂とは國體である、國の相とは組織である、それは所謂國家である、國家といふのは先づ世間かいなでにいふ國といふことだ、國體とはその國家の生命をいふ、日本では國體といふ言葉は可なり前からあるけれども、國體とは何んのことだかはつきりしてゐない、國體の體は意といふこと、法則といふことだ、『體ノ字ハ禮ニ訓ズ、禮ハ法ナリ』と天台もいつた、又意だ、だから體といふことは身體と意と兩方にわたる、それを綜合して一つの法則とするから、國家の原則である、「くにつのり」といふ、この國家の生命が土臺となつて國家組織が始めて完全に活きて行く、この國家の生命から離れて、たゞ人間が集つて生活する共同組織といふ考へであれば、その國家は唯人間の集つてゐる場所、人間の巣といふことになる、同じ巣でも蜂の巣なんかは餘程巧みだ、さういふ意味の人間の巣は、蜂の巣にも劣つた巣だ。

そこで國家には國家の體系組織といふものが要る、それは嚴密な理法によつて作られなければならぬ、日本の國家は一君萬臣の組織だ、　天皇が上にあり下萬臣が　天皇を取りまいてゐる、ところでこの君臣關係とは　天皇が一人尊くて臣民は奴隷であるといふのではない、何處の國でも大抵昔は國民は奴隷にされてをつた、國王の奴隷であつた、日本ばかりは昔からさうでない、國民は國の寶とされてある、　神武天皇のお言葉に國民のことを呼んで「おほみたから」と仰せられた、文字では「元元」といふ字を當てゝあるが、日本の言葉ではおほみたからだ、舍人親王がおほみたからのことを漢字を當てるのに「元元」といふ字を當てた、日本の國家組織は國民をかういふ風に大切にしてある、おほみたからといふのは、大いなる寶といふことだ、何故人民が寶であるかといふと、この人民は唯この國土の上で、國土から出て來たものを食つて生きてゐるといふわけではない、　天祖皇大神がこの日本を撰ばれて、天の道を布き行はうといふことの爲に、貴い仕事を負擔してゐるその當事者だ、であるからおほみたからだ、おほん寶だ、このおほん寶といふことを「元元」の二字を當てゝある、即ち一君萬臣の組織は、天子上にあつて下萬民がこれを取りまいてゐるのは、即ち體系をなしてゐる、民が身體で君が精神といふ體系をなしてゐる、さういふ國家なんだ、日本といふ國家は……。

であるから法華經の國になるのだ、それであるから法華經が本當に合ふのだ、かういふ國を手本にして世界中を救はなければならぬ、それが日本の國家なのだ、かういふ國家の理由を考へないでたゞ民族の集合を名づけて國家といひ、その勢力の分張を名づけて國家といふ、さういふ利害關係の下に立つた國家なら人間の巣である、そんな國家は亡びても興つても衰へても榮えても

廣がつても縮んでも何でもない、日本の國家ばかりはそれはいけない、天壤無窮でなければならぬ、だん〳〵延長していかなければならぬ、天業を恢弘し天下に光宅しなければならぬ、卽ち弘まつていかなければならぬ、然し戰をして領土を擴める必要はない、世界中の人間の心の中に日本國體の理想を弘めればよい、世界の人が皆日本國體を知つて來たら、此方から降參しろと言つて行かなくとも向ふから合掌して來る、南無釋迦牟尼佛、南無妙法蓮華經といふことになる。

◇

その世界が精神的に日本に歸依した時に本門の戒壇が建つ、それはいつのことだといつて、人がかういふ話をすると空想か何かでいふやうに思ふ、少し大きなことを云ふとこの頃の人は膽玉が小さいから誇大妄想だといふ、世界を一つにするくらゐのことは何でもない、芥子のやうなものだ、宇宙の大眞理から見たらまるで數にもならぬやうなものだ、さうだらう、一小世界といつて小さい世界の中にも須彌の四洲がある、東には弗婆提、西には瞿耶尼、北には鬱單越といふ洲がある、その中の南の一國が南閻浮提で、これが全世界だ、一小世界の四分の一だ、その一小世界が幾つも集まつて百億の須彌山なんて話から、大千世界なんて話になつたら、今の人間は膽をつぶす、正直に佛敎を調べて見たら、誇大妄想ぐらゐのことでは追付かないほど大きなことがある、それはさうだらう、今現顯に見るところの天の星辰日月、すなはち星だ、あれは皆一つの世界だ、あの先にどのくらゐ世界があるか知れない、地球よりもつと大きなのがいくらもある、あれが交通しないで此方は此方だけになつてゐるが、だんだん交通が發達していつて、飛行機のやうなものが發達していつたら、月の世界、星の世界に行く時代が來んとも限らない、先々まで考へたら無限大の大きなものだ、それでも宇宙の大眞理といふものからいへば、未だ一小部分だ、その天地法界の大眞理の源を握つてをるといふのが法華經の行者だ、現實の世界ぐらゐを大きいなんて考へたら、うつかり溝板もふめない。

◇

小さいものと云へば顯微鏡でも見えない小さいもの、極めて微細なものそれは心だ、その心は一晝夜に八萬四千たび動く、これは誰が勘定したか知らないが、その八萬四千たび動いてゐる心の思ひといふもの〻中に、一念の中に三千法界を具してゐる、さうすると一念三千の三千といふ數量を八萬四千に乘けて見たらかなりの數だ、それだけのものを持つてゐる、それがどこにあるかわからない、そんなに小さいものだ、その小さなものが大千世界を蔽ふところの氣力、力を持つてゐる、大の大を極め、小の小を極め、天地法界を一心一刹那に覆ひ、そしてそれを己の力の